Fukushima Teacher's INTERVIEW

Rise up School

起きあがる学校

3.11から10年

—福島県双葉郡の先生へのインタビュー—

Fukushima Teacher's INTERVIEW Rise up School

起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビューー

双葉郡８町村の位置

震災時の双葉郡内の小中学校

※学校の位置と名称は 2011年当時のものです。

年表

2011. 3	東日本大震災発生・原発事故により避難指示発令
4	大熊町立熊町、大野小学校、大熊中学校が避難先の会津若松市で再開 川内村立川内小学校、川内中学校が避難先の郡山市で再開
8	浪江町立浪江小学校、浪江中学校が避難先の二本松市で再開 広野町立広野小学校が避難先のいわき市で再開
9	富岡町立富岡第一、富岡第二小学校、富岡第一、富岡第二中学校が避難先の三春町で再開
10	広野町立広野中学校が避難先のいわき市で再開
2012. 4	川内町立川内小学校、川内中学校が村内で再開 楢葉町立楢葉南、楢葉北小学校、楢葉中学校が避難先のいわき市で再開
8	広野町立広野小学校、広野中学校が町内で再開
2013. 4	葛尾町立葛尾小学校、葛尾中学校が避難先の三春町で再開
2014. 4	双葉町立双葉南、双葉北小学校、双葉中学校が避難先のいわき市で再開
2015. 4	広野町に福島県立ふたば未来学園高等学校が開校
2016. 4	浪江町立津島小学校が避難先の二本松市で再開
2017. 4	楢葉町立楢葉南、楢葉北小学校、楢葉中学校が町内で再開
2018. 4	浪江町立なみえ創成小学校・中学校が町内で開校 葛尾町立葛尾小学校、葛尾中学校が村内で再開 富岡町立富岡第一小学校、富岡第二小学校、 富岡第一中学校・富岡第二中学校が町内で再開（三春校は継続）
2019. 3	浪江町立幾世橋小学校、請戸小学校、大堀小学校、苅野小学校、 浪江東中学校、津島中学校、浪江中学校が休校
2019. 4	広野町に福島県立ふたば未来学園中学校が開校し、中高一貫校になる
2020. 3	浪江町立浪江小学校が休校
2021. 3	浪江町立津島小学校が休校 川内町立川内小学校、川内中学校が閉校
2021. 4	川内町立川内小中学園が開校
2022. 3	富岡町立富岡第一小学校、富岡第二小学校、 富岡第一中学校、富岡第二中学校が閉校（三春校も閉所） 大熊町立大野小学校、熊町小学校、大熊中学校が避難先の会津若松市で閉校 楢葉町立楢葉南小学校、楢葉北小学校が閉校
2022. 4	富岡町立富岡小学校、富岡中学校が開校 大熊町立学び舎ゆめの森が避難先の会津若松市で開校 楢葉町立楢葉小学校が開校

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故は、被災地域の生活や環境を大きく変えました。中でも、福島第一原子力発電所が立地している福島県双葉郡は、全８町村が避難を余儀なくされ、学校教育もまた大きな変化を強いられました。８町村はそれぞれの避難先で教育活動の在り方を検討し、子ども達の教育環境の整備に奔走。避難先で仮校舎や仮設校舎を設置する町村や、避難先の地域の学校への区域外就学を促す町村など、各々が未曽有の状況下での最善策を模索してきました。

あれから10年の月日が流れ、双葉郡では多くの町村が元の地域への帰還を果たし、段階的に学校が再開されてきました。震災の経験は教育現場にも反映され、「震災で子ども達が得た経験を、生きる力に」という思いから、地域を題材にした双葉郡独自の探究学習が始まりました。その探求学習が、2014年に双葉郡の公立学校で始まった「ふるさと創造学」です。

私達は、ふるさと創造学の活動を通じて、「小中学校の子ども達と、メディアコンテンツを制作する取組み」を行ってきました。その過程では、地域住民はもちろんのこと、保護者や学校の先生達にも取材をさせていただく機会がありました。そうした際に、先生達が子ども達の取材に答える内容が、あまりにも新鮮だと感じると同時に、「先生達の体験や想いが、報道や研究対象として取り上げられる機会が少なかったのではないか」という疑問を抱くようになりました。

震災と原発事故から10年が経った2020年、新型コロナウィルスの感染拡大によって、世界は激変しました。国内においては、感染拡大防止の措置として学校が休校になるなど、子ども達や学校を取り巻く環境にも大きく影響がありました。

私達の世界では、災害や戦争は常に起こりうる状況にあります。2011年以降に福島県の先生達が体験したことや想いを記録していくことは、これからの教育を考える上で、大切な財産になるのではないでしょうか。

こうした背景から、双葉郡の教育に携わった先生達へのインタビューを通じて、震災以降の体験や想いを記録する本企画がスタートしました。今回、15人の先生達にインタビューを行いましたが、決して、この先生達がそれぞれの地域や学校を代表する証言をしたということではありません。あくまでも、一人の人間として、あの災害とどのように向き合ったのか。また教員として、どのような体験や想いを持っていたのかという、個人のケースとしてのインタビューを行いました。

また、10年を超えての振り返りを依頼したため、記憶が曖昧な点などについても、詳細を確認しない方針を取り、先生達には自由に語っていただきました。事実と異なる点も多々あるかもしれませんが、編者の責任においてご了承いただけますと幸いです。

一般財団法人 リテラシー・ラボ
代表理事
千葉 偉才也

目次

Fukushima Teacher's INTERVIEW Rise up School

起き上がる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビューー

2 双葉郡８町村の位置

4 震災後の双葉郡内の小中学校年表

5 はじめに

6 目次

8 広野町
9 柴口正武 先生

15 楢葉町
16 菅野知加子 先生

22 富岡町
23 鈴木 博 先生
29 小野美佳子 先生
35 武内雅之 先生
41 志賀 仁 先生

47 川内村
48 渡邊智幸 先生

54 大熊町
55 落合志保 先生
61 小林正和 先生

67 双葉町
68 佐藤大志 先生
74 松本涼一 先生

80 浪江町
81 門馬 貞 先生
87 荒 寿子 先生

93 葛尾村
94 日下雄一郎 先生
100 佐藤 武 先生

106 刊行に寄せて
福島県立博物館
主任学芸員　筑波匡介

107 おわりに

広野町

Hirono-machi

広野町は浜通り地方の中部、双葉郡では最も南に位置し、楢葉町といわき市に隣接している。2011年３月時には 5490人が暮らし、町内には広野小学校、広野中学校が立地していた。震災と原発事故以降は、広野小学校は2011年８月、広野中学校は同年 10月に避難先のいわき市で再開。2012年８月には、小中学校共に町内での教育活動を再開した。現在、広野町には広野小学校、広野中学校の他に、2015年４月に開校した県立ふたば未来学園中学校・高等学校が立地している。2022年２月時の住民登録者数は4702人、町内居住者数は4232人。

起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビュー

広野町

柴口正武先生

しばぐち・まさたけ

浪江町出身、中学校教諭。教科は数学。2011年３月の震災発生時は広野町立広野中学校に勤務。2021年度インタビュー時は、浪江町立なみえ創成中学校勤務。特技はイラスト描き、趣味は読書。

震災時、広野町立広野中学校１年生の学年主任を務めていた柴口正武先生。先生は、被災直後の生徒がいない状態での学校業務に虚しさを感じながら、各地へ散り散りになった生徒達のことを常に気にかけてきました。しかし、別の中学校との「兼務」についてからは、遠くまで直接会いに行くことも困難となり、「県外へ行った子には、“取り残された感”があったのではないか」と振り返ります。その当時、一教員として、本当は教育行政に対してどんなことをしてほしいと願っていたのか。震災から10年が経った今、先生に改めて伺いました。

津波の印象が全くなかった場所　原発災害にほとんど誰も関心がなかった

――まずは、2011年の３月11日の地震発生時、何をしていたか教えてください。

柴口　当時は広野中学校１学年の学年主任でした。担当教科は数学です。広野中は全校生徒が約230人の学校で、１学年は70人程でした。地震発生時は、卒業式が終わって皆でお昼ご飯を食べて、「体育館の片付けをそろそろ」と思いながら、職員室で休んでいた頃です。子ども達は、バレー部の子だけが大会の関係で残っていました。

揺れが始まった時は、ビックリするしかなかったというか。机を押さえているのか、自分の体を支えているのか分からないような状態で、身動きすらできない状態でした。そして、とりあえず一旦収まったと思った段階で、職員もバレー部の子達も校庭に避難しました。

――津波のことは、考えましたか？

柴口　校庭に出てから、まず車のラジオを流しました。この辺は福島の

ラジオ局の電波があまり入りません。代わりに仙台のTBC東北放送の電波が入り、そこで真っ先に聞いたのが、仙台の海岸に7mの大きさの津波警報が出たということでした。それを聞いて、皆びっくりしてしまって。広野の一部にも1時間遅れくらいで津波が来たのではないかと思います。広野中は高台にありましたので、海が黒ずんできて、家の屋根がこちらに向かって動いているのが見えました。また、広野駅の方から電車の乗客が、うちの学校の方に避難してきたこともあり、その人達の避難の受け入れをどうするかということも、話し合っていました。

そしてこれはよく言われてきたことなのですが、この浜通りは、岩手のようなリアス式海岸ではないから、津波は来ないと言われてきました。我々が子どもの頃も、「ここの海岸は直線だから、津波なんて来ないんだよ」と教えられて育った。だから、津波の印象はほとんどなかったです。でも何年か前には、実際に津波が来ているのですが。

── 津波や原発からの避難については、震災前の避難訓練ではあまり考えられていなかったのでしょうか？

柴口　例えば、浪江町の請戸小学校でも、津波の時の避難経路は設定していたにしても、訓練で実際にやっていたかは分かりません。とにかく請戸小は「津波の時には大きな山に逃げる」ということと、そのルートだけは先生方も知っていて、逃げたようです。

そして原発災害については、はっきり言ってほとんど皆、関心がありませんでした。年に1回実施される原発災害の避難訓練も、参加する・しないは各学校の判断だったんです。私は大熊中と広野中に勤務しましたが、どちらの学校でも参加していません。

── 震災当日、校庭に全員で移動した後、生徒達はどうしましたか？　それぞれに帰宅させたのでしょうか？

柴口　しばらくは、子ども達も学校に置いていました。大型のテントを張ってその中に入れていましたが、そうこうしているうちに広野駅から乗客が避難してきたので、子ども達には外に出てもらいました。あの時は基本的に、保護者のお迎えを待って帰宅させました。最終的に我々が帰るとなったのは、夕方5時半頃だったかなと思います。ただしそれは「家庭を持っている人」で、独身の先生や管理職はそのまま待機しました。私の場合は、高校生の娘もいたので、とりあえず帰らせてもらいました。

── 先生のご自宅とご実家は、浪江町だと伺っています。夕方になって先生がご自宅に戻ってからは、ご家族に会えましたか？

柴口　上の娘は、大学を終えて家に。2番目の娘は原町高校にいました。町内で別に暮らしていた両親は、津波の関係で高台への避難をするよう言われて、私の自宅が高台だったため、こちらに避難してきました。

その後、私が高校まで娘を車で引き取りに行きましたが、大変な時間がかかって、家に着いたのは夜11時半頃でした。道路の被災状況も酷く、わき道を縫っていくようにして行きました。一番酷かったのは広野から帰ってくる途中です。通常では、広野から自宅まで50分の道のりですが、あの日は3～4時間かかりました。

── では、「原発から遠くに逃げなくては」ということは、どの時点で考えましたか？

柴口　私は組合に入っていて反原発や脱原発の運動をやっていたのですが、11日にはそのことに頭が回りませんでした。「とりあえず娘を迎えに行かなくちゃ」ということや、家の中もぐちゃぐちゃで「どこに寝るか」ということで頭の中がいっぱいで。

両親が住む実家の片付けに行ったのが12日の朝6時前でしたが、その時に防災無線か、ヘリコプターから、「避難指示が出ました」と聞こえたので、「えっ」と思いながら、津島の方に避難しました。でもその時点では長引くとは思っていなかったので、とりあえず通帳を持って、飼っていた猫を連れて避難しました。

── 避難は、どのようなルートを辿りましたか？

柴口　まず津島に行って、昼の3時頃に津島中学校に避難しました。そこで私の中学の同級生と会ったのですが、話をしていた時にその女性の携帯電話が鳴って、「今原発が爆発したから津島も危ない。もっと遠くに逃げろと、夫から言われた。柴口君も逃げた方がいい」と言われました。そこから今度は、福島市の方に避難を進めます。両親も高齢なので、運転していて宿泊施設を見かけたら、とにかく入っていくのですが、どこもいっぱいか、営業できませんと言われるかでした。仕方なく先に進んで、福島の県職員の宿泊施設で「とりあえずロビーでいいから貸してくれ」と頼みました。本当にロビーで過ごそうかと思ったのですが、うちの両親がいたので、「これは避難者だ」いうことで、2部屋くらい貸してもらうことができました。

── 避難をしている間、学校とはやりとりをしましたか？

柴口　ひょっとしたら「山形の方に向かって避難しています」という電話は途中でしたかもしれませんが、学校ときちんと連絡を取り始めたのは、山形に避難してからだったと思います。また、大変ではありましたが、3月20日頃までに、8割方の子ども達の避難先や安否の確認は終わっていました。そしてその頃に出た初めての町教育委員会からの指示が、「避難先の最寄りの教育委員会に行って転校の手続きをしてもらうよう、各家庭に伝えて」というものでした。その旨を各家庭に連絡しているうちに、「教員は学校再開に向けて集まるよう」にという連絡が3月下旬頃に来ました。その後、4月1日からは、いわきの福島高専（福島工業高等専門学校）の図書室に通うことになりました。通勤できる範囲に家を探したのですが、当時は地震で被害があって、なかなか貸してもらえる状態の家やアパートが見つかりませんでした。ようやく見つかったところが郡山で、すぐに予約して、郡山の家を押さえ、そこから福島高専まで1ヶ月程度通いました。

── 4月1日から、先生は福島高専で具体的にどのような業務をしましたか？

柴口　前提として、広野が双葉郡の他の町村と違っていたのは、立ち入りが可能だったことです。町全体は地震の被害もあったため、全町民避難となったのですが、広野に関しては可能だったので、まずは学校に行って指導要録や通知表を持ち出してきました。そして福島高専の図書館の一角で、集まった先生方で通知表や指導要録の記入をしました。

子ども達はそれぞれの避難先の学校に転校し、転校先での授業が始まっていたので、特に3年生には、教材会社から無料で提供された受験対策テキストを送付したりしました。それから、出来上がった通知表を配って歩くようなことを4月中はしていました。4月の時点では、「まだどこにいるか分からない」または「居場所は分かったけれど、なかなか連絡が取れない」という生徒は、学年で1人か2人。多くはすぐに連絡が取れる状態だったので、「これから通知表を届けに行きます」というやりとりはできました。

── 生徒がいない状態で学校業務をするというのは、どうでしたか？

柴口　虚しさはありました。いわゆる一般な年度末・年度初めの業務なので、それを粛々とやるしかない。ただその当時、広野中で一つ「こういう風にしましょう」と取り組んだのは、「先生方で手分けして、子ども達の転校先に顔を出しましょう」ということでした。その当時、福島県内であれば、石川町やいわき市に大勢の子ども達が行ったので、直接出向いて。県外に転校した子については郵送となってしまいましたが、県内の転校先には通知表や通信を直接渡しました。

ただ、埼玉の三郷市も集団避難の場所になっていて、広野中からも20人程が転校していたので、そこには先生方で車を乗り合わせて出向いて、子ども達に会いました。

── 会いに行った時、生徒達の顔つきや様子で印象に残っていることはありますか？

柴口　三郷でのその日は、一緒に給食を食べて、先方がセッティングしてくださった集会に参加しました。子ども達一人ひとりというよりも、何人かのこちらの教員が、子ども達の前で少し挨拶をして。もちろんそれが終わってから、何人かに声はかけましたけれどね。

子ども達は皆、不安そうにはしていました。会って話はしましたが、言葉にならないですよ。結局、我々は子ども達に対して何もできていない。やったことと言えば、通知表を書くぐらいだったから。何か支援してあげるとか、何かこう気の利いた言葉をかけてあげるとか、そういうことができなかった。別れて1ヶ月以上経ってから顔を見ると、やはり切ない気持ちになりました。

兼務という立場は「いい思い出にはならなかった」

── その後は、柴口先生も「兼務」という形で、どこかの学校に所属しましたか？　その時にはどのような

業務をしましたか？

柴口　当時は教員全員に「兼務」が発令されていて、私の場合は石川郡石川町の石川中学校でお世話になりました。数学の授業のTT（チーム・ティーチング）に、補助的な立場の教員であるT2として参加するという立場です。私の場合だと、少し理解が遅い子の所を回ってアドバイスしたり、小テストの採点をしたりしていました。

── 兼務という経験は、先生にとってどのようなものでしたか？

柴口　私の場合は５月からのたった３ヶ月のことでしたが、辛い３ヶ月でしたね。自分で授業ができない。職員室に自分の席はあるけれど、割り当てられた業務があるわけでもない。場合によっては、「今日はテストだから職員室で休んでいてください」と言われたりもして。それぞれの学校にとっては、何人かの避難した子を受け入れたとしても、教員の数は足りているので、はっきり言ってしまえば「いなくてもいい存在」です。もちろん受け入れ先の先生方はとても優しくしてくれますが、気を遣っているんですよね。私にとってはその気遣いが逆に惨めさが伴ってくるというか、いい思い出にはならなかった。

── 石川中に避難をしていた広野中生の心のケアも、担当していましたか？

柴口　はい。石川中自体には３人か４人くらいしか転入しませんでしたが、近くに小学校があったので、場合によっては小中で連携を取りながら心のケアを行っていました。１年生に不登校になった子がいるとなったら、小学校の先生に連絡を取って電話をしてもらったり、学校に来てもらったりしました。

　他の地区でも、例えば田村市の小野や滝根に行った子達が、学校に通えないでいました。そこで「その子たちの家庭訪問をしたい」ということを石川中の校長先生に相談したところ、「こちらはいいから、そちらの方のサポートを」と言っていただき、他の地区まで出向いたりもしました。

── そういった苦い経験の３ヶ月があって、広野中は県内で再開しました。いつどのように再開したのでしょうか。

柴口　再開の見通しを持てたのは、７月に入ってからだと思います。再開に向けて、校長、教頭、事務とあともう１人教員、この４人で準備をしましょうということになりました。私が教員１名のところに入り、一学期終了と同時に兼務がなくなりました。８月からは福島高専の今度は別の一角を借りて、10月の開校に向けて準備を始めたのです。再開するためにはまだ校舎が地震の影響で使えなかったので、結果的には湯本第二中学校を間借りして授業を再開することになりました。そのための物品の移動や、諸々の教育課程、始まってからの諸行事、帳簿類などの準備を２ヶ月かけてやりました。

── 再開は、先生にとって嬉しいものでしたか？

柴口　もちろんです。集まった生徒は20数名でした。開校して１、２週間はとにかく学校生活を作ることに必死でした。校舎にしても時間割にしても、まずは我々と子ども達が慣れることを優先。１～２週間で開校式、オリエンテーションもやらなくてはいけないし、普通の学校でやる年度初めの色々なことを慌ただしくやっていました。借りることができた教室は図書室を含めて３つだけ。その図書室を２つに割って職員室と２年生の教室、それから１年生と３年生が生徒会室と美術室を割り当てられたのだと思います。

　そこを借りて授業をしましたが、他の湯本二中の子ども達とはあまり接触しないようにしていました。昇降口で一緒にはなるのですが、うちの学校はたしか８時半頃にスクールバスで登校していましたので、湯本二中の子達は大体もう通過している時間です。ですから、ほとんど接点がないような状況で学校生活を送っていました。

── 他の中学校と一緒にならないようしたのは、敢えてそうしたのですか？

柴口　結果的にそうなったか、敢えてそうしたかは記憶にないのですが、あまり会わせたくなかったというか。子ども達も嫌がっていたかなと思います。我々教員も、湯本二中の先生方との接触を控えていた部分もあって、あくまでも間借りしているという立場でした。はっきり言えることは、「とにかく迷惑にならないように」ということでした。たとえ仕事が残っていたとしても、もう退勤時には全員帰ると。そうしないと、湯本二中の先生方の迷惑になるので。

── 指導方法について、震災前と変えたことはありましたか？

柴口　少人数になった分、一人ひとりの習熟度などには気をつけていました。私が持っていたのは数学ですが、教員がきちんと配置されなかったので、美術の授業も持っていました。数学は２年生だけを担当しましたが、４人いる２年生のうち３人が不登校でした。「転校先で通えなくなった子も、広野に戻ったら通えるんじゃないか」という保護者の考えでこちらに来たのですが、やはり学校には足が向かなかった。

── 震災による生徒達の変化は感じましたか？

柴口　やはり馴染めなくて不登校になった子は多いです。それでその不登校になった子を、何度か訪問することはありました。最初から不登校になっていた子は来ないで終わってしまいましたが、その後に広野中に戻ってきた子で「学校に来られた子達」は、最後まで学校に通いきれました。通いきれたのは、周りに同じ境遇の子達がいるという安心感があったからかなと思います。逆に、戻る前のところ、もしくは戻らないことを選択した子の中には、不登校になった子が数多くいましたね。

本当は、「各地へ散らばった子ども達に、会いに行きたかった」

── そういった激動の時期に現場で対応して、例えば「町や県の教育委員会がもっとこうしてくれていたら」と思ったことなど、教育行政の課題のようなものは感じましたか？

柴口　町の教育委員会には、精一杯のことをやってもらったと思います。私が８月～10月の準備している期間も、何度も教育委員会に行きましたが、大変な状況の中で尽くしていただきました。一方、県の教育委員会に言いたかったのは、私達は「兼務なんて仕事は、さらさら望んでいなかった」ということです。４月の頃に先生方と皆で話していたのは、「各地に散らばった子ども達に会いに行きたい」ということでした。突然、知らない土地の学校に一人で行くことになってしまった子ども達が大勢いるんですよ。だから、「もう旅費なんて自費でいいから、子ども達に会いに行って、励ましの言葉をかけてあげたいね」と話していたのです。県外に離れていった子どものこともサポートしていきたいね、と。でも、兼務が入ると、そういったことが一切できなくなってしまう。

── 兼務先を優先させなくては、という気持ちもありますよね。

柴口　ただ、先程も話したように私達には業務があまりなかったので、「どこそこの子どもが不登校だから会って話をしてきたい」と校長先生に申し出ることはできました。それで送り出してくれ

なかった話を聞いたことはないですが、少なくとも自分の勤務先が決まった以上は、自由に色々なところを歩いて回ることはできませんでした。

だからそうやって県外に行った子には、「取り残された感」があったのではないかなと思います。「それまで頻繁に電話をくれていた先生が、なかなかくれなくなった」みたいな、そんなところもあるかなと思います。

── 私達がインタビューを進める中でも、兼務の話は色々な先生方から出ていました。また兼務の先生を受け入れた立場の先生からも、「悩みをちゃんと聞いてあげられなかった」という話を聞いたことがあります。振り返ってみても、兼務は難しい対応だったのでしょうか？

柴口　全部で500人ぐらいの先生が、それこそ子どもと同じで、1人、2人で配置されました。私も石川町には行ったこともないのにポンっと置かれました。私の場合には、もう1人広野中の教員がいて、さらに週に何回かは教頭が来ていたこともあって少し心強いところはありましたが、不安でしたよね。4月にはそういう働き方よりも、「一人ひとりの子どものサポート」を私達は望んでいたので、それができなかったというのもね。

兼務の配置の仕方も、完全に各学校に丸投げでした。「自分の避難先はここだから、ここの学校にしてほしい」という希望ばかりを言えない。他の先生のことも考えると、「じゃあ俺が単身でこっちに行かなくちゃいけないかな」と。遠距離通勤者もいましたし、単身赴任を強いられた先生達も広野だけで3、4人はいました。私も郡山から石川というとそれなりに距離があるので、いわゆる遠距離通勤を強いられました。加えて、「兼務自体は決して子ども達の心のサポートにならなかった」というのが、実感としてあります。

「避難先での生活」と「浪江町での生活」を経験した子ども達へ、“ふるさと”に替わる言葉を

── 今の若い先生の中は震災を経験した記憶があまりない方もいて、今後も増えていくと思います。そういった先生方に、ご自身の経験や3.11をどのように語り継いでいきたいですか？

柴口　ここには震災遺構の請戸小がありますし、隣町には伝承館もあるので、直接経験されてない先生方や、転勤してきた先生方に、震災のことを勉強してもらう環境は整っていると思います。

あとは、今勤務している、なみえ創生小中学校の特殊性は、色々な場で説明したいと思っています。ここは小中学校が一緒で、特殊な環境です。ベテランの先生が入っている中学校の方では、前の学校の実施案などをそのまま持ち込んでくるようなことがあるので、「前の学校と同じことをすることはできない、実態に合わない」と指摘しています。これはこの10年の経緯を積み重ねであり、これからも伝えていきたいと思います。

それから私の場合、ここに来る前は同じくらい小規模の浪江中学校にいたので、できればその浪江中の伝統みたいなものをこちらにも下したいなとは思うのです。ただ反面、ここは新しい学校だからむしろ振り向かない方がいいかという思いもあって、複雑です。

── 子ども達も震災を知らない世代になってきますし、他の場所から転入してくることもあります。ふるさと創造学などでこの地域を考えることが、「ふるさとを考える」という学習として進められていますが、今の子ども達と「ふるさと浪江町」を考えるという学習活動について、どのように考えていますか？

柴口　うちの学校では、「ふるさと」という文字を取りました。それで「わが町なみえ」。浪江中に私が勤務した頃から、「避難先での生活と、浪江町での生活が半々ぐらいの時間」の子どもが出てきました。これからも避難先で過ごしている子が多くなってくるという声が上がり始め、「ふるさとという言葉は使えないのでは？」と、先生方と真剣に話し合いました。それでその時に作った言葉が、「ふるさと」を「ふるさと・地域」にしたものです。「地域も入れれば、避難先のことも含めるし、浪江中仮設校舎があった二本松の針道のことも含めることができる。なみえ創生小中に至っては、中学校の9人のうち4人は浪江に関わりがない子なので、「わが町なみえ」に。

だからふるさと創造学ではもちろんテーマはありますけれど、子ども達に投げかける時には、ふるさとは強要しません。とにかく今住んでいるこの浪江町を知りましょう、何か提言をしましょうと。記憶がなくても、「私のふるさとは浪江です」と言う子はいます。でもその他の子どもには、我々は強要しないようにしています。

2021年11月18日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

楢葉町

Naraha-machi

楢葉町は浜通り地方の中部に位置し、広野町と川内村、富岡町と隣接している。福島第二原子力発電所は、楢葉町と富岡町にまたいで立地している。2011年3月時には8011人が暮らし、町内に楢葉南小学校、楢葉北小学校、楢葉中学校が立地していた。震災と原発事故以降は、会津美里町などへの避難を経て、2012年4月から避難先のいわき市にて小中学校が再開。2017年4月に、小中学校共に町内での教育活動が再開した。2022年4月には、小学校2校が統合し、楢葉小学校が開校。2022年2月時の住民登録者数は6671人、町内居住者数は4152人。

起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビュー

楢葉町

菅野知加子 先生

かんの・ちかこ

富岡町出身、中学校教諭。教科は音楽。2011年3月の震災発生時は楢葉町立楢葉中学校に勤務。2021年度インタビュー時は、双葉町立双葉中学校勤務。趣味はトレッキング。

震災時、楢葉町立楢葉中学校1学年の学年主任を務めていた、菅野知加子先生。震災後は楢葉町が会津美里町に一斉避難となりましたが、先生はご自身の避難先である“いわき地区”へ同じように避難した生徒達の「心のケア」を担当しました。生徒だけではなく、時には保護者の悩みにも寄り添ってきた先生は今、震災を知らない世代の子ども達へ「伝えていく難しさ」を感じるのだそうです。悩みながらも生徒に寄り添い続けた、菅野先生の10年を追いました。

「何も分からない」という不安を抱えた避難

――まず学校でのお話を伺う前に、ご自身の被災の状況とご家族の避難についてお話を聞かせていただけますか？

菅野　私は3月11日、学校からまっすぐ自宅アパートに戻ったのですが、道路の陥没で迂回を余儀なくされたため、いつもは15分ほどの帰路に5時間かかりました。迂回のために海の方を通ろうとしたら、楢葉の人達から「ここはもう津波が来るから、もうこっちを走っちゃいけない」と言われて。そう教えてもらって今度は元の道に戻ったのですが、戻ったら戻ったで大渋滞。なかなか元の道に入れなくて、仕方がないから他の道を……と進んだら、そこも渋滞で。そんな状態で結局5時間です。

自宅に着いたら、電気もすべて止まっていました。部屋の中も酷い状態でした。

――翌朝の動きはいかがでしたか？

菅野　朝になったら、周りの様子が変なんですよ。警察車両がたくさん来て、住民に対して「とにかく避難してください」という放送がありました。停電でテレビも見られなかったので、どうして避難が必要なのかが分かりませんでしたが、とにかく「避難しなきゃなんない」と思って車に乗り込みました。そして車のテレビをつけて見たら、「え、なんか大変なことになってる」と、そこで初めて事態を知りました。「とりあえず川内に逃げろ」と言われて、とりあえずちょっとしたお金や携帯を持った程度で、とにかく車で向かいました。

ただ、川内に向かう道が、もう大渋滞。あとは、白い防護服を着た人が大勢いましたが、それもまた奇妙な光景でした。そのうち、原発が爆発するという情報があって、避難するときに川内を諦め、ガソリンを入れようと思って行ったら、ガソリンスタンドがもうだめで。仕方がないので、なんとかいわきまで走らせました。いわきでは、知り合いからレンタカーを借りました。ガソリンが満タンになっている車が必要だったからです。自分の車をそこに置いて、レンタカーを借りました。その後、郡山に住んでいる弟の元に向かいました。郡山に行ってからは何とかなったのですが、いろいろと不便なところはありました。

――場所によって、インフラの被災状況も様々でしたね。

菅野　郡山は大丈夫だったんです。電気も、たしか水も。そのあと知り合いが、新潟からガソリンを持ってきてくれました。でも、いわきで借りたレンタカーもそんなに長く借りてはいられないので、二日後くらいにいわきに戻って車を取りに行きました。

そして「荷物を家から持ってこなきゃいけない」と思って、私はいったん自宅に戻ってきたのです。車で戻っている間に何かものすごい地震のような音がしました。それが、原発が爆発した音でした。

――爆発音を直接聞いたのですね。

菅野　とにかく、今まで聞いたことがないような音を聞きました。後になって、それが爆発音だったと知りましたが、恐ろしかったなと思います。放射性物質から守るための防護服だって、自分達は着ていない。避難の途中で見てきた防護服を着た人達のことも、「なんでこの人らだけ、こういう服を着ているんだろう」と思っていましたよね、その時は防護服とか分かりませんでしたから。とにかく、その時は訳が分からない状態で、「とりあえずどっかに逃げなきゃ」という気持ちでした。

一斉避難で散り散りになる生徒達と、避難先の学校で「兼務」になった先生達

――続いて、学校のことを伺います。3月11日当日、被災前後はどのような状況だったか教えてください。

菅野　当時は楢葉中学校一年生の学年主任をしていました。地震があったのは卒業式が終わって子ども達が全員帰った後で、校内には先生方しかいない状態でした。

楢葉中は今でこそとても綺麗ですが、その当時は新しい校舎を建設中だったのです。だから被災した時はとても古い校舎で、地震によって教室の天井や黒板が下に落ちてしまいました。生徒がいたら、大怪我をしていたでしょう。

楢葉は結構高い場所にあるんですけれど、海がちょうど見えて、沖合から白いものが迫ってきたのが分かりました。津波情報も、車のテレビで見ました。そこから半月、3月下旬までは、「とにかく、それぞれの」避難先で待機ということになりました。

――先生方も？

菅野　はい。私達も校長先生をはじめ色々な方に連絡をしてきましたが、3月の27か28日頃に楢葉は会津美里に避難するという連絡を受けました。

会津美里の役場に集合がかかって、私達教員が集まりました。そこで今後どうするかというのを会議して、「子ども達一人ひとりの居場所、どこに避難したか」を把握するために保護者の携帯電話に連絡しました。詳細は分かりましたが、問題は避難先での学校についてでした。

避難先での学校選びについては保護者もどうしてよいかわからない状態でしたので、「避難先で通えるんだったら、その学校に特別枠で通ってください」とお話をして、正式に手続きができたら、それを私達に連絡していただくようにお願いしました。その電話の時に、子ども達の様子も聞いたりしていました。

あとは、4月になってから私達に招集がかかりまして、会津美里町の本郷中学校に集まりました。その中学校にも、楢葉から行っている生徒が何人か、お世話になっていました。

私達はそこで一室を借りて、事務手続き等を行いました。

── 事務作業がかなり膨大だったのですね。

菅野　はい。そしてその合間に、先生達何人かでグループを組んで、近くの県内の学校に移った子ども達のところに行きました。いわき市立平第一中、二中、三中に移った子は多かったんですが、私はその３校と小名浜、江名を訪問して、子ども達の様子を把握するといったこともしました。

── 2010年度時点で、楢葉中学校の人数はどのくらいでしたか？

菅野　全学年で300人くらいはいましたね。その子達が移った先で一番多かったのは、いわき地区だったと思います。楢葉町の避難先である会津美里に移ったのは、20人くらいでしょうか。他には、親の実家ということで、県外に行った子もいました。日本全国に避難していました。

── 楢葉中学校の先生達は、どこに移られましたか？　皆で会津美里に行ったわけではなく？

菅野　主にいわきや会津が中心でした。避難したところの近くの学校に「兼務」となったんです。私の場合は、いわきに避難したから、いわきで兼務というわけです。そのほか、本郷中で仕事していた人もいますし、あとは私と同じいわき地区で仕事をしていた先生も多かったですね。

私は2011年５月からいわきの平三中で約一年間兼務しましたが、そこに来た生徒は一番多かったのではないかと思います。30人くらい来たのではないでしょうか。双葉郡内で、三中に入ったのが100人くらい。平三中はもともと人数が多かったので、生徒を受け入れる教室が足りず、プレハブの教室を建てました。双葉郡の教員は７人くらいお世話になりました。

生徒に寄り添う「心のケア」では、まず静かにその子の話を聞くこと

── 菅野先生は、平第三中学校も含めたいわき地区の学校で「心のケア」のサポートをされていたと聞いています。具体的にどのようなことをされていましたか？

菅野　子ども達の中には「ここではやっていけない」というか、コミュニケーションが取れなくなってしまった子もいたんですね。疎外感でもないですけれど、いろいろな意味で「馴染めない」というのがあったんだと思います。そうすると、学校行きたくないとか、親と喧嘩したとか、具合が悪いとか。（そういう子達ばかりではないのですが）そういう子達を中心に……「寄り添う」という感じでしょうか。「どうしたの？」ではなくて、まず静かにその子の話を聞いて、「その子が今、何に大変なのかな」を考える。喋らない子は喋らないですけれど、みんな結構喋るんですよ。涙流しながらとか。震災があったことで、避難したことで、両親が喧嘩ばかりするとか。そうしていたたまれなくなって、兄弟仲も悪くなってしまったり。要するに、家族間がぐちゃぐちゃになってしまった子もいるんです。

また、原発の影響で、当時は双葉郡内から来た子に対して、「来るな」という雰囲気がありました。そういったこともあって、「居場所がない」という子もいたんですよね。その子達の、その時の気持ちを聞いたりもしていました。

── その中には、楢葉中学校で担任をしていた子や、顔見知りの生徒もいましたか？　そういう子達の、震災前後での変化が感じられるようなことはありましたか？

菅野　震災前に大人しかった子達の中には、鬱みたいになってしまう子もいました。それから逆に、活発になる子もいました。大人もそうですけれど、皆が置かれている状況に順応してやっていければいいでしょうけれど、やはり何かしら合わない部分があると、殻に籠もってしまったり。変化はありますね。いい意味でも、悪い意味でも、いろいろありました。

いい意味でというのは、思いやりが出てきたり、友達のことを考えるようになったり。悪い面では、気持ちをどう表していいのか分からないからなのか、ちょっと羽目を外したり、補導されたりする子もいました。その子の置かれている所にもよると思います。

あとは、震災でいろいろあったのだと思いますが、辛いこと嫌なことがあれば心が折れてしまいます。

── 兼務をした平第三中学校では、教科の授業も担当されていたのですか？

菅野　最初は、授業はしなかったんです。「双葉郡の先生達はいいから、ここで落ち着いていてください」と言われていました。でも実は、それが一番辛いんですよね。皆が忙しくしているのに、「何かお手伝いしますか」と聞くと、「いやいや、いいから」と。それで一ヶ月ぐらい経って、最初はT2で授業に入りました。そして夏休みが明けた頃から「メインで授業を」とお願いされました。それはそれで楽しかったですね。平三中の先生方には、とても良くしてもらいました。

── 従来からの菅野先生の教育方針や先生としての考え方で、震災後にも通用した部分としなかった部分があると思います。震災直後、平第三中学校に行ってから、先生として考え方を変化せざるを得なかった点はありますか。

菅野　基本的には変わらないと思いますが、「その場その場に合わせなくては」というのはありますね。やはりどこか兼務というのもあって、気を遣うところがありました。普通だったら、楢葉だったら、「こうだよね、じゃあこうしましょう」と、お互い声を掛けあってできたことが、なかなかできなかったですね。

── 子ども達への接し方の面は、何か変化はありましたか？

菅野　接し方は、今までと変わりなかったと思います。ただ、心が病んでいる子には、その子に合った対応をしなければならなかったですね。馴染めなかったり、ちょっと具合が悪くなったり、家庭の中で問題があったりするときは、家に行ったり、話を聞いたり。それから時々、親御さんが「違う学校に行っていたんですけど……こういうわけで部活が合わなくて……」と言った、相談もありました。だから、震災後には、保護者との繋がりももっと深くなったような気がします。

保護者も不安だし、どうしていいかわからない。他の中学校に行っても、そこであまり聞けないことなどを、私達に頼ってくれたのだと思います。

そういった状況の中で、子ども達にもいろいろな葛藤があって、なかなか自分を出せなかった子もいましたね。

仮校舎での学校再開「感謝やボランティアの精神を身につけ、人として変わっていったことは間違いない」

── そして平第三中学校で一年間の兼務をしたあとは、再開した仮校舎での勤務になったのですね。

菅野　はい。2012年の4月にいわき市常盤西郷町でコンピューターカレッジの建物を借りて、「楢葉中学校仮校舎」として学校が再開しました。ただ、同じ建物の中に小学校も入ったので、とても狭かったです。

4月当初は1年生が10人いなかったかなという人数で、2年生が6人、3年が9人だったと思います。でも3年生に関しては、「どうしても楢葉中で卒業したい」と言った子達が帰ってきて、24人に増えました。本当は4月に修学旅行を9人で計画していたんですが、2学期に戻ってくる子達がたくさんいると知ってから9月に変更しました。それで9月の暑い中、24人で京都に行きました。

――震災の状況から、少し離れられたような気持ちでしたか？

菅野　状況はだいぶ変わりましたが、震災から10年が過ぎた今でも、あの時の記憶は鮮明に覚えています。その当時は辛い面が多かったですが、生徒達と接している時が本当に楽しかったです。あの子達は、仮校舎をお返しする12月、私や担任が何か言ったわけではないのに、1人が突然号令をかけまして。3年生だけがバッと並んだんですね。その仮校舎に向かって「今までお世話になりました。ありがとうございました」って何回も言うんです。「震災前だったら絶対ない言葉だよね」と思いました。感謝の言葉とか思いやり、そういう大切なものがこの子達の中に身についたんだなあと感じました。

――その後は2013年1月、いわき市中央台の仮設校舎に移り、2015年9月に楢葉町が避難指示の解除を行ったのですね。

菅野　はい。子ども達は、仮設校舎に行っても奉仕の心とかそういうのもしっかり身につきました。お互いに認め合うこともできるようになりましたし、震災があって、気持ちの面でいい方向に変わっていったとも感じました。中学生のそういう時期に震災に遭って、感謝とかボランティアの精神とか、そういう「人として変わっていった」ことは間違いないですね。

――菅野先生は、仮校舎や仮設校舎に移った後も、平第三中学校以外に避難した子達と、連絡はとり続けていましたか？

菅野　やりとりはありました。なかなか直接会いには行けなかったのですが、東京に行ったついでではないですけれど、「そういえばここに避難していたな」と思って連絡をして会ったり。本人に加えて、ご両親とおじいちゃんおばあちゃんとも会って、心配なことを聞いたり。

また、遠くにいってしまった子に限らず、子ども達が卒業して専門学校生や大学生となった今でも、やりとりをすることがあります。

「もともと子ども達の中にないこと」を教える難しさ

――卒業後でもやりとりをする関係は素敵ですよね。そういった避難先の生徒さんとのやりとりや、ご自身の避難の経験も踏まえ、教員として先生が得たものは、どんなことでしょうか。

菅野　ありきたりかもしれないですけど、「絆」のようなものは、得たものに入るのかなと思います。保護者、生徒、教職員、同僚もそうですけれど、そういった人達との絆。

――入学してくる生徒達の中で、世代的に震災の実体験がなくなってくると、先生の「語り」を聞いてもピンとこないとか、映像を見てもピンとこないということがあると思います。そういう部分は今後、どうしていこうと考えていますか。

菅野　そこはとても悩むところなんですよ。総合学習の時間でやっても、「もともと子ども達の中にないことを教える」ということは時間がかかるし、やっぱりそういうことは「経験の中でわかってくる」ことが多いですよね。ただ、時間はかかっても、それを伝えることは大事だと思っています。

特に伝えたいなと思うのは、私の場合、「こういうことがあって、いろいろな人の協力があって、今があるよ」ということです。そして、例えば他の地域で同じようなことがあったら、（自分達には経験がないかもしれないけれど）、その人達に寄り添うような気持ちを持ってほしいなと思います。

ただ、これはなかなか難しくて。子ども達に話したり、指導している中でも伝わっていないなというのが分かるんです（笑）。これをまるで自分事のようにして、子ども達に理解させるためには、ものすごい時間と労力が必要なんだなというのが、わかりました。

――では、ご自身が考えられている震災の経験というものを、これからの先生方に向けて伝えたい部分は、どういったものでしょうか？

菅野　やはり現実、あったことをそのまま子ども達に伝えて欲しいなということが一つ。もう一つは、相手に伝える大事さや、子どもが子どもなりに考えることの大切さを、子ども達に伝えていってほしいです。なかなか難しいかもしれませんが、震災ではいろいろな心の変化がありますから、生徒の気持ちを考え、対応できる先生方の力があるといいのかなと思います。

2021年7月28日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

富岡町

Tomioka-machi

富岡町は浜通り地方の中部に位置し、楢葉町、川内村、大熊町に隣接している。福島第二原子力発電所は、富岡町と楢葉町にまたいで立地している。2011 年 3 月時には 15960人が暮らし、町内に富岡第一小学校、富岡第二小学校、富岡第一中学校、富岡第二中学校が立地していた。震災と原発事故以降は、郡山市などへの避難を経て、2011年 9 月に避難先の三春町にて小中学校が再開した。2018 年 4 月から町内での教育活動が再開したが、三春町での教育活動も継続した。2022 年 3 月に小中学校すべてを閉校し、2022 年 4 月から新たに富岡小中学校が開校。2022 年 2 月時の住民登録者数は 12023人、町内居住者数は1833人。

起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビュー

富岡町

鈴木 博 先生

すずき・ひろし

楢葉町出身、中学校教頭。2011 年 3 月の震災発生時は富岡町立富岡第一小学校に勤務。2021年度インタビュー時は、富岡町立富岡第一中学校勤務。趣味はスポーツ観戦。

震災時、富岡町立富岡第一小学校 5 年生の担任だった鈴木博先生。鈴木先生は 2021 年 8 月の辞令を受け、仮設の校舎となる富岡町立小学校三春校の立ち上げを任されました。他の先生方と共に、「ここが本当に学校になるの?」という場所を学校に作り上げていく過程で、「これから先も経験できないような一体感」を、先生方の中に感じたといいます。その一体感が原動力となり、三春校では、先生と子ども達のやりたいことを次々と実現させていきました。当時の学びを、いま管理職として若い世代にどう伝えていくか。三春校の閉鎖・解体日が半年後に迫る秋、鈴木先生に伺いました。

原発避難と聞いても、当時は「避難しても、すぐ戻れるんだろうな」という感覚だった

── まずは震災当時の 2011年 3 月 11 日、ご自身がどこで何をしていたか教えてください。

鈴木　私は当時、富岡第一小学校で 5 年生を担任していました。地震が発生した午後 2 時 46 分の時点ではクラスで帰りの会をやっていて、ちょうど「さようなら」をしたところでした。子ども達何人かが教室を出ていって、その時に大きな地震が起こりました。子ども達を急いで呼び戻して、教室で机の下に潜らせて、4 ～ 5 分ですかね、あの揺れを耐えさせたというか。子ども達はもう、その時点で無言でした。やっぱり怖さがだいぶあったんだろうなと思います。その時の揺れの中で一番覚えているのは、まず教卓の脚が折れたこと。それから、その当時はテレビが上の方に置いてありましたので、テレビを押さえていたのですが、それ押さえきれなくなったことです。校舎の 3 階にいたので、街並みも良く見えました。瓦が落ちたり、あとは埃が舞い上がったりと、そういった光景を見たこともよく覚えています。

その後、3 階から校庭に避難するために、「子ども達にとって、どのルートを通るのが安全なのか」という判断が必要でした。防火シャッターが全部下りていましたので、そのルートを探しに行って。ただ、下駄箱も全て倒れている状態だったので、3 クラスの先生と話し合いをしてなんとか子ども達を避難させましたが、校庭に出るまで 15 ～ 20 分かかりました。最初の地震から、その後の地震でもだいぶ揺れていたので、相当な時間をかけて校庭に避難しました。

── 当時、鈴木先生のクラスの子ども達は、何人でしたか？

鈴木　27名です。全校生徒で 400 人ちょっといましたので、比較的大規模な学校でした。

── 学校から海まで、直線距離でどのくらいだったのでしょうか。津波の心配はしましたか？

鈴木　直線距離で、どのぐらいでしょうか……。1 キロくらいかなと思います。しかしその時点では、津波の心配など全く頭になかったですね。津波に関しては、その数日前に「津波何センチ」という注意報が出たんです。そのときも、20 センチか 30 センチ。だから、やはりそういう経験をしていないと、いざという時に頭の中には浮かばないんだなということは、その後分かりました。

── ではその時、津波が来るという情報はどこで得たのでしょうか？

鈴木　いや、まったく情報はありませんでした。校長先生の指示の下、「もう避難するよ」ということで、避難が始まったので。それで、警察署の脇を通り、今村病院の前、役場の前を通って、最終的にスポーツセンター、体育館に避難をしました。

── 鈴木先生ご自身のご自宅の状況については、どのように知りましたか？

鈴木　その頃は、大熊にアパートを借りていました。揺れの後、私はまずスポーツセンターに子ども達と避難したのですが、実はスポーツセンターの体育館には入れませんでした。それで、そこから脇にあるテニスコートに避難しましたが、そこも寒かったため、今度は富岡第二中学校の体育館に子ども達とバスで移動しました。

富岡第二中に着いて、先生方から「荷物を取ってきて」と頼まれて外に出たのですが、橋に通り掛かった時、今までに見たことのない光景がありました。横たわった車が何十台とあって、私はそれを少しぼうっとして見ていたんです。そしたら警察官に、「何人死んでると思ってんだ！」と怒られて、慌てて学校まで走ったことを鮮明に覚えています。

その後、自分の車で富岡第二中に行って、夜 11 時頃に学年主任の先生から「先生方も、とりあえず帰って」と言われ、自宅に戻りました。もちろん、もう道も真っ暗でした。

帰宅して嫁さんを車に乗せて、楢葉にある嫁の実家まで連れて行こうとしたのですが、ガソリンの残りがほとんどありませんでした。それで、どうしようかなと思っている時に、夜の森で 1 軒だけ空いていたので、手巻きで入れてもらいました。後のことを考えると、そこで満タンにできたのが非常に大きかったです。

楢葉の実家に嫁さんを送り届けて、2 ～ 3 時間そこで過ごして、ジャージーとサンダルしかないような状態でまた富岡第二中に戻りましたが、すぐに原発避難という形になりました。ですから、自宅に戻れたのはその後、5 月か 6 月の一時帰宅の時にようやくでした。

── どのような情報を得て、原発避難をすることになったのですか？

鈴木　富岡第二中の体育館にいる時に、避難している方々が動き出したんです。「あれ、何だろう」と思っていたら、その後に放送が入りました。「原発避難になります」と。そこで初めて知りました。

── その放送を聞いて、どのようなことを考えましたか？

鈴木　今では事故の大きさというものが分かりますけれど、当時は「爆発する」なんていうことは、全く想像できませんでした。ですから、「避難してもすぐ戻れるんだろうな」というような感覚でした。それでほとんど何も持たずに、避難しました。

また、子ども達の中には、その時点で家族の迎えが来ていない子が数名いました。それでどこにも帰せなかったので、他の先生方何人かと一緒に川内村の避難所に避難しました。

実際には、私は川内まで行くことができませんでした。自分の車があったので、それを運転していましたが、大渋滞で断念。それで実家に戻って自分の親を車に乗せ、翌日、平田村の道の駅にちょうどいた時です。原発爆発の映像を、車の中で見ました。そのまま郡山までたどり着きましたが、親も高齢なので、「どこかにホテルはないか」ということで探していた時、ビッグパレットの近くのルートインに泊めてもらうことができました。そこから、今度は親戚が多い栃木県の宇都宮に行って、アパートを借りて。何日かは、そこから郡山に通う生活をしました。

散り散りになった子ども達への連絡から始まった新年度

── 郡山に通ったのは、どういった目的ですか？

鈴木　通い始めたきっかけは、3 月 31 日にビッグパレットに集まるようにという教育長からの指示でした。集まった上で、今後、どうしていくか。散り散りになった子ども達への連絡、指導要録などを送らなくてはいけないのでその準備、そしてその作業をどこでやるか、といったことに対応していくためです。

その本拠地は安積行政センターになったのですが、「アパートをこの周辺にすぐに借りて下さい」と言われても、その時にはそれが非常に難しくて。不動産屋さんがどこにあるかすら知らない土地で、すぐにアパートを探すことが私には困難でした。そこで、郡山から通うことにしたのです。

── その後、先生は、学校の対応の中で何を担当しましたか？

鈴木　まず、自分のクラスの子達が「どこに避難した」という情報を電話連絡で得てから、避難先の学校に児童個々人の指導要録を送るという作業でした。ただ、送り先の学校の住所が分からないので、先生方で手分けして、インターネットカフェに行き、住所を検索。それを行政センターに持ち帰り、そこから発送するということを、4 月の段階で多分 10 日ぐらいやったのではないかと思います。

── クラスの分というと、20 何人分ですか？

鈴木　そうですね。ただ、先生方も数がいましたので、それぞれ役割を分担して行いました。

指導要録を送る作業以外にも、子ども達の様子を見に行ったりもしました。ビッグパレットふくしまにも子ども達が多く避難していて、その子達は安積第一小、第二小、永盛小学校に行くことになっていたので、朝、ビッグパレットから子ども達を小学校まで連れていって、授業なんかちょっと見るということもありました。

その他には、ビッグパレットで支援物資の仕分けなどを行うこともありました。それを大体 10 日ぐらい行った後、今度は「兼務辞令」が出ました。私は昔の岩瀬村、今の須賀川市にある白方小学校で、5 月から 8 月まで「兼務」という形で勤務しました。

── 兼務のときは、どのようなお仕事をされていましたか？

鈴木　主に TT（チームティーチング）を行っていました。そのクラスには富岡出身の子が 2 人いまして、私も算数の TT で入ったりして。自分の担当学年ではなく、4 年生と 2 年生の女子児童 2 人でしたけども、いきなりの転校ということもあって、緊張はもちろん感じました。なかなかなじめないというか、顔がこわばっていて。その点は、お父さんとも話はしたのですが。また、TT にあたって不足しているものがあれば、その都度ビッグパレットに取りに行くという形を取っていました。

── 指導の仕方や声の掛け方など、意識されたことありましたか？

鈴木　いやそれが、なかなか声が掛けられなくて。まったく知らないところに行くというのは、なじむまではなかなか難しいですよね。教員である自分もそうでしたから。まったく知らないところに行って、知らない先生方と一緒に仕事するわけですから、なじむまでは相当時間かかるだろうなと自分でも感じていました。

一方、白方小の教頭先生、校長先生が協力的で、「先生方で会いに行ってきな」というお声掛けをいただき、散り散りになった自分の元クラスの子ども達のところに会いに行ったり、その子達の学校を訪問する機会もいただきました。それで行ってみると、保護者の方の中にも、会った瞬間に泣いてしまう方が結構いらっしゃって。「やっぱり知っている人に会うと、ほっとするのかな」なんて思っていました。

── 先生ご自身としても、「なじむのが大変だった」というお話でしたが、

兼務先の白方小で勤務をしている時、どんなことを考え、何を大事にしていましたか？

鈴木　生活のことを考えると、まず一つはもう「夢中」ですよね。仕事の方も、今思い返すと、何でしょう。もう、頭が空白だったような、そんなに考えられないような状態だったんじゃないかなと思います。とりあえず、流されるままにいたような気がします。

――そういったことを、一緒に避難をしてきた方や、同郷の先生方と話すような機会はありましたか？

鈴木　教頭先生は、先生方が散り散りになった学校をいろいろと回られていましたけれど、あとは他の先生方とはそんなに話していないですね。そのとき目の前にあったことに、精一杯だったんじゃないでしょうか。

これから先も経験できないような「一体感」が先生方の中にあった、特別な一年間

――その後、先生には「新しく立ち上げになる三春校」にという辞令があり、まずは曙ブレーキを見に行くところから始まるんですよね。約１ヵ月弱で、元々学校でもない、ぼろぼろの曙ブレーキの事務棟を、一歩ずつ学校にしていったお話を聞かせてください。

鈴木　元富岡町立富岡第一、第二小中学校の先生方が集まったような形で、曙ブレーキまで、みんなでバスに乗って行ったのを覚えています。「えっ、ここ？ ここが学校になるの？」というのが第一印象でした。
でも、2011 年９月から始まった、あの一年間。あの一年間は、多分これから先も経験できないような「一体感」が先生方にあったかなって思います。同じ経験をして、自分達が受け持った子ども達も同じ経験をしていて。その先生方が集まって、「よしやるぞ！」ではないですけれど、そんな言葉はないですけど、そういう雰囲気や一体感が、ものすごくありました。ゼロから立ち上げる経験って、多分そんなにないですよね、教員をやっていても。
　それから、一時帰宅のときには、先生方もカレンダーに丸付けて、「ここ、いないからね」と言い合える雰囲気がありました。誰か境遇の違う先生がそこにいれば、そんな話はできないわけです。先生方がみんな同じ境遇なので、気を遣わず、「一時帰宅、どうだった？」などという話ができたことも、先生方の中に一体感が生まれた一因なんじゃないかと思いますね。それが、やりたいことがまたできるということにも繋がっていきます。

――やりたいことというのは、具体的にどんなことですか？

鈴木　例えば、子ども達が「修学旅行、行ってないよ」となったら、「じゃぁ修学旅行、行こうよ」となります。もう、教育課程になくても、どんどん入れられる。支援者の方にも、どんどん入っていただいて。普通の学校では、経験できないですよね。だから、子ども達に俳句か何かを書かせたときにも私的に感じたことですが、「震災は辛かったけれど、逆に震災があったからこそ学べた」というものが、子ども達にあったのかなと思います。

――三春校が立ち上がって、先生は最初に担任を持たれましたか？

鈴木　６年生の担任をしていました。震災時に５年生を持っていて、三春校で６年生を持ったので、一緒の子ども達は持ち上がりのような感覚ですね。９月の開始の時点では３人でしたが、卒業する時には 13 人になりました。
　９月の最初の頃は、「やっぱり震災のことに、あんまり触れられないのかな」と思っていました。というのも、報道でもだいぶ放射線に関しての話が出ていましたから。「子どものケアをしっかりやりなさいよ」ということも文科省から出ていたので、なかなかその辺のデリケートな部分は、触ってはいけないものだと思っていました。
　でも、その先ほどお話しした俳句を書かせた時に、子ども達はきちんと、自分の気持ちを吐き出せたんですよね。ちゃんと、書けていた。だから、「あ、これもうちょっといろんな話してもいいのかな」と、その時に気付かされて。それから、一時帰宅の話をしたり、富岡での小学校の昔の話とか、子ども達からもそういう話を聞くことができるようになりました。あの俳句が、本当に子ども達と繋いでくれたというか。こちらが勉強になったというか。学んだこともあったんだなということが、よく分かりました。

――印象に残っている俳句は、ありますか？

鈴木　その俳句は、最後の一文が、「恵んでくれてありがとう」でした。食事に関して、そういう気持ちを持てることは、なかなかないですよね。その子も、なかなか「ありがとう」ということを言う子ではなかった。その子がそういう言葉を書いていたので、食事や日常の大切さとか、そういうものを多分あの子ども達は学んだ・感じたんだろうなと思いました。

――３月で卒業させて、翌 2012 年度、三春校での初めての入学式など、また新たな経験があったと思います。先生はどのように、2012 年度を過ごされましたか？

鈴木　2012 年度からは教務主任になったので、いろんな人と会うことができて、楽しかったですね。いろんな支援される方々と打ち合わせをしたり、会うことができて、自分自身も変わったと言いますか。すごく、コミュニケーションを図れるようになったというか。そして、「先生方が楽しくないと、子ども達も楽しくないだろうな」と思い、教務主任になって色々な行事を入れていたという記憶があります。
　実際に、今の中学３年の３人を見ていただけると、よく分かるんです。あの子ども達は、話すこともできるようになっています。コミュニケーションを取ることもできているのは多分、体験学習を多く取り入れたからだとは思うんです。その中で、こちらで意識的にやったのは、「必ず振り返りをさせる」、「お礼を言う」。これからはそこがすごく大事になるかなと思っていたので、もう一人の教務主任だった武内先生と話し合いをして、そういうことをどんどん取り入れていきました。

三春校の立ち上げが熱量の原点
今、管理職として思うこと

――先生ご自身の子ども達との接し方や、教員としての考え方について、震災前と後で大きく変わった点は何でしょうか？

鈴木　あまり怒らなくなったのが、一番ですかね。許容範囲が広がったというか。震災前はきっちりやるタイプでしたが、かなり臨機応変に動くようになったと思います。やはり震災後の、あの三春校の子ども達の実情を考えれば、その方が絶対にあっているんだというところですよね。
　また三春校の立ち上げは、格好良く言えば、私にとってはかけがえのないものでした。いや、もちろん、もうやりたくはないですよ。でも、多分、「先生方と考えながら進めていく、ゼロから立ち上げていく」というあの経験は、「一生に一回しかできないことだったのかな」と思います。
　先生方を一体にさせればすごい力が出る、ということをあの時にすごく感じましたので、今は、管理職としてそれが今後もしていけるのかというのが、課題ですね。

── 当時の経験が、今の教頭先生としての立場にも生かされているというわけですね。一方で、富岡小も含め、若い先生達の中には震災の経験がほとんどないという先生も増えてくると思います。そういった先生方には、何を伝えていきたいですか？

鈴木　これも、難しい課題ですよね。例えば自分自身に置き換えて考えた時、神戸で地震があった時にはテレビで見ているだけで、やはり他人事でしたよね。分からない世代にそれをどう伝えるか。経験していないことをどう伝えるのかというのは、大きな課題だと思っています。

昔の資料を使って話しても、やはり講義形式でしかない。そこをどう伝えていくか。でも、先生方に伝えなければ、子ども達には伝わらないので、なかなか難しい課題だと思います。

── 先生が一番伝えたいことは、何でしょうか？

鈴木　「自分の命は自分で守れるようにする」というところですかね。あとは、臨機応変さ。避難訓練をやっていても、実際には経路通りに避難できない。経路通りに進めなかった時、どうするのか。避難経路に拘らないという訓練も、これからの先生方には必要かなと思います。

だから例えば、火災からの避難訓練をする時には、普通は設定して案を出して、職員会議で話をするんですよね、ここから火が出るので、こう逃げてくださいと。それをなくしてしまうとか。不意打ちで「×× から出火したので、逃げて下さい」となった時、じゃあ先生方はどう逃げるのかなと。それを前もって話しておくとか、そういう臨機応変さが必要なのかなと思います。そうでないと、守れる命も守れない。何が一番大事かと言えば、それは命だということですね。

── 震災後の初期、三春校立ち上げの時期と、その頃からの２年間とで、子ども達の変化を感じることはありましたか？

鈴木　表情が明るくなっていきましたね。学校に慣れてきたというのもありますし、自分達の本来の居場所とは異なると感じるような不安もあったでしょう。４月からその８月までの間に、子ども達はまったく知らないところで、学校に行っていたわけですよね。まったく知らないところ、知らない先生のところで。そういうものが、仮設校舎ができて、徐々に軽減していったんです。

三春校に来た子ども達は、やはり慣れたところにいたい、慣れた先生に会いたい、教えてもらいたいという子がほとんどでしたので、表情が変わっていきました。保護者の方も同じです。知っている人がいるのといないのではやはり違ったのだなと思います。もしかすると、保護者の方が、その傾向は強いかもしれません。

── 仮設の校舎の必要性について、改めて先生はどう思われますか？災害が起きて、避難先で自治体が仮設の校舎を作るのが一般的だと思うのですが、実体験を通じてのお考えを聞かせて下さい。

鈴木　そうですね、やはり適応できない子どもはどうしても出てくると思いますので、その子達の受け皿としては必要じゃないかなと思います。

── 仮設の校舎には、「いつまで設置しておくか」という問題が付きまといます。三春校は今回、2021 年度末で閉校になりますが、双葉や大熊、自治体によって異なると思います。先生は、どのくらいの期間を目途にというお考えはありますか？

鈴木　難しいですよね。まぁ、実態に応じて、としか言えないのかな。大熊さんあたりも、最初はものすごく人数がいましたよね、100 何人いたので。それが、今は２、３人になってきています。その実態はやはり考えて、行政がどこかで区切りをつけるしかないんじゃないかと思います。

2021年10月7日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

富岡町
小野美佳子先生
おの・みかこ

双葉町出身、中学校教諭。教科は音楽。2011 年３月の震災発生時は富岡町立富岡第一中学校に勤務。2021 年度インタビュー時は、広野町立広野中学校勤務。特技は茶道と書道。

小野美佳子先生は震災時、富岡第一中学校３年生の副担任でした。津波から逃げるよう指示を受けた後、他の先生達と一緒に、近隣の幼稚園の子ども達の手を引いて丘へ避難。その後、家族と合流できた先生は、入院中の父親といわきで再会を果たします。私生活も落ち着かない中、三春町の桜中学校での兼務も始まりましたが、それも１週間程で終了。そこには兼務として勤める側、受け入れる側の難しさがありました。仮設校舎・三春校の再開にあたっては、あの時が一番充実していたと振り返る先生に、少人数教育の難しさについても、語っていただきました。

家族とともに避難を重ね、三春からいわき、那須、宇都宮へ

── まずは 2011 年３月 11 日に所属していた学校と、当日何をしていたかについて教えてください。

小野　当時は富岡第一中学校で３年生の副担任をしていて、音楽と家庭科を教えていました。地震が起きたのは、卒業式が終わって、職員室で昼食を食べ終えた時でした。本当は、その日の午後３時半頃には帰りたかったのですが、地震が起きてそういう状況ではなくなってしまいました。

地震が起きてしばらくは、机の下に潜っていました。揺れが大きく、本などがものすごく散乱しました。

揺れがおさまった時に、とりあえず校庭に避難しました。地震前から野球部が校庭で練習をしていました。その中にラジオを持っている生徒がいて「今の地震は震度６強みたいです」と話していました。校舎に戻った直後、教育委員会から電話が来て、「津波が来るかもしれない。中学校の隣にある幼稚園の子ども達がまだ残っているから、その子ども達を連れて、近くにある高台に避難するように」と言われました。それで、幼稚園の子ども達の手を一人ずつ引い

て、高台に避難しました。

── 高台に幼稚園の子達と一緒に避難をして、その後、実際に津波が来たのですね。

小野　海がきらきらと光りました。「津波が来る」と思っていたら、第１波が来ました。第１波は、大きな波という感じではなかったのですが、町の中まで波が押し寄せてきました。普通に散歩しているおじいちゃんがいて、丘の方から「早く逃げて！」と、皆で声を掛けたのを覚えています。

幼稚園の子ども達の中には「怖いよ怖いよ」と泣いてしまう子もいて、先生が「大丈夫だよ」声をかけながら、津波が見えない場所に子ども達を連れて行っていました。

── その後、先生はどういう行動をしましたか？

小野　第１波が来て、それから第２波も来ました。富岡川の上流の方に津波が上ってくるのも見えて、皆でびっくりしていました。雪も降ってきて、声も出ないという感じでした。そんな中、中学校から、「先生方、戻ってきてください」という教頭の放送があって校舎に戻りました。津波は学校まではきていませんでしたが、学校の100 メートル近くまで水に濡れていました。

校舎に戻った後は、学校が避難所になるということで、その準備を始めました。北校舎の３階に避難所を作ろうということだったので、水を運んだり毛布を運んだりして、避難所を作りました。そして、職員室を掃除していた時、小名浜から来ている先生が「帰りたい」、「自宅が心配だ」と言っていました。それで、「校長先生、この後どうするか指示してください」と、私が一人で校長に直談判に行きました。私も自宅に母がいて、いわき市の病院に入院中の父のことも心配でしたので、「早く帰してくれ」と。そして、校長から、「自宅が心配な人、それから沿岸部に住んでいる人は、もう帰っていいです。地元の人だけ残ってください」と言われました。それで、すぐに車に乗って学校を出ました。夕方４時を少し過ぎた頃でした。

学校から自宅に向かう途中、ある女子生徒の家の前で信号待ちをしていたら、「小野先生」と声を掛けられたのです。驚きましたが「大丈夫？」と聞いたら、「大丈夫です」と笑顔で私の方に寄ってきてくれました。車の中と外とで話をしているときに、ふとその子の後ろを見たら、家の中はひどい様子でした。まるで、戦争の後のような感じで、その子の笑顔だけが今でも印象に残っています。その子と別れた後に双葉町の自宅へ向かいましたが、普段は 20 分の帰路に、4、5 時間はかかりました。帰宅したのは夜の９時頃でした。

── かなりの遠回りを余儀なくされたのでしょうか？

小野　途中の国道が、大熊町の原発の入口付近ですでに閉鎖されていました。それで、大熊町から双葉町に続く旧国道と呼ばれる道路を通っていったのですが、全く動きませんでした。その間も余震が頻繁に続いていましたし、これはもういつ着くか分からないなと思いましたので、今度は旧国道から双葉町細谷の工業団地前を通って、海側の方に続く道に行きました。そちらの道は途中、地割れで半分通れないような所もあったのですが、何とかそこから双葉町役場の方に出ることができて、ようやく自宅にたどり着きました。

ただ、自宅にはたどり着きましたが、町は停電で真っ暗でした。そして、地震のせいで家の玄関のドアが開かなくなっていました。一階の窓も、どこも鍵が開かなくて。家の中で飼っていた犬がワンワン吠えていました。それから、母親の姿が見えなかったので、どこかに避難したのだろうと思い、とりあえず双葉町役場に行きました。役場では近所の知り合いの方も避難してきていました。ちょうど町長が会議で来ていた人達をどのように帰すかという話をしていました。そんな様子を見ていたら、そこに自衛隊の方がいらっしゃいました。

── その日のうちに、自衛隊が到着していたのですね。

小野　そうです。もうすでに自衛隊の方がいらっしゃって、すがるように、「実は家のドアが開かなくて困っています。どうにかなりませんか。」とお願いしましたら、快諾していただき、5、6 人の方に来ていただいて、2 階へ登ってたまたま鍵がかかっていなかった窓から家の中に入っていただきました。それで家の中から、犬と、必要な物を出してもらいました。後から聞いたら、自衛隊の郡山駐屯地の方だったそうで、とても感謝しています。「犬は苦手なんです」と言いながらも対応してくれて本当にありがたいと思いました。その後は、母を探して、双葉町役場、双葉中学校、双葉北小学校、それから厚生病院の近くのヘルスケアなど、色々な場所に行きました。結局、母は避難所をめぐりめぐって双中にいましたので、そこで会えました。余震が続いていたので、その日の夜は双中の校舎や車の中で過ごしました。

── 中学校の体育館は、満員だったのですか？

小野　いえ。体育館ではなく、避難されてきた人は校舎にいらっしゃいました。翌朝７時頃には、「皆さん、校舎内に避難してください」という校内放送がありました。その時には、既に防護服を着た人が 6、7 人、中学校に来ていました。そしてそこから 30 分もしない間に、「原発が危ないので、西の方に避難してください。ここにいらっしゃる方は、三春方面に行ってください」と言われました。それでいち早く、私は自分の車で三春方面に出発しました。

三春に行くまでは国道 288 号線を通って行きましたが、大熊町と都路村の境辺りにすでにバスが十数台も待機していました。きっとそのバスで大熊町の人達は一斉に避難をしたのだと思います。双葉町は避難所ごとに行き先は別だったみたいです。

── 先生が三春に着いたのは、何時頃でしたか？

小野　大体、午前 10 時頃でした。途中、案内の人から三春町交流館に避難してくださいとのことでしたので、そこを目指して行ったのですが、まだそんなに人も到着していない状態でした。テレビのニュースでは「原発が危ないです」「3 キロ圏内の人は避難してください」「5 キロ圏内の人は避難してください」というような話が出ていた頃でした。

その交流館で、偶然にも、教え子のお父さんで東電関係の仕事をしている方に会いました。第１回目の爆発はお昼前だったような気がしますが、テレビで爆発したのを見て、「これはまずい。トリチウムが出たら大変だ」と言っていました。それで、「ここは、大丈夫ですかね」と聞いたら、「風が福島方面の方に吹いているから、多分三春は大丈夫だろう」と言ったので、少し安心しました。その間に買い出しに行ったり、少し休んだりしながら、偶然にも教え子達にも会って、「大丈夫だった？」と無事を確認し合いました。

結局、三春にはその翌日の 13 日までしかいませんでした。いわきの病院に入院している父親が心配だったので、その日の朝に郡山市に出て、国道 49 号線を通りいわき市に向かいました。

父が入院しているいわき市立共立病院に着いた時には、面会が制限されていたのですが、１家族２名まで面会可能ということで父親に会うことができました。その後は父の妹である叔母の家に、2、3 日程お世話になりました。ところが、2 回目の爆発があり、いとこも心配し始めて、14 日か 15 日には「もうここにはいられない」という話になり、最終的には栃木県の那須市に避難しました。那須では 2 日間、旅館に泊まっていましたが、その旅館にもいわきの人達が避難してくるようになりました。

一方、入院していた父親は、「歩ける人は退院してください」と言われ、病院から宛名のない紹介状を渡され途方に暮れていましたが、運よく私の弟が住んでいる静岡県のがんセンターで受け入れてもらうことになりました。病院近くに住んでいた叔父に車で父親を那須まで送ってもらい、15 日頃には新幹線も那須から通るようになったので、父親と母親は新幹線で那須塩原駅から静岡に向かいました。私は叔母達と宇都宮のアパートを借りることになりました。

私生活の建て直しで
精一杯な中、学校再開へ

── 避難している間は、学校とは連絡を取っていましたか？

小野　いえ。その時は、取れなかったのです。そのため「小野先生は死んだんじゃないか」という噂になったようです。実は地震前にちょうど携帯電話からスマホに変えたばかりだったのですが、当時スマホの電源がなかなか手に入らず大変でした。携帯電話の電源は、結構どこの避難所に行ってもあったのですが、スマホの電源を見つけるまでには３日くらいかかりました。結局、大田原市のドコモショップまで行ってやっと充電できました。そしてようやく学校にも連絡できました。それまで、自分のことで精一杯でした。

── では年度内は、そういった形で避難をしながら、ご自身の生活を整

えることを優先していったということですね。

小野　父親の入院、手術などもありましたので、申し訳ないですけれども私は家族の事を優先させてもらい、宇都宮を出て、神奈川県相模原市の叔母の家に1週間、その後静岡県沼津市の市営住宅に避難し父親の手術が終わるまで過ごしました。

　校長から「戻ってきてください」、「富岡一中の先生方は、郡山市の安積行政センターに集まってください」と連絡が来たのが、3月29日だったかと思います。その際に「この学校に行くように」という指示があって、他の学校に「兼務」しました。私は三春町にあった桜中学校に行きましたが、そこには富岡一中、二中合わせて10人ほどの教員が兼務しました。桜中学校では、「何をしてもらっていいか分からない」というぐらい突然のことだったと思います。結局は1週間程しかそこには勤務せず、私は安積行政センターに戻りました。行政センターでの仕事は、生徒の転学や指導要録、教科書関係の書類を送付したり、卒業生が確実に進学したか確認したりする作業を行いました。

── その安積行政センターでは、いま残っている富岡の子ども達の教育をどうするかという話も、出始めていたのですか？

小野　出ていました。双葉郡の中でも、早い学校は4月に再開しましたし、他の学校も徐々にそういう状況になっていましたから。これからどうするかを決めるから、先生方に集まってほしいと言われ、「学校を再開した方がいいか、しない方がいいのか」ということを、教育長から私達も聞かれました。正直なところ、私としては自分の心の状況がこんな状況でしたので、「もう少し落ち着いてからにしてほしい」と思っていました。でも、子どもがいなかったら町が復興しないということで、学校は早急に立ち上げることに決まりました。

── 徐々に、仮校舎なり仮設校舎に向けての話が、安積の行政センター内で始まったということですね。

小野　はい。場所を探していたのは教育委員会の方でしたが、最終的に三春校舎に決まったのは、6月頃だったと思います。

　私のように行政センターに戻って学校の事務的なことをする人もいました。そこでは、私は9月の学校再開に向けて、7月頃から意向調査というか、「戻ってきますか、戻りませんか」という手紙を、生徒達に送ったりしていました。

── 三春町で開校することが決まった時の先生方の反応はどうでしたか？

小野　実際に現場を見てここでやるの？というのぐらい建物が震災後そのままの状態でした。その場所は葛尾村も候補としてあげていたらしいです。結果的には、別の場所にした葛尾中学校の方が良かったのかもしれません。旧要田中学校はとてもきれいでしたから。「7月に改修工事をやります」という話でしたが、「改修工事をやったところでどうなることか」というくらい、本当に酷い状態でした。

── そのような中で、先生方で手分けしながら、子ども達を迎え入れる準備をしたのですね。

小野　そうですね。文科省のポータルサイトなどから色々なNPO法人を検索したりして、支援のお願いの連絡をし続けていました。その結果、色々な方から色々な物を支援していただきました。

── そうした準備を終えて開校する時、子ども達が初めて三春校舎に来た時は、先生はどんな印象でしたか？

小野　正直なところ、戻ってきた人数はそんなに多くなかったので、「これぐらいしか戻ってこなかったのか」という気持ちがありました。まして卒業した学年の副担任だったので、「戻ってきてくれて、ありがとう」というのは、私としては、そんなにはなかったです。

　三春校が開校した時は、私は1学年の主任でした。1学年では、富岡一中の生徒は11人、富岡二中の生徒は4人ほどでした。担任は持ちませんでしたが、富岡二中の子達にも教えるというのがすごく新鮮でした。初めてのことばかりでしたから、今思うと大変だったし、すごく戸惑うこともありましたが、あの時期は結構充実していたような気がします。

── 2011年度が終わった時には、ほっとしましたか？

小野　ほっとするというのはなかったです。結局、あの校舎で「またこの先どうなるのかな」ということしか考えられなかったです。色々な不具合があって、給食がないという状態もあったし、不便なことばかりでしたから。

　でも、そんな中でも一中だけではなくて二中の先生もいらっしゃったし、和気あいあいとしていました。かなり飲み会にも行きましたね（笑）。先生方は皆、仕事に関しては向かう方向が同じでしたし、本当に必死でしたから、色々な場面で意見を言い合ったりして「いや、こうじゃないでしょ」、「ああでしょ」みたいな感じもありましたが、振り返ってみれば、その時が一番充実していたなと思います。

── 2012年度には、何か印象的なことはありましたか？

小野　2012年度は、持ち上がりで2学年主任を担当しました。4月下旬頃にドイツから招待があって、夏休みにドイツへ3週間くらい行く機会がありました。なぜその招待があったのかというと、放射能に汚染されているであろう土地の子ども達が、被爆を避けられるようにといった理由のようでした。それで双葉郡の学校に声が掛かったそうで、最終的に富岡町で引き受けたようです。2学年と3学年の希望者約20名と引率教諭5名で行きました。他の町も、色々な国から招待を受けていたみたいです。それで外国に行った学校は多かったです。視野を広げて、子ども達も考えるものがあればいいのかなと思いました。

　その後、私達がドイツに行った時にお世話してくれたボランティアの学生の人達が日本に来て、富岡の学校を訪問してくれたこともありました。

少人数教育は「お互いがお互いを育てること」が難しい

── 最初の2年間で、避難している子ども達と向き合ったり、つながりを作っていくにあたって、何か意識したことや気を付けたことはありますか？

小野　今もそうですが、基本的には「その子のことを、よく知る」ということでしょうか。やはり子どもによって、特質などそれぞれ持っているものが違います。抱えている悩みや考えていることも違います。特に、三春校に戻ってきた子達は、転学先で失敗しているというところが、一番大きかったです。避難先で嫌な目に遭ったとか。だから、そういったことをよく考えて接するということをスタンスとして指導を続けてきました。

── 震災前に比べ、先生の意識の中で、その部分はかなり強まったということですか？

小野　そうですね。やはり、大きな集団を指導するのと、三春に来ている十数人の子ども達を指導するのは違いますから震災前と指導は変わったと思います。一人ひとりがもっとよく見えてくるので、「こういう風にした方がいいのに」、「このように接してあげたほうがいいのかな」と考えることはありました。

── それは、小野先生の教員としての変化という部分でも、震災・原発事故の前後で、大きく変わったということでしょうか？

小野　もともと生徒一人ひとりにあった指導をすることを心がけていたのは変わりませんでしたが、三春校では、そこに難しさがありました。一人ひとりの抱えているものが大きかったというか。

　また、「少人数は指導しやすい」と言われますが、少人数であることの弊害も大きかったように思います。子ども達の中で「お互いがお互いを育てる」ということが少人数ではなかなか難しいのです。人数が少なくなればなるほど人間関係が固定化され、視野が狭くなるし、先生との距離が近くなって、私達も見なくてもいいものを見てしまう部分が出てきます。そして余計に、抱えるものが教員としても多くなってしまう。あれもこれもやらなければならないし、あれもこれもやってあげなければならないと考えがちになってしまいます。だから、そういった子達の指導の在り方というのが、自分の中ですごく変わったと思います。

── 少人数だと、家族の話も含めた色々な部分を全て、先生達が把握してしまいますね。また、受け止める側である先生方の中にも、受けとめ過ぎて重くなってしまう方もいたのではないかと思います。少人数教育は難しいですよね。

小野　そうですね。そして、やはり「先生と合わない」という子も出てくるわけです。そうすると、子ども達には逃げ場がなくなります。30 人ぐらいいれば教師とうまく関わらなければいいのですが、5、6 人だと逃げられないところがあります。うまくいけばいいけれど、うまくいかなかった時はがんじがらめになって、逃げていくしかない部分があるかなと思います。そして、仮設校舎で勉強するということについても、あくまでも仮設なのでやはりきちんとした環境を整えてあげることが必要だと思います。その町の学校で学びたければ、町が早く帰還して学校を建てるしかないと思います。

── これから先、震災の経験がない先生が増えてきます。そういう方々に、小野先生達のご経験をつないでいくのか、つないでいくべきでないのか。その辺りについては、どう考えていますか？

小野　あまり過去にとらわれていても仕方ないのかなと思いますし、地球温暖化なども考えると、災害はこれからもっと増えてくると思います。でも、震災前であろうが、仮設であろうが、今勤めている広野中学校であろうが、教育は人を育てることですし、環境が違っても、子ども達の本質はずっと変わりません。その子どもにあった接し方や指導方法を考えていってあげればいい。学校に来るまでは子ども達は白いキャンバスのままで、そこに色を付けてあげるのが教員の仕事です。その子の人生に関われることができるのが教員だと思います。

　今回の震災を通して私達がやってきたことは、やはり、つないでいった方がいいのかなとは思います。「昔のこと」では、終わらせられません。

2022 年1月6 日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

富岡町
武内雅之 先生
たけうち・まさゆき

大熊町出身、幼稚園園長、小学校校長、中学校校長。2011年3月の震災発生時は富岡町立富岡第二小学校に勤務。2021年度インタビュー時は、富岡町立夜の森幼稚園、富岡第一・第二小学校、富岡第一・第二中学校勤務。趣味は野球観戦。

震災時に富岡町立富岡第二小学校の教務主任という立場にいた武内雅之先生。先生は、教頭の下で全体を管理する立場にいながら、震災後、様々な場面で子ども達や保護者の“弱さ”に直接寄り添う姿勢を持ち続けてきました。2022年春に閉校となる富岡町立小学校三春校にとって武内先生は最後の校長となりますが、先生にとって、三春校は立ち上げメンバーとして自身を大きく成長させてくれた場所でもあるそうです。保護者や地域の方々にも寄り添い、連携することを大事にしてきた先生の10年間のお話を伺いました。

突然の大きな揺れ、富岡一小と二小とで“恐怖”の種類は違っていた

── まずは 2011年の 3 月 11 日に所属していた学校と、当時の立場を教えてください。

武内　富岡町立富岡第二小学校で、教務主任をしていました。教務主任は、教頭の下で全体を見るような役目です。その当時の富岡二小は、記憶によれば、学校規模としては郡内だと浪江小の次に大きく、相双管内だと原町一小、浪江小に続く 3 番目の児童数でした。約 500 名くらいだったと思います。

── 震災当日は、どのような状況下で被災されたのでしょうか。

武内　大地震が起こった時は、5 年生全員 90 名弱と私を含めた教員 4 名で、体育館で卒業式の会場準備をしていました。体育館には、頭を隠せるものが何もありません。天井のライト、バスケットゴールも驚くほど揺れ、グランドピアノが体育館を走り回っていました。とにかく子ども達を一カ所に固めたいと思ったのですが、上のライトが気になる。ある若い先生がゴール下に子ども達を集めたの

を見て、「そこはダメだと！」と、怒鳴った記憶があります。

長く地震が続いている状況下、私は職務上そこだけにいるわけにもいかなかったので、まずは出張で担任が不在の学級を確認に行きました。駆けつけてみると、担任の先生が既に戻っていたので安心しました。その後、教頭先生と合流。放送機器が停電によりダメになったので、いわゆる電池式のハンドマイクを持って校内を回りました。

── 地震発生から約 30 ～ 40 分後の津波については、どのように知りましたか？

武内　全校生徒が校庭に避難し、迎えに来た保護者に子ども達を受け渡している状況下でも、津波の情報は入っていませんでしたし、その頃は揺れの恐怖があまりにも大きかったです。その後、ある程度の人員の引き渡しが終わってから、連絡も特になく「富岡二小も避難所に」となりましたが、そこでおかしいなと感じたのが、「一小の保護者が多数こちらの避難所に来る」となった時です。「なぜ一小の保護者が？」と思っていた時、「富岡駅が壊滅状態」と聞いて、「津波だ。海側、一小側は大丈夫かな」と初めて考えました。ですから、一小と二小とでは、あの日の最初の数時間の恐怖の種類というのは、実は違っていました。

── そうして津波にようやく気づき、先生は避難所となった二小の体育館で、どのような役割を担われたのでしょうか？

武内　体育館の対応は、スタート段階で行った後は他の先生方にお願いする形をとり、私は校庭に入る避難者の車の誘導を、教頭先生と二人でやっていました。一晩完徹しましたので、夜中までです。「これ以上受け入れたら、避難所から溢れてしまう」となってから、今度はひっきりなしの電話応対です。完全な停電状態でしたが職員室の電話は生きていましたので、とにかくひっきりなし。いわゆる関東圏から、富岡町民の安否確認の連絡が、ほとんど途切れなく来ていました。

学校を離れた後は、家族を探して避難所を全て回った

── そういった学校の業務をされている間、ご自身の家族のことも心配だったと思います。ご家族と連絡は取れましたか？

武内　当時、家内は浪江小に勤務していました。子ども達は、大熊の熊町小に通う小学生、双葉高に通う高校生、そして大学生の３人で、子ども達とは全く連絡が取れませんでした。ただ、先ほどお話したように小学校の電話は生きていたため、浪江小の家内とは確認の電話が取れました。大学生の子はその時は大熊町内の自宅にいましたが、私の母を心配して駆けつけてくれたという状況でした。

── その時、「学校のこともやらなくてはいけないが、家のことも心配だ」という点について、奥様とどのようなお話をしましたか？

武内　まず家内の方は、状況としては私と一緒かなと思っていたので、小学校で全ての子を親元に引き渡せた状態になったら動けるだろうと。

子ども達の方は、自宅が原発とも近く海沿いでしたので、「学校として避難してくれるだろう」と思っていました。親が迎えに行けない状況があるということは、我々も自分の学校で察していたので、「親が行ける状況でなければ、子ども達は学校の先生方と一緒に動くのでは」と考えました。もしくは、町の避難所へ学校として移動するだろうと。

現実には、夜中に家内が子ども達と合流できたそうです。私の方は、二小の子のうち一人だけ、11 日の間に迎えに来られなかった家の子がいたので、先生方とその子を取り囲んで一晩過ごしました。たぶんご両親とも東電関係だということで、来られなかったのでしょう。

その子を次の日の朝方にご両親に引き渡した後、我々はフリーになったので、私はそこから大熊町に行きましたが、原発による規制で道路封鎖が所々で始まっていたため、自宅には入れませんでした。海に行く側の道路が閉鎖になっていて、そこを抜けて行ったのですが、人の気配がなく。一応家の近くで声をかけ、誰もいないことを確認して帰ってきました。「きっと学校にもいないだろう。そうなれば、大熊町の町民体育館に行っているはずだ」と向かってみて、初めて家内と大学生の子どもと小学生の子どもと対面できました。

ただ、そこには高校生の息子がいませんでした。息子に連絡を取る術は全くなく、携帯も繋がらない状態でした。

私が合流した時点で既に原発の話題も出ていて、バスで避難するという話が進んでいたのですが、「息子がもう一人いないから、他の場所へ避難はしたくない」と家内が言い出しました。そこで、少しトラブルですよね。私の母親もその場にいましたので、母親の方は一緒にいる人達に、「申し訳ないけれど、息子がもう一人いないので、母も一緒にバスで避難させてほしい」とお願いをして。

家内は、「避難しないわけにはいかない。避難した後、私が戻ってくるから」と説得しました。その時は車が２台あったので、私がここに戻るからと。雪も降った後で山道でのスリップも心配な中、２台で併走し、田村市都路という地区まで着くか着かないかという時に、携帯に息子から連絡が入ったんです。もう本当に驚きました。その後先生とお話をさせていただき、「間違いなく都路まで届けます」という言葉を聞いて、都路で待ちました。

車で都路の避難所に到着した後は、来るバス来るバス、母親と息子を探すだけでは仕方ないので、下車するおじいちゃんおばあちゃんの手を引いたりしていました。内心では、「あぁ、母親と息子はいなかったか」と思っていたんですが、その場所で高校生の息子と会うことができました。

そしてその次が、母親探しです。高校生の息子が見つかるまでに、大学生の息子と私で全ての避難所を見て回ったのですが、見つかりませんでした。実は、母親は新しく開設された避難所にいたのですが、それが分からない状況でした。ある避難所で大熊の教育長と会いまして、他に避難所はないかという情報を町からもらい、それでようやく田村市船引の、今は支援学校となっている場所で母と会えたのです。

── ようやく全員が揃った後は、今度はどこに向かいましたか？

武内　１台の車にはもうガソリンがなかったので、もう１台の８人乗りの車に、うちの家族５人と母親、私の姉。それから、ずっと昔から働いている従業員だった方が乗り込み、栃木県の家内の実家、矢板市というところに向かいました。

各避難所では、同じ町内の知人もいて、「一緒にここで」というお声もいただいたのですが、「少なくとも高齢の母にだけはゆったりとした場所を提供したい」と思いました。ホテルも探したのですが、もうどこも空いていませんでした。栃木県も結構大変でしたが、最終的にはそこにお願いしました。

── 避難中、学校のことも気になっていたと思いますが、何か学校の業務をしていたということはありますか？

武内　家内の勤めている浪江小も、私の勤めている富岡二小も大規模の学校でしたので、とにかく生徒児童の安否確認が続いていました。私は先生方に、電話連絡で可能な限り、生徒の安否確認が OK のものを塗りつぶしていってほしいとお願いしました。それが最初の３日間くらいである程度は埋まったのですが、どうしても残ってしまう。

手元には名簿も何もないので、今度はその連絡がつかないメンバーの名前を手で書き出して、PTAの重鎮に連絡を取って情報収集です。先生方では同じ番号宛にしかかけられず手詰まりなので、「又聞きでも何でもいいから」と、当時の PTA の役員さんとか顔の広い方で私が知っている方に連絡をしていきました。携帯の使用料金は、驚くほどでした。

「兼務」という教務主任の「助っ人」として、子ども達のケアを最優先

── その後、富岡町の小中学校は郡山市に移りましたね。その時には、先生は栃木、矢板から色々と指示されていたのでしょうか？

武内　まず３月 30 日にビッグパレットに集まれという指令が来ました。そして４月からは避難している子どもが多い学校に赴任することになるので、急遽、「郡山界隈に所在を作るように」と。私は息子の学校のことも考えていて、家内の学校が二本松ということもあったので、あえて福島に住む場所を探している状況でした。そういった経緯で、一時期は、福島市から郡山に通いました。

── 二小の子達は、多くが郡山市の永盛小に行ったのでしょうか？

武内　永盛にもいたのですが、福島県内の大玉村に行った子も一小と二小合わせて 20 名弱くらいと多かったので、私は大玉村の大山小学校というところに「兼務」という形で勤めました。当時、その学校に富岡一小・

二小の先生方が6、7人配属になりましたので、先生方が各学年のプラスワンの助っ人に。私の方は、教務主任の助っ人という形で勤務しました。

── 具体的にどのような業務をしていたのでしょうか？　また子ども達を間近で見ていて、どのようなことを感じましたか？

武内　通ってくる富岡の子ども達のケアが一番。あとは、避難所への訪問や、通常の授業です。子ども達のことについて言えば、学校では我々がいたということもあって、大きなトラブルはなく過ごしていると感じていました。ただやはり、避難所ではストレスを抱えている方がいて。実際に避難してからの本当の初期段階というのは、「子ども達以上に、保護者の方が苦しそうだな」という感触でした。ですから、子ども達とは学校で会えるので、避難所に行った際にはできるだけ保護者と話すことを心がけていました。

三春校の開校、「子ども達には、これからの7ヶ月で1年分の体験を」

── 先生は、富岡町立小学校三春校の立ち上げにも関わっていらっしゃいますね。大山小での教務主任の兼務は、三春校が開校する2011年8月頃までですか？

武内　そうですね。あの頃は8月人事といって、8月に転勤が決定することがありました。信じがたい話ですが、8月人事が終わって、8月に入ってからですね。急遽、「一小・二小から5名ずつ、三春校の立ち上げに関わって欲しい」と連絡があって。そして、たった1ヶ月弱で、9月1日の三春校開校に合わせた準備をそのメンバーで行った、というのが正直なところです。

── 開校準備の1ヶ月弱、集まったメンバーで色々な作業をされたということですよね。印象に残っていることはありますか？

武内　印象に残っていることといえば、バスに乗って三春校に転用される予定の建物まで初めて連れてこられた時は、ちょっとワクワクしましたね。始められるという思いが強かったですし、メンバーも予想していたより人数がいました。

でも、それで実際に建物の中に入ってみたら、まだ天井が落ちている状態でした。教育委員会に怒られますけれど、本当にやる気があるのかと思いましたね。帰りのバスの中は、誰も一言も喋りませんでした。

── 話もできない、何を言っていいか分からない状態だったということですね。ようやく迎えた9月1日は、どんなお気持ちでしたか？

武内　建物には開校一週前頃になって入れるようになって、物品も運ばれてくるようになりました。当日は大雨でした。正直なところ、嬉しいだとか、感傷に浸れる程のゆとりはない状態でしたね。

8月までの間に子ども達があちこちの学校でどんな勉強をしてきたかは分かりませんでしたが、「子ども達の今の状況はどんなものか、皆でしっかり捉えていこう」というのがスタートでした。

そして、「子ども達には、これからの7ヶ月で今年1年分の体験をさせよう」としていました。もしかしたらプールも入っていないかもしれない。運動会もやっていないかもしれない。だからここでの7ヶ月で「通常の1年のスタートからラストまで」を完結させて、空白を作らないようにしたいというのが、一番の思いでした。被災していない学校ではできたけれど、被災した学校だからできなかったという記憶を、子ども達に残したくなかった。ものすごくハードで、無我夢中で動いているなというのは、正直なところありました。

でも、最初のメンバーの中には、先輩も、若い先生もいらっしゃった。私は真ん中くらいのポジションでしたが、ものすごいチームワークだったと思います。

── 三春校は、一小・二小、中学校、幼稚園が一緒の建物でした。先生にとっても初めての経験だったと思いますが、三春校での経験をどのように捉えていますか？

武内　最初は、「周りを見るよりまず小学校」という意識でスタートしてしまったと思います。それは仕方ない面であり反省点でもありますが、同じ建物内でしたので、そこから何ができるかという意識に変わっていったのは事実です。

例えば授業一つにしても、「中学校の先生にも見てもらって意識を高めよう」とか、一緒に行事をやるにはとか考えるわけです。終業式だって、校歌を4曲も歌っていると歌ばかりで長いんですよ。それで、「どうする、1番だけにする？」など試したのです。

そうして少しずつ機能しやすい面が出てきたところに、「大きな行事を一緒にやったらどうか」という話が出て、すりあわせる場面が細かく出てきました。

幼稚園だって、最初は「そのスペースを、小学校に欲しいな」と思っていました。でも、幼稚園生がいれば小学生は「お兄ちゃん、お姉ちゃん」になれる。その意識も大事だったし、幼小中がまとまっていることは、安心感に繋がったのではないでしょうか。

例えば当時、学校に来られない子が小学校にいました。バスに乗ってくるけれども、中学生のお姉ちゃんと離れたくない、と。それで、中学の教室で一緒に朝の会をやったこともありました。そこでクールダウンしてから、小学校の教室に行く。もし中学校がなかったら、あの子は学校に来なくなっていたかもしれません。

震災で見えてきた、大人の“弱さ”

── 地震、津波、原発事故での被災の経験は、先生の子ども達との接し方に、何か影響を与えましたか？

武内　震災のためとははっきり言えませんが、「これだけ頑張る力を持っているんだ」と、子ども達を見直した部分はあります。

あの状況の中で、楽しく笑顔で活動している。間違いなく、我々はそれに支えられていたと思います。スタート時には、関東圏でいじめに遭って戻ってきた子も何人かいましたし、保護者からそういった悩みを聞くこともありました。でも、いつまでもくよくよしているのではなく、しっかり切り替えていた。そしてまた、「先生方に迷惑をかける子」になっていくのも、子ども達の強さかなと。

逆に、保護者の弱さをより感じられるようになったのも事実です。他の先生方と違う考えかもしれませんけれどね。「見えている部分より、大人の弱さってあるんだな」と。「親はしっかりしなきゃ」という思いは、我々教員のどこかにはあると思うのですが、その弱さもしっかり受け止めなければという意識が私の中で強くなったのは、その当時に感じるものがあったからかもしれません。強そうに振る舞っていても心底話すと弱い部分も見えてくるし、「話をすることでも、保護者の役に立つんだ」と感じたのも、震災のきっかけがあると思います。

── 震災から1年が経った2012年度は、どのような気持ちで三春校をやっていこうと先生方の中でお話されましたか？

武内　前の年に7ヶ月でやってきたことを、今度は1年かけてできる。もちろん、新しいことも取り入れながら、繋げていくこともしなければならない。子ども達も、少し腰を据えた形での力をつけていかなければならないというところです。それから、先ほど少しお話した中学校や幼稚園との連携の強化であったり、保護者をどんな風に巻き込んで

いこうか、という部分もありました。

── 町に学校があったときは、保護者も同じ町で過ごしているので、呼べば学校にすぐ来られる状況でしたが、三春校ではどのように保護者を巻き込んでいったのでしょうか？

武内　行事への参加が一番大きいかなと思います。できるだけ活動を見てもらい、頑張っている子ども達の姿が、親の力にも繋がっていけばと思いましたね。PTA 活動というところまではいきませんでしたが、行事を見に来た保護者からは、「ありがとうございます」という、お声をいただきました。子ども達が元気な表情で、楽しく学校に行けていることに感謝しますと。

　残念だった部分としては、当時は郡山にも子ども達が多くいたので、学校を郡山に作ってもらえていたら通えたのにという、ここに来ていない保護者からも連絡が入ったことです。決してクレームいう訳ではなく、残念だったという連絡をいただいたのも、2012 年になってからは結構ありました。それだけ学校再開への期待が大きかったことに、ぐんと響くものがありましたね。一小・二小からはかなりの人数が行っていましたので、あの近辺にという期待が町民には間違いなくあったと思います。

── 保護者の他に、学校外の地域の方々との連携も三春校の一つの特徴と聞いています。実際にどのようなことをされていましたか？

武内　当時は、授業参観もできる状況ではありませんでしたし、仮設に家庭訪問に行くのも時期尚早だと判断していました。

　そこで 2012 年の夏休み、先生方でバスツアーをして、子ども達がいる郡山、三春周辺の全ての仮設住宅を回ってきました。仮設住宅には、三春に来ている子もいれば近くの小学校に通っている子もいますので、三春校の教員という立場で「子ども達をよろしくお願いします」と担当の方に挨拶をして回り、朝の送迎のバスなども何か気づいた点があれば連絡をくださいとお話させていただきました。当時は教務主任でしたがバス担当でもあり、運転手さん、添乗員さんとの細かい連絡は私個人の携帯で取っていました。5 台のバスがありましたが、今でもそれぞれの方の携帯番号が残っています。

　実は昨日、三春校の子ども達が平沢の復興住宅にボランティアで大掃除に行きました。私は昨日行けなかったので、今日その挨拶に行ってきたのですが、2012 年当時も勤めていらした方が、10 年前のことについて、「全部の仮設を訪問してくれたんだよね」とお声をかけて下さいました。

── 先生は三春校を立ち上げてから、一時期は別の場所で勤務され、そして今年 4 月からまた三春校に校長として戻られました。「立ち上げ当時から変わらないな」と思う部分はありますか？

武内　三春校として考えた時にはやはり「子ども達が、この学校を好きでいてくれること」が変わらないですね。「僕達の学校なんだ」と自信を持って言ってくれる姿を、スタート当時目指していたので。先生方も、子ども達に対してあたたかいです。

── 先生の震災の教訓で、これからの若い先生方や次世代に伝えていきたいことは、どんなことでしょうか？

武内　子どもは無限の力を持っている、ということでしょうか。それをどんな状況であっても信じて、焦らず、伸ばしていくのが、教員の役目だと思います。当然立ち止まることもあるだろうし戻ってしまうこともあるだろうけれど、そう信じて子ども達に関わっていくことを基本として私も残りの教員生活を過ごしていきたいです。若い先生方、これから先生になろうとしている人、子ども達に関わる多くの方々にも、そんな風に考えていただければと思います。

2021年10 月15 日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

富岡町 志賀 仁 先生
しが・じん

大熊町出身、中学校教頭。教科は社会。2011年３月の震災発生時は富岡町立富岡第二中学校に勤務。2021年度インタビュー時は、大熊町立大熊中学校勤務。特技は柔道。

志賀仁先生は震災当時、富岡町立富岡第二中学校３年生の担任でした。福島第一原発の事故の影響で、富岡町は全町避難に。富岡町で教師の仕事を続けることができない状況下、「子ども達がいるから教師の仕事を続けることができるんだ」と改めて感じたことが、仮設の富岡第二中学校 三春校を立ち上げる際の原動力になりました。そして、今新たに義務教育学校立ち上げに関わる中、「あの時の経験がなかったら、今の自分はなかった」と確信しています。社会科の教員として、子ども達に伝えるべき震災や原発事故の記憶や思いについても、語っていただきました。

“安全神話”を信じていた自分　小さい頃から、事故は起きないと思ってきた

── まずは、2011年３月11日にどこで何をしていたか教えて下さい。

志賀　当時は、富岡第二中学校で３年生を担任していました。その日はちょうど、午前中が卒業式でした。式が終わって生徒達が部活もなく帰っていき、他の先生方と卒業した生徒達の話などをしながらお昼を食べました。その後、ある先生と廊下で立ち話をしている時に、生まれて初めて緊急地震速報を聞きました。そうしたら揺れ出して、職員室の棚がばんばん倒れ始めて。校長の「外、逃げろ！」という声が聞こえて、1階の職員室から直接外に出て校庭に逃げました。情報も電気もない状態だったので、少しでも情報が欲しくて車のカーナビのテレビを付けました。「大変なことになってる、それから津波も大きいのが来るかもしれない」という情報を職員同士で共有したことを覚えています。

　その後、学校の体育館は避難所になりました。

　町の職員の方もおそらく大変だったんだと思うのですが、町とも連絡が全く取れず、職員の方も来ない

状態でした。校長の指示で避難所の設営をしたり、来てから具合が悪くなる高齢の方もいたので、保健室からベッドや布団を運んだりして、なんとか避難所の設営、運営をやっていたような状態でしたね。

――その後は、先生もご自宅に戻ったのでしょうか？

志賀　夕方５時、６時頃まで色々な対応をして、校長から「とりあえず小さい子どもがいる家や、高齢の家族がいる先生は、一回自分の家に帰って、安否確認をしてきていい」と指示が出たので、６カ月ぐらいの子どもがいる私も、大熊町の自宅に帰らせてもらいました。その時、「職員室の片付けはとりあえず明日集合してやるから、来られる人は来てください」というような指示が出ました。

私の自宅は原発から７キロくらい離れているところで、家の方は大丈夫だったのですが、帰宅すると妻や子ども、隣に住んでいる私の親が、「心配で家の中にいられない」と言って、寒い中で外に立っていました。でも、「とりあえずちょっと落ち着いてきたから、中に入るか」という話をしているところで、21 時前だったでしょうか。「2キロ圏内避難指示」という大熊町の防災無線が流れました。

ただ、どこかに避難しろというわけではないし、原発から２キロ圏内の話でしたので、正直なところ「大丈夫だろうな」くらいの感覚でいたのです。でも、その後の 21 時 30 分頃の防災無線では、もう少しその範囲が広がっていました。「3キロ圏内避難、10 キロ圏内屋内待避指示」だったと思います。これはちょっとただ事ではないという感じがして、「万一があるかもしれないから、避難した方がいいんじゃないか」という話を家族としました。それで、南相馬にある妻の実家に連絡したら、受け入れてもらえる状況だったので、23 時半頃、妻の実家に行ったのです。

そちらは電気も大丈夫だったので、テレビを見て状況が大体分かってきました。「これはとんでもないことになっているな」と。原発事故の報道がどんどん出てきて、次の日は学校の片付けは行ける状況でなくなりました。そしてニュースで、大熊町や富岡町が、朝にはどんどん避難を始めているという光景を見ました。

――震災前には、例えば原発事故が起きた時のために、その対応策を考えたり、地震や火事と同じような避難訓練を実施したことはありましたか？

志賀　正直なところ、意識はあまりなかったです。安全だと思っていました。私は小さい頃から大熊町に住んでいましたから、学校での社会見学などで第一原発サービスホールや富岡町にあったエネルギー館に行きました。そこでの展示見学や説明から「事故は起きないようにできているんだ」と思い込んでいました。

地域では防災訓練はたくさんやっていましたが、いわゆる安全神話を信じていた部分が大きかったので、自分自身が原発事故の対応だったり、避難訓練だったり意識はそんなに高くなかったです。

――実際に南相馬に避難してから、先生はその後、富岡二中に戻ることはなかったのでしょうか？

志賀　すぐにはなかったです。12 日の午後に第１原発が爆発したニュースが流れてきた時、南相馬の妻の実家は原発から 25 キロくらい離れていたので、正直なところ大丈夫だろうと思っていました。ただ、妻の実家は南相馬でも西の方にあったのですが、東の方、海の方を見たら、今まで見たことのないような雲が、南から北の方にどんどん流れていくのが見えたのです。原発の爆発の影響かと思うくらいだったのですが、今度はニュースに「20 キロ圏内避難指示」と出てきて、「ここも危ないんじゃないか」と妻の実家の家族とも話し、とりあえず西の方に逃げた方がよいのではないかということになりました。

そして、その日に川俣町の川俣高校体育館に行きました。避難所で一晩を過ごしましたが、６か月の子どもがいたので、泣き声など、周りにも迷惑が掛かると思い、今度は福島市の私の妹のところに、一人暮らし用のアパートに、合計で 10 人くらいいるような状況になってしまいました。そして数日のうちに福島市もどんどん線量が上がってきてしまったので、県内から出ることにしました。３月 16 日、私の親と妻の親と共に、仙台にいる妻の弟のところに避難させてもらいました。仙台も地震が大変だったので、電気はありましたが、水もガスも出ないような状況でした。

校長から、しばらくは自宅待機の指示があったのですが、３月の下旬に、「３月 30 日に郡山市のビッグパレットに来るように、教育長から指示が出た」と連絡がありました。当日行ってみると、ビッグパレットには富岡町の人達が避難していました。

――30日に集まるまでの間に、学校の仕事は何かしていましたか？

志賀　自分の学級を中心に、卒業した３年生の安否確認をしながら、４月から避難先や高校はどうするのか情報を集めていました。結果として「福島第一原発の半径２０キロ圏内にある県立高校は全員合格」になりましたが、子ども達が全国に避難している状況で、本人や親御さんと話をしましたが、前が見えないことの不安を話す家庭がほとんどでした。また、個人情報は何も持ち出しできない状況で避難しているので、何人かの保護者に「誰々さんの番号、分かりませんか」などと聞きながら、連絡を取り合うことを避難先でしていました。

――４月１日以降のことを３月30日に話し合ってから、どのように動いたのでしょうか？

志賀　３月 30 日にビッグパレット行ったら、当時の教育長から「とりあえず４月から、先生方は郡山で勤務してください」という指示が出ました。すぐに家族に連絡をして、郡山に移動する準備を始めました。結局、妻の弟にも家族がいて、ものすごく迷惑を掛けている状況もあったので、妻と子どもと、私の方の親は、空き家をインターネットで探して、とりあえず郡山市で一軒家を借りる手続きをしました。４月１日は無理だったのですが、２日、３日頃から引っ越しをやって、郡山市に避難先を変えました。

何が正しいか分からず
不安になる大人達
支えは子ども達の存在

――当時、富岡町の子ども達は、小学生は郡山の安積第一小と永盛小、中学生は安積中にメインで通ったのでしたね。先生は安積中に勤務したのですか？

志賀　当初、富岡町は安積行政センターが本部になっていました。私達もまずはそこに行って、安否確認を継続したり、書類をつくったりする業務をしていました。また、大玉村や三春町にも避難所があって、そちらの方に手分けして行きました。

入学式はそれぞれの学校でやるから、先生方も各々行ってくださいというような感じでした。私は入学式に出席するメンバーに入っていなかったので、行政センターでそのまま仕事をしていました。その後すぐに「誰々先生は、どこどこの学校に行きなさい」という指示が出ました。そして私は、大玉村の大玉中学校に行くことになりました。

――大玉中では、どのような業務をしましたか？　授業を持って、富岡から避難して通ってる子ども達のケアのようなこともしたのでしょうか？

志賀　大玉中だけの話かもしれませんが、授業を持つわけではなかったです。富岡町の先生方用の部屋を一つ用意していただき、そこで「富岡町の仕事をやってください」といった感じでした。授業はしないけれど、授業を参観したり、富岡の子ども達に声を掛けたりということをしていました。

――混乱の時期の子ども達を見ていて、印象に残ってることはありますか？

志賀　子ども達も不安だった思いますが、先生方も不安でした。例えば、何マイクロシーベルトとかベクレルとか、私達でも初めて聞くような言葉が当時、いっぱい出てきました。何が正しい情報なのかも分からず、惑わされるというか。だから、先生方の中にはマスクを三重にしているような人もいました。皆が不安定だったと思います。

一方、子ども達がすごいと思うのは、大変な思いをしているのに、ちゃんと学校に行って、ちゃんと授業を受けていることでした。逆にそういうのを見て、励まされました。

――子ども達以上に、大人や先生達の方が大変なところもあったのですね。

志賀　大変だったと思います。私は家族で移動できたからいいけれど、単身赴任になっていた人もいるし、ご家族が東電関係だった人もいたと思います。当時は東電関係だというだけで、もうすごく生きづらかった部分もあっただろうと思います。

――保護者や親戚に東電関係者

がいる子ども達と接していく時に、気を付けたことはありますか？

志賀　私は社会科の教員なので、特に気を付けたことは、「授業の中で、東京電力や原発事故を一方的に批判しない」という点です。そこにいる子ども達が、場合によっては、自分の親を批判されることになってしまうので。そこはすごく気を遣いました。

それから、社会の学習指導要領にも書いてあるのですが、「多様な見解のある事柄、未確定な事柄を取り上げる場合には、特定の事柄を強調しすぎたり、一面的な見解を十分な配慮なく取り上げたりするなどの偏った取扱いにより、事実を客観的に捉え、公正に判断することを妨げないようにする」というのがあります。そこは、よく研修会などに行った時にも、話をさせてもらいました。特に原発事故に関しては、裁判が続いているものもあります。浜通り、双葉郡の子ども達は原発関係で働いているご家族もいるので、気を付けるようにしています。

── 大玉中の後は、兼務として、三春町立桜中学校勤務になったと伺っています。そこではどのようなお仕事をしていましたか？

志賀　桜中では、授業を行いました。既に社会の先生はいたので、補助的な位置付けでT2で入って、授業をしました。一緒に授業をした先生が若い先生だったので、相談を受けて答えたり、一緒に授業を構想したりしながら、授業を進めていました。

── 三春町は、そういった避難者を受け入れる立場の自治体でもありました。桜中の先生達とは、震災や原発事故のことを話しましたか？

志賀　大変だね、とはよく言ってもらっていました。だから、無理しなくていいよと。すごく良くしてもらったと、今も思います。

私自身の中で、この後どうなるんだろうというのは一番大きかったですが、結局のところ兼務であり、それも普通の状況の兼務ではないので、「富岡町の学校はどうなるんだろう、富岡二中はどうなるのだろう」という思いは、とても大きかったです。授業するのが当たり前の仕事だと思っていたところに、いきなり子ども達がいなくなったわけですから。子どもがいなくなったことで、無力感というか何もできないことが分かったというか。

ですから、「9月から富岡町の学校を再会するから、7月いっぱいで兼務を終えて戻ってきなさい」という指示があった時、子どもの前で授業ができるということは当たり前ではないんだ、子どもがいるから授業ができるんだということに、改めて気付かされましたよね。偉そうに子どもに色々言ったりすることもあるけれど、結局は子どもがいて、今の自分が成り立ってるということを考えさせられました。学校再開の知らせは、本当に嬉しかったです。

三春校の立ち上げに関われたことは、「それがなかったら今の自分はない」と思える財産

── その学校再開、富岡町立富岡第二中学校三春校の開校に向けて、校舎となる曙ブレーキの最初の状態を見た時は、皆さんが愕然としたと聞いています。先生もそうでしたか？

志賀　はい。曙ブレーキは、自動車のブレーキ作っている工場でした。私はここで学校を再開すると決定してから見に行ったのですが、その時点で天井には穴が空いているし、配線は伸びていましたね。え、どこどこ？ ここでやるの？ と。今、学校になってるところは事務棟ですが、工場と言ったらもっと広いんじゃないの？ というイメージもありました。最初に入ったところは倉庫みたいな所で、上から油が垂れていました。そこに荷物を運んだときに、「え、ここでやるの？」「ここじゃなくて、こっち側だ」などというやりとりがありました。

ただ、大変な状況で皆が苦しい思いをしている中でも、なぜか、わくわく感がありました。新しいことがこれから始まるんだという期待感です。「子ども達がいなければ、自分は何もできないんだ」ということが分かったからか、子ども達のためにしっかり頑張ってやっていこうという決意を新たにできたのかなと思います。

── 三春校という初めての仮設の学校で、先生はどのように指導していこうと思われましたか？

志賀　最初の年は2年生の担任で、8人のクラスでした。次の年も持ち上がって、3年生の担任をしました。生徒は一人増えて9人でした。学校ができたのは嬉しいですが、子ども達は、一回どこかの学校に入ったあと、戻ってきました。戻ってきた背景には本人や家族の事情があるので、そこに対する配慮や支援はしっかりしていかなくちゃいけないなとは感じていました。

しかし、子どもの心のケアやストレスマネジメントをやっていかなければならないと感じてはいましたが、なかなか難しかったです。

── 2012年度の3月に、2年間担任していた子ども達を卒業させた時は、どのような気持ちでしたか？

志賀　変にほっとした感じがありました。卒業して、「みんなおめでとう！」という気持ちはもちろんあるのですが、大変な中で2年間を過ごして、少ない人数ながらもきちんとこの学校を卒業できたということに対するほっとした感じが、すごくありました。震災前も卒業生を何回か出してきましたけれど、その時の感覚とは違っていて。本当によかったというか、子ども達が頑張って乗り切ってくれたというか。

── 仮設の設置当初からは、日々刻々と状況が変わっていったのではないかと思います。事務棟の中の配置が変わったり、行事が増えたり減ったり、色々あったと思いますが、11年度と12年度ではどのような変化がありましたか？　子ども達や先生方の変化を感じられるようなことも、ありましたか？

志賀　1年目は皆が手探り状態だったので、富岡一中と二中で、色々なことを別々にやっていたのです。授業や行事を、たまに一緒にやることはあった程度で。ところが途中から、「一緒にやらなくちゃならない。初めてのことがある、どうする、どうする」と、手探りで一緒に進める場面が出てきました。それが2年目になると、何となく慣れてきた部分もあって、一中、二中というカラーがだんだん出てきて。「そこは一中って、そういう考え方でやるんだ」といった違いが、見られるようになってきました。

── 震災前は、一中も二中も人数の多い学校だったと思いますので、先生同士で連携や協力をして何かをするとか、まして学校同士での関わりというのはなかったですよね。

志賀　そういうものは、なかったと思います。それが一緒になって、最初は「新しい学校を作るから一緒にやりましょう、これはどうですか」なんてやっていたけれど、子どもが少ないとはいえ、結局一中、二中と、別々でやってた感じはあります。最初の1年、2年ぐらいは。

── 他の先生と連携して色々なことしたり、ゼロから学校を作り上げたという経験は、今の先生にとって、どのようなものになってますか？

志賀　ありがたい大きな経験でした。あれがなかったら今の自分は

ないと思います。教育観が大きく変わった出来事でもあります。今、私が勤務している大熊町立小中学校は、来年に新しく義務教育学校に変わりますが、あの時の新しい学校を作るという経験が、今に生かされているということに気付く部分もあります。それから、震災以降の経験を通して、子ども一人ひとりに対する見方も変わりました。子どもがいて自分が成り立っているということに気づいて、だから子ども一人ひとりを大切に見ていかなくてはいけないということを一層強く感じるようになりましたよね。

── 現在、先生は大熊の学校に勤務中ですが、子ども達の関係者の中には、東電や原発周辺の関係者のご家族が多いのではないかと思います。そういった環境の中でも、震災や原発事故の記憶は、子ども達に伝えたいと思いますか？

志賀　伝えたいと思います。そこは避けては通れないというか。特に大熊町は、会津若松市に避難し、一番早く小学校と中学校を開校しました。その時の関係者がどういう思いで学校を始めて、大熊町をどうしたいと考えていたのかということも含めて、子ども達には話し、知ってもらうようにしていかなくてはいけないと感じています。

あの年、学校が開校したのは４月16日でした。だから、今年度の４月16日に集会を開いて、「こんな思いでここに学校ができたんだよ」ということを、子ども達に伝えました。

── 振り返ってみると、震災や原発事故の経験は、先生の教員生活や考え方にどのような影響を与えたのでしょうか？

志賀　いつどうなるか分からない。本当に今やりたいことや自分が正しいと思ったことはやるべきだし、やらなくてはいけないなと思うようになりました。それから、自分一人では何もできないということが改めて分かって、様々な人の支援やつながり、応援、そういうものがあって初めて、自分も学校でやっていけるんだということを感じました。

2021年12月16日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也、筑波匡介）

川内村

Kawauchi-mura

川内村は浜通り地方の内陸部に位置し、いわき市、田村市、楢葉町、富岡町、大熊町に隣接している。2011 年 3 月時には 3038 人が暮らし、村内に川内小学校と川内中学校が立地していた。震災と原発事故以降は、2011 年 4 月に避難先の郡山市において小中学校が再開。2012 年 4 月には、村内での教育活動を再開した。2021 年 4 月、川内小学校と川内中学校が統合し、新たに川内小中学園が開校した。2022 年 2 月時の住民登録者数は 2431 人、町内居住者数は 2009人。

起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビュー

川内村
渡邊智幸 先生
わたなべ・ともゆき

富岡町出身、小学校教諭。2011年3月の震災発生時は川内村立川内小学校に勤務。2021年度インタビュー時は、広野町教育委員会勤務。趣味はジョギング、カフェ巡り、スポーツ観戦。

震災時、教員6年目だった渡邊智幸先生。川内村の川内小学校4年生の担任だった先生は、震災の翌月から避難先で再開した小学校の5年生の担任に。さらにその翌年、帰村した川内小学校で6年生の担任を受け持ちました。高学年という多感な時期、避難によって散り散りになった子ども達を相手に、渡邊先生がどのように考え、地域や保護者と共にどのようにその成長を応援してきたのか。その経緯と先生ご自身の学びについて、お話していただきました。

避難所となった小学校 職員室で考えたのは「今ここにいるメンバーで、何ができるか」

── 学校でのお話を伺う前に、まずは2011年3月に渡邊先生のご自宅があった場所と、ご自宅の被災状況を教えてください。

渡邊　当時、私は双葉郡富岡町に両親と3人で住んでいました。3月11日は夜8時頃に帰宅しましたが、家の水槽などは全て落下。後の被害認定は半壊です。停電していたので、その日は車中で過ごしました。そして翌日の明け方に流れた富岡町の防災無線を受けて、避難所となった川内小学校に両親と3人で避難しました。私は川内小学校の職員だったので、その後しばらく小学校にいたのですが、両親は3月14日に弟がいる宇都宮市に避難してもらいました。

── 3月11日は夜8時頃に帰宅されたということですが、川内小学校の午後2時46分の前後の状況を教えていただけますか。

渡邊　担任している4年生のクラスで、帰りの会をしていました。金曜日でしたので、いつものように子ども達に「残り12日」となった終業式までの過ごし方について話をしていた時、地震が発生しました。川内村はその当時からスクールバスでの一斉下校だったので、1年生から6年生まで全員が学校にいて、一斉に校庭へ避難したことを覚えています。

ちょうど雪がちらつくような中で、子ども達皆がまとまりながら暖を取っていたような気がします。その後、揺れがおさまってから、バスで迎えに来てもらったり、直接迎えに来た保護者に子どもを引き渡したりして、子ども達全員を帰したのが、夕方の5時頃だったと思います。その後、職員にも各々の家族がいるので、帰れる人から帰っていくような流れでした。

── 避難所で先生方は、どのような役割を担いましたか？　実際、「避難所になった際には、誰が何をする」といった役割分担や準備は、これまでされてきたのでしょうか？

渡邊　そういった役割分担や準備は、これまで全くありませんでした。とりあえず職員室の中に、「富岡町の役場職員」と「川内村の役場職員」と「川内小学校の職員」が合同で詰めていたような状態です。施設のことについては教職員が一番分かっているので、例えば「体育館に避難してくる方々が暖を取れるように、ジェットヒーターを持ってくる」など、施設内の準備や設置を行っていました。

川内小学校の先生方も、全員が避難所に来られたわけではありません。私のような富岡町の住民はともかく、大熊や広野、楢葉から通勤していた人は、それぞれの家の近くの避難所に移っていましたので。

本来ならば「職務に専念」が前提なので、召集がかかったら勤務先に来なくてはいけないのですが、そういった距離的な事情や、ご家族や小さなお子さんがいるという先生は、なかなか来たくても来られないという状況でした。

振り返ってみると、自分が独身だったこともあって、私は比較的自由に動けていました。川内小学校に来られない先生から、「この子と電話が通じないから、学校から連絡してほしい」という連絡を受けて対応したりと、「今ここにいるメンバーで、何ができるか」を考えていましたね。

── その後、3月16日には村一斉避難となり、皆さんは川内小を出て避難しなければならない状況になりました。まとまってどこかへ避難したのでしょうか？

渡邊　「全村避難する」と遠藤雄幸村長が発表したのが3月16日でした。16日の段階で川内村に残っていた方の中には、ビッグパレットふくしまに一斉に行った人もいれば、「お父さんは川内だけど、お母さんが違う市町村出身だから」と既に他の場所に移動した子もいたので、「川内村全体でまとまって」ということではありません。ただ、16日の段階では、ほとんどの方が郡山の方に移動したと思います。私もしばらくは、若い先生方とビッグパレットふくしまで寝泊まりしていました。

幸い春休み中だったので、「学校はどうするんだ」という話にはその段階ではなりませんでしたが、やはり4月に近づくにつれて「学校再開はどうするんだ」という問い合わせは多くなりました。

── 避難先のビッグパレットふくしまでは、具体的にどのような仕事をしていましたか？

渡邊　本来ならば、春は来年度の引き継ぎや、小学校の書類を中学校に引き継ぐような作業をする時期なのですが、そもそも学校の中に立ち入ることができませんでした。そのため、事務的な作業は全く着手できませんでした。ただ、ビッグパレットふくしまには富岡町や川内村から避難したお子さん達がいたので、その子達のケアをするために1階に子ども達が集まれるスペースを作って勉強を見たり、いろんな企画をしたり。そういった協力はしていましたね。当時担任していた子達も、3分の1程がビッグパレットふくしまに来ていました。

村を離れての学校再開が子ども達に与えた、良い面・悪い面

── では、そこから学校再開に向けては、どのような動きがありましたか？

渡邊　3月下旬頃には、校長や教頭、管理職が、教育委員会や村の幹部の方々と話をして、「学校としては、こうしていきたい」という主張をされたと思います。できる限り子

ども達の学ぶ場は保障したいので、「川内ではないけれど、郡山やその近辺で学校再開ができないか」という訴えがあったようです。村や他の教育委員会との交渉などはすべて校長が行っていました。その後、様々な交渉を経て、4月12日、郡山市河内（こうず）小学校内で「川内小学校郡山校」を51名で再開しました。

その頃、私と子ども達は保護者の携帯電話を通じて話はしていましたが、なかなか子ども同士のネットワーク、連絡手段というものはなかったんです。だから、子ども達は友達と久しぶりに会えたことですごく嬉しそうでした。私自身も、また子ども達が集えたということが大きな喜びでした。

――その後、河内小学校での学校生活はおよそ1年間、2012年3月まで続きました。渡邊先生は、河内小学校でもクラス担任でしたか？

渡邊　川内小学校5年生の担任でしたが、河内小学校の5年生も交流学習で一緒に学ぶ体制を整えてもらいました。河内小学校での学校生活は、子ども達にとって良かった面もありました。今までずっと単学級、同じメンバーで育っている子ども達でしたが、河内小学校に行ったことによって、河内小学校の5年生と出会うことができました。固定化された人間関係ではなく、新たな友達出会うことにより、多様性を受け入れる素地が育まれたのではないかと考えます。

――逆に、悪かった面もありますか？

渡邊　子ども達が落ち着かない、という面です。環境の変化により夜眠れないという子どももいました。これまではおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に生活して、ある程度、生活の規律が保たれていたところもあったと思うんです。それが急に、地震がきっかけで核家族化もあった。中には、「若い世帯は違うアパートに」といった状況になった時、生活リズムが大きく変わってしまって。授業中、なかなか起きていられなくなった子ども達がいました。

あとは、限りあるスクールバスの台数で、郡山市内を巡回するため、早い子は朝6時50分頃からバス停に集まる必要がありました。そうすると今までより30分以上早く集合しなくてはいけない。他にも、お仕事をなくされた家庭もあったので、ずっと家に親がいるという環境ができてしまった。それによって、今まで指摘されなかった細かいところまで親に指摘されることになって、子ども達にチック症状が出てしまったりする事例もありました。

子どもにとっては、少し放っておいてほしいことまで大人が細かく見過ぎてしまうような状況になったこともありました。

その部分は、学年の保護者会で状況をお話して、「ちょっと目をつぶって子どもに任せてあげてもいいです。ただ、親は最低限、子どもの健康や生命に関わる部分については、よく目をかけてください」とは伝えました。

――そういった子ども達の変化に気づいて、指導法を変えたり、接し方を変えたりしましたか？

渡邊　ずっと気を付けてはいましたが、カウンセリングの意味も込めて、まずは子どもの話を聴くようにしました。授業でも、子ども達同士の交流・意見発表をしながら進めるような形式をとっていましたが、自分を表出する機会や、友達と触れ合う機会を意図的に設けるようにしました。避難生活をしていると、家族としか交流がなかったり、狭いコミュニティの中に閉じ込められてしまいがちです。すると、子ども達の中にも「同年代の人と話したい」という欲求が増えてくるので、それを授業の中で解消してあげたいと思っていました。

ただ、私としてみれば目の前の子ども達も大事ですが、当時担任していて他の学校に行った子達も担任しているという気持ちは変わらなかったので、「この子が中学校に行って不登校になってるよ」とか、「あの子が中学校行ってトラブルがあるみたいだよ」なんて話を聞くと、そちらもやはり心配になっていたのは確かです。

――他の学校に行った子達とは、どのように連絡をして、つながりを維持していましたか？

渡邊　学校側からは、お便りや電話連絡。それから、保護者が企画する定期的な交流会、村で企画する夏のイベントですね。この3つくらいは、交流する機会がありました。保護者からも、私がこうしましょうかと言う前に、「せっかくだからあの子達が一緒に集まる機会とか、卒業証書を皆でもらうような機会を作れないですかね」という提案があって、実現しましたしね。

――震災前には、子ども達と電話や手紙でやり取りする機会はあまりなかったと思います。どのような気持ちで、遠く離れた子ども達とやりとりをしていましたか？

渡邊　震災直後の手紙は、なんとなく本当に、やらなければいけないという義務感よりは、「本当にその子の様子が知りたいから」とか、「仕事というよりは、あなたのことが心配で」とか、子ども達のことを知りたいという思いが強かった気がします。その後も、避難先で卒業する子ども達全員に祝電を送り、少しでも喜んでもらえればと思っていました。

川内小で目指したのは、「川内に戻ってきてよかったと思える子ども、川内の学校に通わせてよかったと思える保護者、川内の学校に勤めてよかったと思える教師」

――その後、川内村に戻られて、2012年4月6日に入学式が行われたのですね。

渡邊　時期としては、2011年の4月に河内小学校に移転して1年。やっとそこで少し落ち着いてきたなという頃合いだったのですが、2012年3月に行政判断で、川内村に帰村することが決まりました。その時に保護者会も行われたのですが、「せっかく今落ち着いてんのに、この時期に戻さなくていいんじゃねえか」という声もありました。「せっかく郡山で、河内小学校っていう環境で勉強できるのに」って。それだけ子どもにとっても保護者によっても河内小学校の環境はありがたかったのだと思います。

でも川内小学校郡山校は3月末日で終わりだから、川内に戻る子はそのまま川内に家族ごと戻る。一方、郡山で過ごす人は自分の住んでいる近くの学校に転校する。中には河内小学校に区域外で通う子もいました。そういった色んなパターンがあったのですが、私の担任していた子は3分の1ぐらい、7人が戻りました。

ただ、7人のうち全員が郡山の河内小学校から来たかというと、そうではありません。河内小学校に通っていた子は4人です。2人はいわき市の学校、1人は県外の学校に通っていて、「川内に戻るんだったら」と言って戻ってきた子でした。

他の学年も同じようなことがあったので、結果的に60人近くいた郡山校の子ども達は16名が川内村に戻ってきて再開となりました。

私もその時に戻って、川内村の教員住宅に住み、今度は6年生の担任を受け持ちました。

――先ほどのお話にあった、学年便りの作成や、手紙や電話でのやり取りは、川内村に戻ってからも続けたのですか？

渡邊　はい。川内村に戻ってからも、卒業するまでは定期的に行っていました。学年便りのパターンも何パターンかありましたね。例えば2012年度でいえば、川内村に通う子ども達向けの学年便りの他に、川内村には通わないけれども他の学校に通っている子ども達向けの学年便り。その時は川内村に通う子達も5、6年生で一緒にやることもあったので、「5、6年生用」と「6年生だけ用」というケースもありました。

――避難先にいる子達に送る学年便りは、何を伝えようと思って作ったのですか？

渡邊　まずは、村がどんな状況かというのもありますが、多くはメッセージですね。「今できることをその学校でやるということが、大事なんだ」という話を書いたり。「次に集まるのがこの時期だから、この時までには皆で話せるように、情報を集めておいてね」という感じでした。

「川内に戻ってきたことがいいんだよ」ではなくて、「こういうことをやっているよ。でも皆は皆で、今通っている学校で今やっていることに価値があるわけだから、そこはあなたも頑張ってね」というメッセージを込めました。

――では、川内に戻ってきた子達、渡邊先生のそばにいる子ども達に対してはどういうメッセージを？

渡邊　目の前にいる分、そこはもっと具体的なメッセージを伝えました。日常的な保護者との関わりや、学校ではこういったことを企画していますといった特色ある教育活動や、日々の連絡事項などですね。

川内村に戻った時、高島仁校長に

言われたのは、「川内に戻ってきた子達にも、絶対に後悔させちゃだめだよね」ということです。今でも覚えているのが、「川内に戻ってきてよかったと思える子ども、川内の学校に通わせてよかったと思える保護者、川内の学校に勤めてよかったと思える教師。この三つを頭に入れてやっていきましょう」と言われたんですよ。

学年便りでは、「今日はこの子特集」というのもやりましたね。この子は今こういうことに興味を持っていて、今こういうことをやっている。それはこんな価値があることなんですよと、教育的な視点で書いたり。そうすると親としても、きちんと一人ひとりを見てもらえていると感じることができる。別の学校ではうまくいかなかったという子どもも、「川内村に戻ってきて、将来につながるようなことができている」って思ってもらえたらなという気持ちでした。

── 震災前後を川内小学校で過ごされた先生としては、「震災があったことによって、地域の人達の学校を見る目が変わった」と思いますか？

渡邊　もともと川内村は、保護者や地域住民が学校に対して協力してくれる風土がありました。ただ、主体性は大きく変わった気がします。「保護者もこれだけしかいないわけだから、協力しなくちゃいけねえべ」と。今までは百何人もいたので、どうしても埋もれてしまう保護者もいましたが、川内に戻った子どもが 16 人いた中、その保護者全員から「何とかしようぜ」という気概を感じましたよね。

子ども達一人ひとりの背景を考えた経験が、現在にも生きている

── ここからは、先生ご自身のことを伺います。震災があったことで、ご自身の教員生活や考え方にどのような影響があったと思われますか。

渡邊　原子力災害により通常の教育計画が通用しないような状況になったので、そういう時でも「目の前の子ども達の実態を据え、教職員が目標を共有し、計画を再考する。それが教員の仕事だ」と考えるようになりました。「そもそも計画ありき」の仕事から「子どもありき」に変わったと言いますか。「子ども達がこうだから、こうなってほしいから、この活動をやっている」ということを常に意識するようになったと思います。

── その気づきは、今現在、学校現場からは離れて教育委員会勤務となっても、仕事面で影響を受けていますか？

渡邊　受けていますね。あまり大きな声で言えないですけれど、「今やってるこの活動って、何のためにやってんですか」って、先生方にいじわるで言っちゃう時があるんですけれど（笑）。たとえば、生活科の学習で震災前は結構、砂遊びをしていたのですが、今はほとんどしていないんです。「じゃあなんでこの生活科カリキュラムに砂場遊びはないんですかね」と聞いたら、原発事故による放射線の影響だろうと。でも実際、ここの状況はどうか。測っても数値が出ていない。だったら、どうした方がいいんですかね？ なんて話はありました。こんな風に、今でも学校でやる一つひとつに対して、「何のためにやってんのかな」という意識は、間違いなく持つようになりました。

── そういった意味でも、震災という経験は、良い意味でも悪い意味でも大きな影響を持っていたと思います。当時の教員生活・教員業務で、今まではありえなかったようなことや、何か印象的に覚えている経験はありますか？

渡邊　ありえなかったことといえば、避難所運営ですよね。その避難所運営ですが、一緒に避難所を運営していた役場の人達は同じ公務員ですけれど、「本当に生きるか死ぬかって時の住民のために、この人達は仕事しているんだな」ということを、強く実感しました。ビッグパレットにいる時も行政の方と関わる機会あって、同年代の職員を見て、やっぱりそういう気概を持ってやっているんだなと感じました。そこで「じゃあ自分は教育現場で、どんな気概を持ってやれるかな」というのは、考えさせられた気がします。

その経験や気付きがあって、子ども達一人ひとりの背景や生い立ちはすごく考えるようになりました。「〇〇さんは今どんなことに困っているのだろう」「〇〇くんは、今どんな思いや願いをもっているのだろう」ということを考えて、教育活動を創るんです。震災で子ども達がいろんな状況に追い込まれて、この子がどんなことを思っているのかなと考えた経験が今、一人ひとりの子どもを見るということにもつながっている気がします。

── そういう視点は、震災に関係なく、これからの学校現場でも必要になりそうですね。

渡邊　必要ですね。我々の下の世代で生産人口が少なくなっているから、多くの特性を持っている子もどんどん活躍できるような社会であってほしいと願っています。いろんな特徴があったり、心の不安を持っている子に教師が寄り添いながら、誰もが活躍できるような学校にならなくちゃいけないと思っています。

── では、ご自身の震災で得た経験から、次世代の教員に対して何を伝えたいですか？

渡邊　「学校は子ども達がいないと成り立たない」ということ、「そもそも今やっている教育が、こども達一人ひとりのためにある」ということ、これらは私自身も見失わないようにしたいなと思います。国や県から多くの方針が出される昨今の状況において、そもそもそれをどうして行う必要があるのか、行うことで子どもにどんなメリットがあるのか、という視点は、忘れないようにした方がいいと思います。

そして、川内村の学校は今、継続・再開していますが、継続する上でも学校だけではどうしようもなかった問題もありました。やはり村や地域の住民、保護者とうまく連携しそれぞれの立場の「声」に耳を傾けながら「学校」を運営していくということが、すごく大事になってくるのかなと思いますね。

── 最後の質問になりますが、学校や自治体という組織の記録ではなく、今回のように先生個人の証言が記録として残るということに、どのような意味があるとお考えですか？

渡邊　すごく価値があると思います。震災に限らず、「先生がこうやって一人前の先生になりました」のような教育書は少ないんです。先生がこういう経験をして、こういう先生になりましたというのも少ない。「今こうやって、すごい実践をしています」という教育書は多いのですが、そもそも自分が知りたいのは、「こういう先生になるために、この先生はどういう経験をされて、どういう試行錯誤をして生きているのか」という部分であって。そういう本は、なかなかないんです。でも、先生達もいいところは明かしますが、語りたくないところは出さないですよね。失敗したことや、うまくいかなかったことも、こういう場所に残してもらえたらいいなと思います。

今、双葉郡に勤務されている先生方には、そういった背景がなかなか伝わらずに過ごされている方もいると思うので、多くの先輩達がどんなことで悩み、何を考えどんな教育活動を創造したのかを知るのは、すごく意味があることだと思います。多くを語らずに退職された先生方もいらっしゃるので、記録を残していただけることは、私を含めた中堅・若手の先生方にとっても、ありがたいと思います。

2021年 7月21日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也、筑波匡介）

大熊町

Okuma-machi

大熊町は浜通り地方に位置し、田村市、富岡町、川内村、双葉町、浪江町に隣接している。福島第一原子力発電所は、大熊町と双葉町にまたいで立地している。2011 年 3 月時には 11505 人が暮らし、町内に大野小学校、熊町小学校、大熊中学校が立地していた。震災と原発事故以降は、2011 年 4 月から避難先の会津若松市にて小中学校が再開。2022 年 4 月からは小中学校が閉校し、新たに小中一貫の学び舎ゆめの森が避難先の会津若松市で開校。2023 年 4 月には、町内での教育活動再開を予定している。2022 年 2 月時の住民登録者数は 10153 人、町内居住者数は 364 人。

起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビュー

大熊町

落合志保 先生

おちあい・しほ

広野町出身、中学校教諭。教科は国語。2011年3月の震災発生時は大熊町立大熊中学校に勤務。2021年度インタビュー時は、福島県立ふたば未来学園中学校勤務。趣味は旅行と読売巨人軍の応援。

震災当時、大熊町立大熊中学校で特別支援学級の担任をしていた落合志保先生。原発事故の影響で、地震発生の翌日には、自宅があった広野町からの避難を余儀なくされました。教員を続けるべきか悩みながらも、避難先の家族と離れ、単身で仮校舎が設置された会津若松市へ。会津若松での学校生活は、特別支援学級の子ども達の進路に対する考え方に、大きな変化をもたらしたと語ります。震災から 10 年が経ち、当時の経験は先生にどのような影響を与えたのか。また先生にとっての「復興」とは何かについて、お話を伺いました。

震災翌日の全町避難 悩みながらも会津若松の仮校舎へ

── 2011 年 3 月 11 日、震災当日のことを教えていただけますか？

落合　当時は大熊中学校の 2 学年の所属で、特別支援学級の担任をしていました。2 年生の女子 2 人と 3 年生の男子 1 人の 3 人のクラスだったと思います。地震は、男子生徒を送り出してほっとしたタイミングで、職員室でリラックスしていた際に起きました。

まず、職員室にいる先生方の携帯から緊急地震速報が一斉に鳴ったのです。当時は地震がくることを通知する音だと知らなかったので、「何だ何だ」とざわざわとしている間に、大きな揺れがきました。その揺れを「長い」と感じましたし、何回か続いたことを覚えています。通常であれば揺れが収まるまで建物の中で待つと思いますが、あまりにも揺れが激しいので「外に出ないとまずいだろう」と。そこで、みんなで外へと、ひとまず学校の駐車場まで出ました。

── 揺れがある程度収まった後、先生方はどのように動いた

のでしょうか？

落合　壊れているところがないかなど、校舎の点検をしました。給食室はわりと新しかったのですが、水道が破裂していて使える状況ではありませんでした。耐震工事も行っていたのですが、（校舎の）壁にひびが入っていましたし、新しく作った印刷室も扉が開かない状態でした。あの日は金曜日で、給食の先生が「月曜日は給食を出せないね」「お弁当ね、先生達」と話していたことを思い出します。

　また、揺れも激しかったですし、消防署か消防団の車が鐘を鳴らしながら走っていたので、津波がくるのかもしれないと感じていました。もしかすると原発も危ないのではないかと思いましたが、まだそのときはあまり現実的ではありませんでした。ただ、津波がくるとなると、自宅が海に近い先生は帰った方がよいのではないかという流れになり、帰宅される方と学校に残る方に分かれました。私も比較的、自宅が海に近い方だったので、帰ることになった気がします。

── 広野町の自宅までは、スムーズに帰ることができましたか？

落合　いえ、スムーズに帰ることはできませんでした。まず、校舎を出たところで水道管が破裂していましたし、道路は亀裂が走ったり盛り上がっていたりしていて、いつものルートでは帰れないなと。そこで抜け道を探そう探そうと思いながら車を走らせていたら、気がつくとイチエフ（福島第一原子力発電所の通称）の前にいました。ものすごくサイレンが鳴っていて、イチエフで働いている方々が次々に外へ出てきているところでした。

　その時、ラジオを流しながら走っていたのですが、アナウンサーの方が「車を運転している人はすぐにやめてください」「津波がきているので絶対に命を守ってください」というようなことを叫んでいました。普段、穏やかに話をしている方が、尋常ではない声で、絶叫するような感じです。

　「何、何」って、もう全然わからなくて、富岡辺りの川の水位が高くなっていることに気付いたのですが、「何でこんなに水位が高いのだろう」「雨がすごかったのかな」なんて、とんちんかんなことを思いながら、車を走らせていました。それでも家には帰れず、第二原発の前は橋が落ちていましたし、通れないから道を変えて、さらに変えてというような状況だったと思います。車に乗っている間も、車体がバウンドするほど余震で揺れました。そして、ふと気がつくと外はもう暗かったです。

　その後、どこをどう通って帰ってきたのかよくわからないのですが、いろいろな道を通りつつ国道６号に戻ってきたのでしょうね。私は、国道６号をくだってお地蔵さんがある辺りから旧道に入って帰るのですが、そこで地元の消防団の方に止められました。「津波がきているからこの道は通れない」と言われ、結局、家までは帰れず、避難所となっていた福祉センターへと向かいました。

── そこで、ご家族には会えましたか？

落合　はい。それが何時だったのか分かりませんが、避難所に向かう前、娘が通っていたを保育所へ着いた頃には、すでに辺りは真っ暗でした。保育所の中も真っ暗で誰もいなくて、電話も通じないし、どうしようと思った時に、誤作動だったようなのですが、私の父親から空メールが届きました。それで「大丈夫だ、生きている」と思い、「自分は福祉センターにいます」と送ったように思います。そこで、父と父が連れてきてくれた娘に会えました。

　父に自宅の様子を聞くと、電気も止まっていないし、津波もきていないという話で、父は戻りたがっていましたが、引き留めて、一晩、避難所に泊まりました。

── 翌日の３月12日には避難指示が出たということですが？

落合　そうです。町から西か南へ避難せよという指示が出たため、父と私と娘で、いわき市の親戚の家へ向かいました。何日ほどいたのか、正確な日数は忘れてしまったのですが、東北新幹線が走るようになるまでの数日間を過ごしたのだと思います。新幹線が走るようになったときに、埼玉に住んでいた夫が迎えにきたので合流し、埼玉へと避難しました。

── その間、大熊中学校とのやりとりはありましたか？ また、大熊町の教育委員会からの招集は、いつ頃でしたか？

落合　卒業生から安否を問うメールなどは届きましたが、学校とのやりとりはありませんでした。大熊町の様子はニュースで知るというか、大熊町民の方が田村市の体育館にいるということもニュースで武内教育長が話しているのを見て知りました。その後、３月の末か４月の頭だったと思いますが、教育委員会から招集がかかり、同じように関東へ避難していた先生方と３人で、田村市に向かいました。

── 大熊町に関わる教職員が集められ、教育委員会から４月以降の動きについてお話があったということですよね？

落合　そうです。会津若松市で学校を再開するという内容でした。その時、夫には「もう福島県の教員は辞めなさい」「福島には戻るな」と言われていました。自分としても、会津若松に行くのは厳しいと感じてはいて、「行かなくてはいけないのですか？」と尋ねた覚えがあります。

　どうしようかと思いましたが、招集された先生達とお会いして、自分よりももっと大変な被災状況の先生方が、学校を何とか立ち上げようとしている姿に勇気をいただきました。子ども達の安否も先生方が様々な手段を使って確認されていました。すごく頑張ろうとしている先生方の姿を見ていたら、自分も会津若松へ行きたいと感じました。

　ただ、「住む場所は避難所かもしれないよ。体育館などに寝泊まりしての仕事になるかもしれない」とも言われていたので、小さな娘を連れてくることはできない。夫にも「辞めるように」と言われていたし、でも教員を辞めたくはないし、「どうすればいいのだろう」と、もやもやした気持ちのまま会津若松へ行きました。ここで福島の教師を辞めたら一生後悔するとは思っていました。

「感謝の気持ち」を大事に特別支援学級の生徒にも変化

── ４月の中旬には、会津若松へ向かったそうですね。

落合　はい。娘の幼稚園の入園式が終わるのを待って、単身で会津若松へ行き、当初は駅前のホテルで寝泊まりをしていました。ホテルでの生活はアパートを借りられるようになるまででしたから、１学期の終わり、７月くらいまでだったと思います。

── 旧会津学鳳の仮校舎に初めて行った時の印象は、いかがでしたか？

落合　一階が役場だったので、賑わっているなという印象でした。知っている人に会えるという安心感がありました。当時は子ども達の昇降口の辺りにバスの運転手さん達がいらして、とてもアットホームな雰囲気でしたね。また、「やはり学校はいいな」「子ども達と会えるって幸せだな」と感じました。先生方とも協力体制が構築されていて、何とか学校を立ち上げなくてはならないという思いが、教員同士の結びつきを強くしていたように思います。子ども達のために、という感じでした。

── 子ども達の様子はどうでしたか？ 仮校舎のスタート時から、特別支援学級も設置されたのでしょうか？

落合　校長先生から、「特別支援学級の子ども達も、来るから」と言われていました。前の年に私は知的障害のクラスの担任だったのですが、もう一つ、情緒障害のクラスもあり、それらを１クラスにまとめるという話でした。だから、「会津若松に来てくれないと困る」と言っていただいて、それはそれでありがたいと感じたところもあります。

　私が合流したタイミングでは、１年生の女の子が２人、２年生の男の子が１人と３年生の女の子２人の計５人でした。人目を凄く気にする生徒がいて避難場所から会津若松の学校までバスに乗って来られるだろうかと思いましたが、ちゃんと通ってくることができていました。皆、何か覚悟を決めて頑張らなくてはならないと思っているのか、今までとはちょっと違う雰囲気でしたね。ただ、避難生活によって、だいぶ疲れている子も見受けられました。

── ２学期以降、学校の様子や先生ご自身の生活に変化はありましたか？

落合　アパートを借りられるようになったので、娘を埼玉から会津若松へ呼び寄せて、２人暮らしを始めました。学校では通常給食になり、生徒が制服を着用するなど、だんだんと学校らしくなっていきましたね。著名な方など色々なゲストが学校にいらして、コンサートをしてくださっ

たり。そういうことがすごく多かったです。

また、先の見えない、これからどうなるのか分からないという状況の中、大熊の子ども達と福島の先生達と、会津で生活をしているというのは、自分にとっても心の拠り所となっていたかもしれません。

――大熊町の先生方にも、兼務事例はあったのでしょうか？

落合　ありませんでしたね。大熊町は最初から仮校舎を立ち上げていました。兼務で本当に大変な思いをされたという他の自治体の先生方のお話を聞くと、ありがたかったと感じています。これまで一緒に勤めてきた先生方と一緒に働けるというのは、本当に幸せでした。

――2011年度というのは１学期がまさに激動で、また年度を通して落ち着かない雰囲気だったのではないかと思いますが、いかがでしたか？

落合　たしかに、2011年度はとても落ち着かない年でしたね。生徒はたくさん戻ってきたのですが、家族で戻ってきても保護者の方の働くところがなく、再び出ていくなど、出入りは激しかったです。おぼろげな記憶ではありますが、2012年度になると落ち着いてきたのかな？ そうですね、出入りによる変動は減ってきていたように思います。

――大熊町の学校は、早い段階で運動会や文化祭等の学校行事を再開したイメージがあります。

落合　旧会津学鳳の校庭は使えないなどの制約はあったのですが、鶴ヶ城体育館で体育をやったり、文化センターをお借りして文化祭をやったり、色々と他の施設を使わせていただくことができて、ありがたかったです。他の学校に比べれば、学校行事にも取り組めていたかもしれません。

また、大熊の子ども達に感心したのは、心の温かい子たちが多かったということです。先生達が「感謝の気持ちが大事だよね」と言い続けていたからかもしれませんが、助けていただいたから恩返しをしなくてはいけないというような、そういう気持ちをものすごく感じました。

――特別支援学級の子ども達はどうでしたか？ 今まで住んでいた町とは異なる場所での学校生活で、環境に影響されること等はありましたか？

落合　そうですね。やはり将来のことを真剣に考えなくてはならない状況になったというのが、だいぶ違ったのではないかと思っています。進路の選択肢が、双葉郡にいたときよりも増えましたから。例えば、支援学校に進みます、高校に行きます、専門学校に通いますといった学校の選択肢だけではなく、会津にとどまるのか、郡山、いわきに引っ越すのかという地区の選択肢も増えました。子ども達は「今のままじゃ駄目なんだ」と進路に対する考え方が変わったのではないでしょうか。

保護者の方とも、進路を意識した対応というか、そういった関わりを持つようになったことが大きく変わりました。生徒と保護者の方に自ら、支援学校や専門学校等の見学へ行ってもらうことは、これまでの環境ではしていませんでしたから。

震災があったかどうかに関わらずですが、特別支援教育は難しいなと思います。保護者の方の思いと、本当にその子に適した学びが一致しないこともありますよね。できないからといって、生徒の代わりに何でもやってしまうのは違う。やはり、自分でできるようにお手伝いをして、自立させてあげないといけない。特別支援学級の子ども達にとって、自立に向けて学ぶべき場所で学ぶということが、とても大事なのではないかと考えています。

震災10年を語る難しさ、「復興」の辛さ、町に子どもの声のある嬉しさ

――先生は、大熊中学校にはいつ頃から勤務されていたのですか？

落合　2004年からなので、産休や育休の期間を入れても、10年です。長いですね。武内教育長に配慮いただいたことを感謝しています。

今考えると、武内教育長だからこそ色々できたところがありました。図書教育に熱心な方で、仮校舎の本をはじめ、大熊の教育に予算を割いていただき、本当にありがたかったです。武内教育長は「やはり図書は必要だから」とドンっと予算を割り当ててくれました。だからこそ、本が好きで、知識も豊かな子ども達が育っているのだろうなと思います。そのこだわりはやはり大事なのだろうなと。

――仮設校舎に司書をきちんと置いた図書室があるというのは、独特でしたね。それができたというのは、やはり武内教育長を含め、大熊の教員の思いが強かったのだろうと思います。

落合　そうですよね。司書さんがいるなんてあり得ないのでしょうね。普通の学校だって難しいこともあるのに。司書さんがいるからいつでも本が借りられる。新しくて魅力的な本がたくさんある。だから子ども達が図書館に来る。本が好きになる。たまに「昔購入した本があるのだから新しい本を買わなくても良いのでは？」という方もいるのですが、子ども達はやはり新しい本を手に取りたいのですよね。

本を好きな子の中には、なかなかうまくコミュニケーションが取れないという子もいますが、そういう子ども達の居場所もがちゃんと作られているというのは、いいですよね。武内教育長は、やはりすごかったなと思います。

――震災直後の経験は、先生の教員人生に影響を与えましたか？

落合　影響は、大きくありますよね。やはり、自分は福島で教員がしたいのだなと。そこは変わらないのだと感じました。夫は埼玉にいるので、今後の生活をどうしていくかとか、家族の形としてはちょっといまいちかもしれないとか、考えなければならないことは沢山あるのですが、それらを飛び越えて、ここで教員をやりたいんだという気持ちがはっきりとしました。

それから、生徒や保護者との関わり方なども、変わったように思います。もっと生徒の将来を見据えてやっていかなくてならないとか、言いづらいことであっても生徒のためであれば、保護者の方に伝えなくてならないと、思うようになりました。

また、当時一緒に働いていた先生の中に、私と同じ高校の出身の方が何名かいらして、その方達との結びつきが今でもとても大きいです。その先生達に会うとすごくほっとします。

――やはり教員として、教師として、様々な影響を受けたのですね。

落合　教師として……、何でしょう。うまく話すことができないのですが、どうしても双葉郡をひとまとめにして震災10年を語られがちですが、同じ双葉郡の町民同士でも震災後の経験というのは、全く違います。それによって人々の考え方も全く異なる。とても難しい問題だと感じています。

私は大熊町と一緒に会津へ行きましたので、子ども達のことを思うと、故郷に帰れるということは、涙が流れるくらい嬉しいことだなと、そう思いながら帰ってきました。けれど、こちらで生活されていた方達の中に、避難生活等ですごく傷ついてきた方もいます。乱暴な言葉を使ってしまう子ども達や不満を多く抱えている保護者の

方もいます。自宅に戻ってきてもとても大変な思いをされている方もいるのだろうと思います。

だから、何でしょう。自分なりの考えは持っているのだけれど、口にしてはいけないような気持ちになるというか。保護者の方達にも色々な考え方がありますから、なかなか言えないというか。より苦労をした方達が「大変なんだ」とか、「(自分の町にはまだ)帰れないんだ」と話す度、確かにそうですよねと思います。私は恵まれていると思います。だから、何も言えなくなってしまう。それぞれがそれぞれの悩みを、周囲に言葉として発することが難しい環境になっているように思います。

── これから震災を経験していない先生方も増えてくると思いますが、その点はいかがですか?

落合　あまり考えていません。もう10年経ったのだから、震災のことばかり言っているのも違うのではないかなと。でも、私達は震災からフェードアウトすることは許されない。だから苦しいなと感じることもあります。震災を経験していない側としている側、お互いに苦しいですよね。

子ども達だって、当時とは全く違う子達が通ってきています。今の中学生には、当時のことを覚えていない生徒も多いです。もちろん、覚えているエピソードもあるとは思いますが、そんなに覚えてはいないのです。私の娘も、当時のことを作文に書いてけと言われても覚えていないんだと言います。でも、「いいと思うよ、忘れることも大事だよね」と感じます。

── 震災学習などによって、この地域で育ったのであれば愛着を持ってほしい、復興のため尽力してほしいというようなことを、体験も記憶もない子ども達に担わせることになるのは苦しいですよね。

落合　重いですよね。子ども達にこの地域の全ての希望を託しているようで、すごく苦しいなと思ってしまいます。

── 先生ご自身は、ご自分が「復興した」と感じますか?

落合　会津にいた時には、帰ることが「復興」なのではないかと思っていました。こうして広野町に帰ってきましたから、そこは幸せかなと。子どもも大きくなって、親も年を取ってきて、また別の大変さはありますが。

ただ、何か「復興」という言葉が、すごく辛いのですよね。この10年間。年を重ねる度に。こんなことを言っては駄目なのですけれどね。子ども達は順応が早いから、「復興」を受け入れているのかなと思いますが、私はよく分からなくなる時があります。「復興」とはどこまでなのか、どういうことなのか。

ただ、子どもの声すらも聞こえない町だった当時を考えると、ものすごい「復興」ですよ。避難解除後に帰ってきても、おじいちゃんとおばあちゃんしかいなくて、皆がマスクをしているから誰なのかも分からないし、生活をしている人はわずかだし。当時は全てが止まっているような、そう、時が止まっているような感じでした。

だから娘と一緒に広野町へ帰ってきた時、勤務した広野中には、わりと子ども達も増えてきていて、翌年の1年生は30人以上で2クラスでしたし、賑わいが戻ってきたと思えて嬉しかったですね。「子ども達がこんなにいるぞ」と。高校ができた時にも、高校生が町を歩いているというだけで、わくわくしていました。子どもの声があるだけで、町の雰囲気が全然違う。子どもの声が聞こえるという当たり前が、本当にすごいなと思っています。

2021年12月27日
(聞き手/久保田彩乃、千葉偉才也)

大熊町
小林正和 先生
こばやし・まさかつ

南相馬市原町区出身、中学校教頭。教科は数学。2011年3月の震災発生時は大熊町立大熊中学校に勤務。2021年度インタビュー時は、南相馬市立原町第一中学校勤務。趣味はドライブ。

震災当時、大熊町立大熊中学校の教務主任だった小林正和先生。原発事故により、大熊町全域に避難指示が出されたことで、大熊中は町内での学校再開を諦めざるを得ませんでした。大熊中が会津若松市の仮校舎で学校を再開するにあたっては、当時、「唯一の成功事例」と呼ばれた程、多くの生徒達が戻ってきました。予想を上回る人数に喜びながら、教務主任として施設の調整に苦心する一方、ゼロからの学校作りについては、「クリエイティブな仕事は、楽しかった」と振り返ります。時間がない中でも、生徒達と向き合う時間も作ることができたという当時の工夫についても、お話を伺いました。

2回目の原発の爆発で、避難が現実のものに

── まずは2011年3月11日に所属していた学校と、当日何をしていたかについて教えてください。

小林　3月11日は卒業式当日で、私が大熊中学校に着任して1年が経つ頃でした。卒業式は午前中に終わったのですが、式に参加できなかった卒業生が何人かいたため、午後にその子達のための卒業式第二部をしました。それが終わったのが午後2時頃で、その後に職員も混じって体育館で写真を撮って、「特に何もなければ、今日は定時で退勤しましょうね」と職員室で話していた時、地震が発生しました。ものすごい揺れでしたね。誰かが「テレビ(地震速報)をつけて」と言ったので、私がテレビまで走りました。もしそこで走っていなければ、自分の席の後ろにあった本棚に潰されて、おそらく私は亡くなっていたでしょう。私の席の机上にあったパソコンは、潰れて壊れていましたから。

実際、揺れによって机や棚に挟まれ、動けなくなっている職員もいました。それでしばらく「本当にいつまで続くんだ」という状態が続いて、少し揺れが収まった隙に、皆で外に

脱出。そこで車のエンジンをかけてラジオを聞いて、情報収集するという状況が続きました。

――ラジオで状況を確認した後、先生方はどのように行動しましたか？

小林　まずは、体育館が避難所となり町民が大勢来るだろうと予想し、学校にあるだけの灯油、毛布、乾電池等を、体育館に集めることにしました。それを集める班と、校内の被害状況をざっと確認する班に、先生方を分けました。それが夕方５時頃まで続きましたね。もうその頃には、津波が来るというニュースが届いていました。それこそ、一番被害があった浪江の請戸あたりの職員もいたので、その人達にはもっと先に自宅を確認しに帰ってもらっていました。

　私の家は原町で、「そんなに急ぎなこともないから」ということで帰らず、とりあえず作業の途中で自宅に電話をしました。息子は石神中学校の生徒で、「この時間は家にいるはずだよな」と思いながらも、なかなか電話が繋がらなくて心配でした。何回目かでやっと繋がって、自宅にいて特に怪我はしていないことが分かりました。「この後も地震が続くから、なるべく物が落ちてこない所にいて、母親が帰ってくるまでなんとか自分で頑張れ」と伝えました。電話が繋がったのは、その１回だけでした。

　その後、色々なことが落ち着いてきた頃、私も自宅を確認するため学校を出ることができました。

――その時間帯に自宅へ戻る途中、地域の様子も何かおかしいと感じましたか？

小林　そうですね。ただ、５時の段階では、津波のニュースはありましたが、「原発が危ない」というニュースは出ていなかったと思います。大熊中は門の近くに東電のアパートがあって、その人達が外にキャンプ道具をどんどん出しているのを見かけたのですが、そこで皆さんが割とのんきというか、冷静に過ごされていたので、「東電の人達がこれくらいの感じでいるんだから、大丈夫なんだろうな」と思っていました。

　ところが、山麓線（県道35号線）に行こうとしたら、大野駅の北側の跨線橋に10センチ程の段差ができていました。「渡っても大丈夫なのかな」と思いながらも、１台が行ったら次の１台が行って……という暗黙の了解ができあがっていて、私もしばらく待ってから、怖いと思いつつ通りました。すると今度は、双葉のバラ園付近の山麓線で道路に１メートルくらいの段差ができていました。「あ、だめだ」と思って進路を変え、双葉の町中から双葉の旧国道に入ろうとしたら、その手前で消防団に止められました。「津波が来るから、もうこれ以上こちらには行けない」と止められて。「まさか、双葉駅周辺まで津波が来るわけないよ」と思いつつ指示に従いました。それで今度はそこから一回も通ったことない、浪江の山道に入っていきました。これも偶然なのですけれど、その３日程前に自分の車に携帯型のナビを付けたばかりでしたので、なんとか抜けられました。

　その後、小高に入ったあたりで、動いている自動販売機を見つけました。そこで、家族分の水分を買える分だけ買いました。そして小高から原町に入る道でまた消防団に止められて、今度は小高の町中を経由して、結局、何もなければ大体30分で帰れるところを、２時間半かけて帰りました。帰宅は夜８時に近かったですね。

――その日は、そのまま自宅で過ごしたのですか？

小林　はい。自宅に着いてから教頭に連絡を取りましたが、すでに避難指示が出ていたこともあって「もう帰って来なくていい。家のことやってくれ」と言われて、家で過ごしました。翌日になったら、原発が爆発していました。その状況では学校にも戻れなくなりましたので、家で多少の避難の環境を整えてから、「少しボランティアでもしてくるか」と、ボランティアセンターに行って腕章をもらいました。石神一小や石神中を手伝うように指示されて、物を配ったりしていました。そこには、小高や浪江からの避難者が多かったようです。石神中は校舎まで避難所に使っているような状況で、「うわあ、大変だ」と思いましたね。

――原町に関しては、ある程度、地震の被害や沿岸部の津波がありながらも、自宅できちんと過ごせる状況にはあったのですね。

小林　はい。私の家は幸運なことに、電気もたしかその日のうちに復旧しました。水道は２日くらい止まったので、近くの実家まで何度か井戸水を汲みに行きました。２回目の爆発が起こる14日までは本当に、「これで生活できるから、避難しなくてもいいかな」と思っていましたね。

　そんな中、14日の昼間に石神一小へボランティアに行った時、原発が「もう爆発する」か「爆発した」かのニュースが流れて、音も確かに聞こえました。これはまずいなと思って、お昼頃、伊達市保原町に嫁いだ姉に、「何日かだけでも泊めてくれないか」と連絡しました。うちの妻は秋田が実家だったので、いずれは秋田まで車で行くから、段取りがつくまでお願いできないかと。ガソリンもありませんでしたしね。それで14日の午後、姉のところに避難しました。

――その間も、大熊中とは連絡を取り続けていましたか？

小林　教頭とは常に連絡を取っていましたが、後から教頭に聞いたところ、12日の未明には大熊中のグラウンドにバスが手配されて、どこに行くかも訳も分からない中、「とにかく全員乗れ。とにかく西に逃げるから」という状況だったそうです。その後、大熊中は立ち入り禁止になって、誰も戻ることができなくなってしまいました。

　私の方は、姉のところで２、３日過ごし、「どこどこのガソリンスタンドで、入れられそうだ」というTwitterなどの情報を頼りに、車に毛布を詰め込んでガソリンスタンドに並びました。待っている間はエンジンを切って毛布にくるまり、なんとかガソリンを満タンにすることができました。そうして秋田に行ったのが、18日か19日頃。秋田でもガソリンはやはり並ばないと入れないような状況でしたが、それも数日で解消して、あとはもう普通の生活が送れましたね。

仮設校舎での再開を果たした学校の中で、唯一の成功事例　学校の方針を明示したことが鍵

――いつ頃まで秋田にいましたか？

小林　教育委員会から、「３月31日に、職員は田村市に全員集合するように」という招集がかかるまでです。招集は、「全職員必ず来るように！」という強い指示でした。そして、田村市の公民館のような場所に大熊町の幼小中の職員が集められて、「会津若松市の河東の、廃校になった学校を借りられることになった。そこで大熊の子ども達の教育をするから、先生達も協力してくれ」という発表がありました。幼稚園はどうだったか憶えていないのですが、小中は同じ校舎で、例えば１階が小学校、２階が中学校といった感じで学校を開くという話でした。今後、全国にアナウンスをして、子ども達を集めるようにするからと。

　私はその何日か前に、教頭から「会津に行く方向で話が進んでいるから」と聞いていたので、その時点で会津のアパートを確保していました。ネットだけで見て、まあこの辺でいいやと。ところが、学校は河東という場所で、私が借りた門田のアパートからは40分くらいかかるところでした。寝るところがないよりはいいかと思いながら、最初はそこに家族と共に住む考えでしたが、当時小学６年生と中学３年生になるところだった子ども達は、通学の事情で秋田の学校に通わせることにしました。妻も秋田に行きましたので、私はそこから４年間、単身での生活が続きました。

――河東にという発表を聞いた時、小林先生も含めて、先生方の反応はどうでしたか？

小林　そこまでは、「自分が生きるのに必死な２週間」でした。私も秋田に行っていましたが、「自分だけ秋田になんか避難していて、いいんだろうか」という思いは抱えていましたね。放射線の関係で戻れないという物理的な問題もありましたが、自分だけ逃げていていいのかなという思いがあった中での招集でした。他の先生方の中でも、戸惑いの声が多少はありましたが、「やるぞ、一緒に」と意気込んだ方が多かったと思います。

――こういった緊急事態時や避難先では、教員の役割が明確でなかった部分もありましたね。

小林　聞こえてきた話ですと、南相馬市の当時の市役所幹部からは、「このような緊急時には、教職員も市職員と同じように災害対応にあたってもらいたいものだ」と言われたこともあったようです。まぁそうですよね。市の職員さんは本当に不眠不休でやっていたでしょうし、我々はやはり子どもがお客さんなので、お客さんが目の前にいないと

何もできない人達でしたから。確かにそう言われてもしょうがないとは思いましたね。

── その間、大熊の学校に所属している子ども達への連絡は、各学年の先生方が中心となって行ったのでしょうか？

小林　はい。学級担任が主に連絡網で把握している電話番号にかけて、所在を確認していきました。あとは、大熊町内に住んでいた職員の中には、町民と同じバスに乗って、行く先々の避難所で炊き出しをしたり、おにぎりを握ったりしながら、ずっと子ども達と行動を共にしていた人もいました。そういった職員の中では、行く先々で近くの避難所回りをずいぶんしていたようです。生徒の家族も集まって移動しているので、回って声をかけたり。

── では、会津若松市の河東での仮校舎の再開、設置まで、どのような動きがあったのでしょうか？

小林　会津に決まった一つの背景として、当時の会津若松市長の親族が大熊町に在住していたという繋がりがあったと聞いています。受け入れ態勢が徐々に整って、私達が行った時には、「支援の文房具、ランドセルや小間物が、大体集まってきているんだ」と見せてもらったことを憶えています。机や椅子もだんだん来るんだ、なんていう話も進んでいましたね。

　暖房設備などは、廃校以前に使っていた物は全て使えない状態になっていたので、業者さんを呼んでまた使えるようにしてもらったり。池ももはや酷い状態になっていましたし、溝さらいもしました。最初のうちは本当にもう、暖房がそれほどなかったので凍えていましたね。

　なんとか学校らしくなってきたかなという頃、全国に仮校舎での再開をアナウンスしたら、「じゃあ戻る」と言った子達が100人を超えたのです。そうなると、「この校舎のキャパでは小中一緒にはできない」となって、旧若松女子高校の校舎に移ることになりました。つまり私達は、2回も学校作りをしたということですね。

── 教育委員会の予想に反して、多くの子ども達が集まったということですね。

小林　そうですね。あの当時は、唯一の成功事例だと言われました。町としてきちんと方針を出して、「ここでやるから来てくれ」といち早く言ったのは、大熊だけでしたから。他の町村では方針が決まるまでにやや時間がかかってしまいそのうち散り散りになってしまったような印象でした。

　大熊町の教育長さんが後で話していたのは、「町長から、教育のことは教育長に任せるから全権を持ってやってくれと言われたので、動きやすかった」ということでした。

スタートした“寺子屋”は、子ども達の「学校に来たい気持ち」が燃料

── その後、4月19日に中学校の始業式が行われましたね。どのようなお気持ちでしたか？

小林　学校が私達の仕事場なので、「あ、学校ができる」「あ、子ども達が来た」という喜びが大きかったです。教育長さんが「寺子屋からのスタート」とおっしゃったように、やれることは限られているけれども、とにかく学校はできるなと。

　でも、本当にゼロからのことばかりでした。日課表にしても、どういう日課表にするんだとか。最低の学校の体裁を整えるために、何がなくてはいけないのかを考える。平常時に私達がしている仕事は、学習指導要領や教育計画に基づいているわけで、いわばルーティーンのこともが多くて、クリエイティブな部分は少ないですよね。でも「寺子屋」では毎日が工夫の連続でクリエイティブ。クリエイティブな仕事は、結構楽しかったかもしれませんね。ある程度の苦しい時期を吹っ切ってしまったので、「じゃあもう、自分たちのアイデアで学校作ろうぜ」という雰囲気が楽しかったのかもしれません。

── 学校生活がスタートして以降、子ども達の様子で何か印象的なことはありましたか？

小林　子ども達は本当にもう、学校に来たくてしょうがなかったという感じでしたね。学校に行けなかった期間も、最初のうちは楽しかったでしょうけれど、3月後半頃からは呼んでもいないのに準備中の仮校舎に現れて、「何かやることないですか」と、掃除を手伝ってくれたりとか。本当に、学校に来たかったんだな、勉強がしたいんだなと思いました。

　そこで、これも自分達で考えたのですが、学校再開までの道のりを3つのステージに分けました。第1ステージが4月19日までで、とにかく学校の体裁を整える期間。ステージ2が、5月の連休まで。学校らしいことをしながらも、まだ避難物資を片付けたりしないと教室にならなかったりもしたので、半分授業、半分ボランティアをする期間。新2、3年生については、前年度3月の2週間分くらいの授業が終わっていなかったので、とにかく5月の連休までになんとかそれを終わらせようとしていました。

　ステージ3で、ようやく1か月遅れで該当学年の授業をスタート。その頃には給食も完全給食が出せるようになっていました。ただ、しばらくは1時間目ができませんでした。スクールバスの段取りがうまくいかず、全員揃うのが8時半、9時近くになっていたので、授業を始められるのが2時間目の時間になってしまって。6時間目までやっても、中身は5コマです。1日に5コマでやりましたが、余計な行事が何もないので、年度末までには追いつきました。

　一方で、中体連、いわゆる運動部の地区大会はどうするのかという話が出て、結局は会津の中学校の地区大会に混ぜてもらいました。そこそこ強い部もあって、テニス部は優勝したのではないかと思います。

── では、部活動も連休明け頃から徐々に再開できたのですね。

小林　部活も結局、できる部とできない部がありましたが、3年生が引退する中体連までは大体全ての部が活動できましたね。中体連が終わり、1学期が終わって、家族の都合で転出する子が結構いたのでそれまで。そういう子達は、とりあえず行くところがないから会津に集まったけれども、1学期を区切りに親の仕事の関係でそっちに行くということが多かったと思いますね。学期ごとに、子ども達の数は減っていきました。

── 2012年度も、継続して教務をされていますね。12年度には、また学校の様子は変わってきましたか？

小林　12年度になると、スクールバスの体制等も整ってきたので、少し早めに授業をスタートできるようになって、6コマできるようになっていました。前年に続き、2年目も文化祭は行いました。運動会は、震災前から続く町民運動会でしたね。よさこいの鳴子などの小物や衣装は、1年目の時に無理を言って、大熊まで取りに行った物でした。大熊町が4月の十何日かで立ち入り禁止区域になるという期限があったので、「持ってこられる物を持ってこないと、こっちで授業ができなくなるから、行くべ」と言って、2、3回に分けて取りに行って。でも衣装の数は足りなくて、会津の方に鯉のぼりを寄付してもらって、何個か作り足したりはしましたね。よさこいは、子ども達も思い入れがありましたから。

　また、2012年度の前半には、会津短大の脇に校舎を建設する話があがりました。そちらの設計をどうする、レイアウトどうするというような話も、私と教頭が中心になって進めていました。

大熊町
小林正和 先生

2012 年の後半も、それで忙しかったですね。

── 2011年度と比べて、生徒達の変化は感じましたか？

小林　2012 年度になると、元の大熊中を知らない子が、実は半分を超えるんですよ。新 2 年生も、大熊町の大熊中学校で過ごしていないし、新 1 年生はもちろん過ごしていない。だからその頃になると、子ども達も「会津のネイティブの子ども」になっているので、「大熊町の大熊中学校の時は良かったよね」という考えは、根っからないですよね。仮設校舎で過ごすのがデフォルトになっているので、悲壮感が漂っているというのはなかったと思います。むしろ我々の方が、「あっちでこうしたら、これがあったのにな」というのを、引きずっていたかもしれません。理科の実験器具などは、本当に手厚く、新しい物を新品で全部買っていただいたのですけれども。

── 子ども達と接する際に、何か気をつけてたことはありますか？

小林　子ども達も、どの教員も言っていたことは、「寺子屋からのスタートだけれど、寺子屋を言い訳にしないようにしよう」ということでした。どうせダメだからと最初から諦めるのではなく、文化祭にしても、「できねえべ」と諦めるのではなくて、どうしたらできるかを一緒に考える。先生達も提案するけれど、子ども達からも「あれやりたいんだけど、こうやればできると思うんですけど、どうですかね」という、そういう言い方でやっていこうという話はしていたと思います。

── 当時のそういった経験は、小林先生の教員人生の中に影響がありましたか？

小林　ありましたね。ダメな理由を探さなくなったというか、できる方法を探すようになったというか。先程も言いましたが、我々の仕事はルーティーンが多くて、1 年ルーティーンだったり、3 年ルーティーンだったりで繰り返しているので、ああやればこうだったから、こうやればできるんじゃないみたいなものには強いのです。一方で、状況が変わると、「え、前まではこうだったから」というようなことを言いたくなってしまいます。でも、「それ言ってもしょうがないからどうするか、どうやったらできるか考えっぺ」と。そういう意識が、あの 2 年間で自分自身の中に根付いた気はしますね。

また、その当時は、これはやらなくていいねとか、この調査は必要ないねと見直していったことで、本当に仕事がスリムになって、子ども達に向き合える時間ができました。結局、1 時間目をやらなくても授業の標準時数をクリアできたのは、そういう余計なことがなかったからです。子どもと正面から向き合って、やれる時間だけを取り出していくと、本当にコンパクトになります。

だから逆に、この震災後の 10 年の間で、これもできるようになりました、これも復活しましたといったことで、子どもと向き合う時間が少なくなっていったような気がしてしまいます。「あの時にあれだけ、何が必要なのかを考えて、必要なものだけ残していい感じになったのに。また結局元に戻ったよね」と思うことはあります。

── 大熊町は 2019 年に避難指示が解除され、大熊中の仮設校舎も 2020 年度で役目を終えました。そしてこれから先は、震災や原発事故を経験していない若い世代の先生方も増えてきます。そういった記憶や経験の不足部分は、どのように補っていけばよいでしょうか？

小林　今年、うちの学校に 2 人の新採用の先生が入っていますが、偶然にも2人とも会津若松出身です。今 24 歳ということなので、あの当時は中学生くらいだったということですよね。震災から数週間は、会津もそれなりに色々あったのだろうけれども、私も会津に行ってからは何も不自由を感じずに生活できていたので、おそらく彼らもそうだったと思います。だから今彼らの中にあるのは、私達が阪神大震災について持っている程度のイメージだと思うのです。

5 年前ならば、この学校では放射線教育も防災教育も、すごく力を入れてやっていました。だけど、今となってみれば、他の地域とは変わらないところに勤めていますので、「震災で大変だった、かつて大変だった地域に勤めている」という感覚はないと思います。その点については、繋ぎようがないかなと。

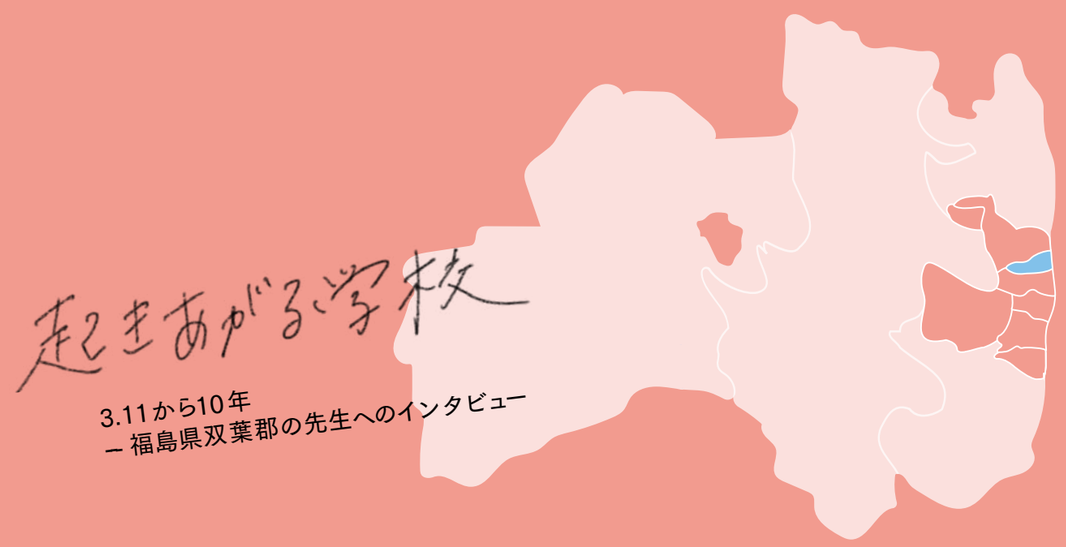
ですから、例えば、双葉郡にできたアーカイブや伝承館などに、初任者研修で行くというプログラムがあってもいいのかなという気はしますね。県のプログラムに入れられないのなら、南相馬市や双葉郡としてやる。初任教員の研修プログラムとしてそこを一つ必ず入れるとか。夏休みにちょっと行っておいでぐらいな感覚でもいいと思います。

2021年12月27日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

双葉町

Futaba-machi

双葉町は浜通り地方に位置し、大熊町と浪江町に隣接。福島第一原子力発電所は、双葉町と大熊町にまたいで立地している。2011年3月時には7140人が暮らし、町内に双葉南小学校、双葉北小学校、双葉中学校が立地していた。震災と原発事故以降は、埼玉県への避難を経て、2014 年 4 月に避難先のいわき市にて小中学校が再開。2022 年 2 月時の住民登録者数は 5633 人、町は全域にわたり帰還困難区域と避難指示解除準備区域に指定されているため町内居住者数は 0 人。



起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビュー

双葉町

佐藤大志 先生

さとう・ひろし

双葉町出身、小学校教頭。2011年3月の震災発生時は双葉町立双葉南小学校に勤務。2021年度インタビュー時は、双葉町立双葉南小学校勤務。趣味はスポーツ観戦（特に陸上競技）。

双葉郡双葉南小学校で6年生の担任を勤めていた、佐藤大志先生。震災翌日には自宅がある双葉町から避難を開始。その後、さいたまスーパーアリーナに避難した双葉町の子ども達のため、しばらく家族と離れて暮らすことになることを覚悟しながら、単身で埼玉へと向かいました。避難先が加須へ移った後も、双葉町民と共に避難生活を送り、加須市立騎西小学校に3年間勤務をして子ども達をケア。震災の経験は先生に大きな影響を与え、子ども達との向き合い方にも変化をもたらしたといいます。3.11の記憶をどのように次の世代へ伝えていこうとしているのか、当時の状況とともにお話を伺いました。

覚悟を決めて向かった、さいたまスーパーアリーナでの避難生活

――震災当時は双葉南小学校に勤務をされて、その後、避難先の加須で3年間、教員をされたそうですね。まず、震災当日の状況から伺ってもよろしいでしょうか？

佐藤　3月11日の地震が起きたときは、ちょうど帰りの会で「さようなら」をする時間帯でした。私は6年生の担任をしていて、児童達が下校した後にワックスがけをする予定でいました。児童の机や椅子等の教室の荷物を廊下へ出して、さようならをしてから、職員でワックスをかけるという流れです。いつもだったら、「早く机を出して」などの声をかけるのですが、なぜかあの日は「急がせてもしょうがないな」と思いながら、帰る準備をする子ども達を見ていました。

そうしたら、2時46分に地震が起きたのです。私のクラスは、まだ机が教室の中にあったため、とにかく机の下へと潜らせました。ほかのクラスはワックスがけに備えて机や椅子を廊下に出してしまっていたため、教室の中央にみんなで集まったそうです。たまたまですが、不思議ですよね。廊下ではスピーカーが落ちてきたりしていましたから、指示を待っていては遅いと判断し、揺れが収まったところで校庭へ避難をさせました。

――当時の双葉南小学校の規模はどのくらいでしたか？ また、校庭に避難した後の対応はどうされましたか？

佐藤　私が担任をしていたクラスは21人でした。同学年に3クラスあり、1組と2組が同じくらいの人数で、3組は特別支援学級でした。全校では240～250人くらいの規模だったと思います。子どもの人数が減ってきているという中、田舎の学校としては大きい方の学校だったかもしれません。

また、校庭に避難をさせた段階で、テレビやラジオのニュースを聞いて心配された保護者の方々が、次々に迎えにきていました。一方、車が渋滞で動かず、なかなか迎えにくることのできない保護者の方もいて、ある保護者の方は車を乗り捨て、20キロ近く歩いてきたとおっしゃっていました。私のクラスの児童は、夜遅くなる前に保護者に引き渡すことができましたが、別の学年の最後の児童を引き渡したときは、夜8時とか8時半とか、すでに暗くなっていたと思います。その後、私達職員も家に帰るとか、避難所へ向かうとか、そういった行動に移りました。

――先生ご自身は、どうされたのでしょうか？

佐藤　私は双葉町内に自宅があり、学校のすぐ近くだったため、一旦、帰宅しました。エリアによって電気が付くところもあったようですが、自宅は停電していたため、その日のうちに母親と双葉北小学校へ避難しました。双葉南小学校は原発に近く、3キロ圏内に入ってしまうため、少し離れた双葉北小学校や双葉中学校が避難所になっていたのです。

そして、翌日12日の早朝、6時か6時半頃だったと思いますが、「逃げてくれ」「川俣方面に行ってくれ」と、役場の方からそういう内容のアナウンスがありました。私はその情報を聞いて、すぐに川俣方面へ自分の車で向かい、川俣の飯坂小学校に隣接する公民館へ避難しました。学校がどうなるのかという心配もありましたし、役場も同じところに避難していたので、3月16日くらいまでそこにいました。

――埼玉へ行くことになった経緯を教えていただけますか？

佐藤　ずっと電話が繋がらなかったため、妻や息子達と連絡が取れていませんでした。日数はややあやふやですが、3月14、15日辺りでようやく電話が繋がり、妻と息子達はすでに福島県を離れて栃木県へ避難していたことがわかりました。そこで、私も福島を離れて栃木へ行きましょうということになり、16日に栃木へ移動したのです。その栃木にいる間に、双葉町がさいたまスーパーアリーナへ避難するというのを、テレビで見ました。

あの時、100人を超える子ども達がさいたまスーパーアリーナへ行っていました。当時の教頭から、勉強面・生活面のお世話をする人がいなくて困っていると、何とか来てもらえないかと声をかけられ、悩みました。やっと家族と連絡を取ることができ、無事を確認して、この先どうしようと考えているところでしたから。息子達も小さく、年老いた親もいる。ここで埼玉へ行ってしまったら、また家族とばらばらになってしまう。それに、埼玉に行ったら簡単には帰ってこられなくなるだろうと感じていました。家族の元を離れていいのか悩みましたが、でも、誰かが行ってあげなくてはならないという気持ちもあり、3月25日に単身でさいたまスーパーアリーナへ行きました。

――埼玉では、滞在場所の用意などはあったのでしょうか？ さいたまスーパーアリーナに寝泊まりするという認識で向かったのですか？

佐藤　滞在場所の用意などはありませんでした。また、避難所というところは入所・退所の手続きを取らないといけませんから、私は川俣の避難所を出た際に一旦、退所手続きを取っていました。そうしないと避難所を出ていくことができなかったためです。そして、さいたまスーパーアリーナに行った時には、退所手続きをしていたために、中に入れることはできないと言われました。双葉町民であり、双葉町の教員であるのにも関わらず、駄目だと。そのため、もう一度、避難者として避難所への入所手続きを取って、さいたまスーパーアリーナに滞在することになりました。こういった事情もあって、家族の元へ帰ることはできなくなると予想していたのですけれどね。

――どのくらいの期間、さいたまスー

パーアリーナにいたのでしょうか？

佐藤　さいたまスーパーアリーナは、3月31日までに明け渡さなくてはいけないと決まっていました。そのため、私がいたのは1週間程度になります。3月30・31日の2日間で旧騎西高校に移動することになっていました。最後の町民がバスに乗って出た後、私と教頭で、全ての町民が移動したことを確認しましたね。

── 最初に、さいたまスーパーアリーナに到着された時は、どのような印象でしたか？

佐藤　表現するのが難しいですね。まず、廊下や階段の下など、あらゆるところに段ボールを敷いて人が寝ているわけです。その光景を見たときに「置いて帰れない」と思ってしまいました。この人達を置いて帰れないなって。川俣の避難所とはちょっと様子が違っていました。恐らく、人数も多かったのでしょう。1000人を超えていたのではないかと思います。とにかく、なんて言ったらいいのか表現に迷いますが、酷い状況というのか……そんな印象はありましたね。

　また、私自身も段ボール布団で寝泊まりをしました。そうした理由のひとつは、良いか悪いかは別として、「先生方がいない」という町民の言葉を耳にしたことです。全くいないわけではなくて、来ることのできる先生方は来てくれていました。でも、先生方にも家族がいますから、夕方になると家族の元に帰る。いわゆる寝泊まりはしない。日中はいるけれど、夜はいないと。そういう言葉が耳に入ったとき、「私はしばらく家族のところには戻れない」という覚悟を決めて来ましたから、じゃあ、私はここで寝泊まりしますと。短い期間でしたけど、常駐していました。

──さいたまスーパーアリーナでの子ども達の様子はどうでしたか？1週間程の生活で、先生はどんなことを感じましたか？

佐藤　子ども達は、もう自由になってしまっていて。朝も昼も夜もなく、ご飯の時間以外は決まっていませんから。スーパーアリーナの外にも自由に行き来できる状況だったので、そこは心配で、子ども達の様子を確認するために、定期的に館内をぐるぐる見回るようなことをしていました。

　ボランティアの方達によるイベントもあり、イベントに参加している町民の方もいましたし、必要な物の買い出しに出かける方もいました。だから、ボランティアの方も含めて、外との出入りは激しかったですね。

　支援物資もたくさんあったんですよ。困らないぐらいたくさん。だから、避難する上で物質的に困ることは少なかったのですが、何か虚しい気持ちだけがありましたね。私にとって避難生活の中では、さいたまスーパーアリーナが一番苦しかった。川俣の避難所に物資はそれほどありませんでしたが、川俣ではそんなに苦しさを感じなかったのです。でも、物もいっぱいある、人もいっぱいいる、寝泊まりにも困ってはいない、だけど、スーパーアリーナでの生活は虚しかった。それは、「何もできないから」だったのかもしれません。何もできないというのは、自分が頑張ったところでどうにもならないとか、そういうことだったのではないかと思います。

震災後の考え方の変化
子どもの言葉を待つようになった

──旧騎西高校に避難所が移って以降、子ども達の学習環境を整えていくような動きは、いつからどのように始まったのでしょうか？

佐藤　4月から、加須市の騎西小学校に、双葉町の子ども100人が通い始めました。しかし、小学校から下校した後、避難所で勉強するのが難しいのです。教室には何十世帯、体育館のワンフロアには何百世帯が段ボールで区切られた空間で生活をしている。そのような環境下で「勉強しなさい」ということは困難ですから、授業が終わった後に小学校の図書室を借りて勉強会を開くことにしました。勉強会といっても、宿題をやらせるとかそういったことなのですが、私達双葉の教員が子ども達の面倒をみて、それから下校させることを始めたのです。

　また、学校から避難所に帰ってくると、生活が乱れてしまいがちでした。夜も寝ないで遊んでしまうようなことが、小学生でも中学生でも高校生でも起きていたので、子ども達の学習室を用意してもらいました。時間を区切り、例えば6時から8時までは小学生と中学生、夜の8時から10時までは高校生が使うというような、学習の場所と時間を設けました。

──これまでと異なる形での教育活動となりましたが、先生が心掛けていたことや気に留めていたことはありますか？

佐藤　以前はよく子どもを怒っていたのですが、怒らなくなりました。震災の後からです。例えば、待つことも大事なのではないかと思うようになりましたね。言いたくないことについて、無理に話をさせることもないだろうとか、話せないのであれば話せるまで待ってあげようとか。以前より、励ますような言葉掛けが多くなったことなども、すごく変わったと自分では思います。

　うまく表現できないのですが、寄り添ってあげることを心掛けていましたね。問題行動を起こしてしまうような子どももいましたが、以前であれば、怒って何とかしようというような部分があったと思います。でも、たとえ怒ったとしても、なぜそうしてしまったのかという理由を聞くようになりました。あとは、子どもと一緒に行動をしてみるとか、その後どうするのか見守るとか。また、保護者にきちんと見ていてあげてほしいとお願いに行く際も、そこでコミュニケーションが取れれば、次に何か問題行動が起きたときにも連携しやすいと考えるようになりました。コミュニケーションで繋がるというのは、震災前の自分の中にはあまりなかったかもしれません。

── 震災の経験が、そういった変化を先生にもたらしたのですね。その変化は先生の中で大きなことですか？

佐藤　大きいです。今も、子どもを待つようにしています。待つことで、子どもができるようになるのであれば、待とうと思っています。「できるところまで頑張ってみよう」というような声掛けも、できるようになりました。それを当たり前のようにできる先生も、沢山いらっしゃるのかもしれませんけれども。

　長く教員をしていると、昔の教え子の子どもを教えるというようなこともあるのではないかと思うのですが、そういった時には、以前の私を知っている保護者は「先生、全然違う」と感じるかもしれません（笑）。

　話が少し戻りますが、私が埼玉に残った理由の一つに、「知っている人がいると安心するのではないか」という思いがありました。避難先で教員が様変わりしてしまうと、保護者の方もやや戸惑うのではないかと思ったのです。環境に慣れてきたところで、また新しい先生になってしまうというのは、話しにくさが出るのではないかと。私が残ったことによって、他の先生には話しにくいことを話したり、聞きにくい話を聞けたりしたのではないかと感じています。

　埼玉での3年間、仕事上で特別に大変だったことや苦労を感じたことはありません。ただ、他人の子どもの面倒を見ることはできたけれど、自分の子どもに対してはどうだっただろうとか、そういう葛藤はありました。仕事に関しての不満はなく、埼玉の先生達も一生懸命に接してくれました。ただ、自分達の生活を少し犠牲にしている部分があったようには思います。

── 埼玉の先生方も、避難をしてきた子ども達を受け入れるにあたり、体制づくり等でご苦労があったと思うのですが、双葉の先生方とはどのようなコミュニケーションをとってやり取りされていたのでしょうか？

佐藤　非常に大変だったろうと思います。3月31日まで、さいたまスーパーアリーナにいた世帯もあったわけですから、騎西小にしてみれば、入学式までの4・5日の間に机と椅子を100ずつ、プラス教室と先生を確保しなきゃいけない状況でしょう？私が教頭の立場だったとして、それをやってくれと言われたら、多分できないですよ。机・椅子だけの問題じゃない、教科書から何から全て揃えないといけない。それを受け入れてくれた騎西小には、本当に感謝しかないです。

　入学するまでのわずか4・5日しかない中、騎西小の先生が旧騎西高校の避難所まで来て、入学説明会を開いてくれました。そこで、教員がお互いに挨拶して、色々と連絡を取り合うようになりました。実際に私達が騎西小での勤務を始めたのは、5月の連休明けからです。震災という状況下だったため、県同士が協定を結び、特別に私のような福島の教員が埼玉でも勤務できるよう併任教員になりました。4月から5月の連休までの間は、子ども達の送り迎えということで、毎日避難所となった旧騎西高校から騎西小まで集団登校で連れて行っていました。短い時間ですが、そのときに埼玉の先生達と会話をするということもありましたね。

── 双葉の先生が加須の先生に被災体験を伝えるなど、先生同士で震災について話し合うことはありましたか？

佐藤　埼玉の先生方は気を遣って、あまり聞いてこられませんでした。私も聞かれたら答えるような形で、自ら進んで話すことはなかったと思います。ただ、こうしてこの取材を受けている趣旨もそうだと思いますが、だんだんと忘れられてしまうじゃないですか。私の記憶も既に曖昧な部分もありますから、なんとか伝えていかなければと思い、小学校で 3.11 集会というのを行いました。放射線に関することや自分達はこういう経験をして、今ここにいるのだという話を初めて全校生徒の前でしました。

　現在もそうした集会を行っているのかは分かりませんが、私が加須の騎西小に在籍していた 2011 度からの 3 年間は、毎年実施していました。初年度は地震や津波を中心に、実際の 3.11 当日の話をしていたと思います。2 年目以降は、プラスアルファで放射線教育を入れました。「放射線」「放射能」の情報が色々と入るようになってきていて、全国的にもニュースで取り上げられたり、さらにあまりいい話題ではないようなこともありました。それで、福島県の子が他県に行ったらいじめられたというようなニュースもあったため、そんなことはないのだと、自然界にだって放射能はあるという話などを、集会で取り上げました。

── 子ども達に原発事故について語るというのは、難しくありませんでしたか？ また、どういったケアをされたのでしょうか？

佐藤　子ども達が原発に関する話題を嫌がっているという話を、直接聞くことはありませんでしたが、子ども達と面談したスクールカウンセラーから報告を受けることはありました。家族に原発関係者がいるので、心配をかけたくないという話だとか。

　先ほど話した放課後の学習会の目的には、勉強をさせるということだけではなく、「教室では話せない、実は話しにくいというような話題を、話せる場にする」ということもありました。担任の先生は福島の先生ではないので、図書室へ勉強に来た時、担任の先生に話せないことを話す。だから、勉強ばかりをさせていたわけではなく、トランプやナノブロック等を置いて遊ばせたりもしていて、そういう中でぽろぽろと話し出す子どももいましたね。だから、勉強しながらおしゃべりができるような場にしていました。

震災の記憶を伝える「学校」も「学校に子どもがいること」も当たり前ではない

── 震災後、先生は生徒のケアを中心に取り組んできたそうですが、3.11 というのは、先生の教員としての人生にどんな影響がありましたか？

佐藤　「子ども達のケアをしたい」という気持ちは、年を追うごとに強くなりました。学力も大事だとは思いますが、現在も、話を聞いてあげることに力を入れようと思ってやっています。

　3.11 以降、子どもに寄り添う姿勢を大事にしたいと思ってきました。子どもだけではなく保護者に対してもですね。保護者の話を聞くと、今も悩みがあり不安がある。聞いてあげたものの中に、もしかしたら、解決できることがあるかもしれないし、解決が難しくとも聞くだけで安心してもらえることがあるかもしれない。常にこちらから歩み寄るというか、それをずっと心掛けています。何でもいいから悩みを話してほしい、何かあったら話してください、というスタイルでいます。

── 震災の記憶が子ども達も含めてなくなっていく中、ご自身の経験をこれからの若い教員の方々に伝えていきたいとは思いますか？

佐藤　当初はこうした取材を断っていました。でも、次第に考え方が変わり、「自分が経験したことや知っていることを、話さなくては伝わらないのではないか」と思い始めた時期がありました。だから、極力、こうした取材依頼があったら答えるようにしています。

　考え方に変化が生まれたのは、2011 年度の途中からです。最初、自分のことを話すのは嫌でした。避難直後は自分の中で受け入れることができなかったのだと思います。でも、だんだん自分の記憶も薄れ、聞かれても答えられなくなってしまっている自分もいて。そういうことが、取材を受けてみようと思ったきっかけでした。話しているうちに思い出すということがあるのですよね。

　何せ、こんな大災害で、県を跨いで教員をやることになったというのは、私達が初めてのことですから。今後、有事があった時のベースにもなるだろうと言われていますので、伝えていきたいと考えています。「万が一」は起こって欲しくはありませんが、もしも起こった時に、教員が何をしなくてはいけないのかということを、具体的に残したいと考えています。

── 主にどういったことを伝えていかなくてはならないと考えていらっしゃいますか？

佐藤　いつもこれだけは伝えなくてはと思っているのは、感謝の気持ちです。ものすごく助けていただき、支援を沢山受けてきました。それを伝えなくてはと思っています。今の子ども達は、そういう気持ちが薄れてきているのかもしれません。例えば、今でも時々、支援物資が届くのですよ。数は、めっきり少なくなってきてはいます。でも、その支援物資を、本当に感謝の気持ちを持ってもらっているかといえば、どうなんだろうという部分がありますよね。それは子どもだけではなく大人もそうです。支援してもらうことが、当たり前になってしまっているのではないかと感じます。

　生活はだんだん元に戻ってきているというか、震災前と変わらない形で生活ができるようになってきています。すると、だんだんと感謝の気持ちが薄れてくるのですよね、記憶が薄れていくのと共に。あの日、体一つで逃げたはずなのに、命からがら逃げたはずなのに、それを忘れてしまった感じが、何となくするのです。

　でも、自分一人では絶対にここまでは来ていない、誰もが助けてもらってここまで来たはずです。そうでなければ、とてもじゃないけれど学校なんて始まりませんでしたし、再開なんてできなかったと思います。だから、そこを伝えていかなくてはならないと考えています。当たり前だと思っては駄目なのです。学校があることも、学校に子どもがいることも当たり前などではない、そうではなかったのだと。学校がなくなってしまうかもしれないと感じた経験を伝えていかなくてはならないと思っています。

2022 年 1 月 27 日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

双葉町

松本涼一 先生

まつもと・りょういち

楢葉町出身、小学校教頭。教科は英語。2011年3月の震災発生時は双葉町立双葉中学校に勤務。2021年度インタビュー時は、楢葉北小学校勤務。趣味はコーヒー、多肉栽培、スパイスカレー作り。

震災時、双葉郡の双葉町立双葉中学校３年生の担任だった松本涼一先生。先生は震災後、以前から続けていた英語教育の勉強会のご縁で、週末に全国各地を飛び回り、英語授業の研究発表とともに震災の体験を発表する活動を続けてきました。そうした場で先生は必ず、「ふるさととは何か」という問いかけを提示し続けています。その「ふるさと」の問いかけをするようになったのは、浪江町から避難してきたある男子生徒の一言がきっかけでした。先生が震災を通じ、教員として学んだこと、いま若い世代に伝えたいことを伺いました。

家族の安否が分からない中、学校で迎えた朝

── 震災当時、双葉中学校３年生の担任をされていたと伺いました。まずは、震災当日の学校の様子を教えてください。

松本　３月11日は福島県内全ての中学校が卒業式でしたので、どの学校も似たような状況だったと思います。午前中の卒業式が穏やかに済み、地震が起きた時間帯は１、２年生が部活動をしていて、体育館にいた私も大きな揺れを感じました。とにかく「子ども達を体育館から外に逃がさなくては」と思いましたが、男子はなんとか逃げたものの、女子は皆で一塊になったまま、足がすくんでしまって動けない。一人ずつ剥がして、なんとか外に出しました。外に出てからも余震が続いていて、駐車場の車はバウンドし、すぐ側にあったプールの水は風呂桶を揺らしたようにボチャンボチャンと溢れていました。

その日、午前中は天気がよかったのですが、午後から天気が崩れてきて、とても寒くなりました。校舎の耐震工事はしていましたが、まだ余震が大きかったので、しばらくはブルーシートを敷いて、1、2年生達と外で避難を続けました。校庭は隆起、段差ができたりして、水道管も破裂。校舎の中も結構な被害がありました。

── その準備の様子を教えてください。

松本　双葉町内の何カ所かが避難所になりましたが、おそらく町から「双葉中学校も避難所に」という指示があって、先生方で手分けして教室の掃除をしたり、避難準備・運営の準備をし始めました。係なんてありませんので、それぞれが「受付やります」「教室片付けます」と申し出て、なんとか避難所を設営しました。そこに近くの町民が700人ほど、徒歩や自家用車で避難してきました。私は駐車場係だったので、そのままずっと外で火を焚いたりしながら駐車場にいました。

そしてその日の夜９時頃に町内放送が入って、「原発から放射能が漏れた可能性がありますので、全員屋内に退避してください」という内容のアナウンスがありました。

私自身のことについて言えば、楢葉町の自宅の家族とは連絡がとれていませんでした。自宅は海から近く、津波の警報もあり、自宅の電話も携帯電話も通じません。テレビを見ると、速報で「楢葉町の海側の家20～30軒が流された」というテロップもあって、「あぁ自分の家はもうなくなったな」とか、「家族はもしかしたら死んだのかな」なんて思いながら避難所の運営をしたのを覚えています。

── ご自分の家族の状況も分からない中、先生方は非常に過酷な精神状態の中で、避難所運営をされていたのですね。

松本　初日は、他の先生方とそのまま徹夜で避難所を運営しました。そして翌朝５時過ぎ、校長先生から臨時打ち合わせの招集がかかって、職員室に集まりました。そこで校長先生から「子ども達の安否の確認を」というお話があったのですが、その時点で「もしかすると津波で家が流されているかもしれない」という先生が、私も含めて２、３人いたんです。自分の家族の安否も、家が流されているかどうかも分からない中、「生徒達の安否ももちろん大事だけれど、先に家族の安否を確認させてほしい」と進言した先生がいらっしゃいました。その言葉を受けて、５時半過ぎ頃から先生方もそれぞれ帰宅しました。

私は楢葉出身の先生方と一緒に、３人で一つの車に乗って学校を出ましたが、道路も隆起していましたし、普段だったら30分で通れる道に１時間半かかりました。その時に同乗していた男の先生は、「大熊の熊町小学校に勤めている奥さんと連絡が取れなくて、小学校に行ったらもう誰もいないし、奥さんの行方がわからない」という状態。もう 一人いた養護の先生は、「自分の子どもがどこに避難したかがわからない」という状態。私達は、避難所などを巡りながら、自分達の家に戻りました。

そしてその帰り道で私の携帯のメールが復活して、それまでに妻から送られたメールが一気に届きました。そのメールを読んで、「家族はＪビレッジに避難している」ということがわかりました。私は家まで送ってもらった後、自分の車でＪビレッジまで行き、朝８時頃に家族と再会できました。

── 12日の朝８時頃に、ようやくご家族と再会できたのですね。

松本　再会はできたのですが、また津波が来るかもしれないということで、子どもの着替えや荷物を取りに再び自宅へ妻と戻りました。我が家はギリギリ、津波の被害からは免れたのですが、うちから海側にあった家はもう全て壊滅状態となっていました。

９時過ぎにＪビレッジに戻ると、父親が慌てて、「今すぐ南の方へ逃げるように言われた」と言うのです。放射能漏れがありそうだという情報が町に入ったようで、そこから家族６人でいわき市にある妻の実家へ避難し、12、13、14日の夜に泊めてもらいました。

ところが、14日の夜、宮城の女川原発に勤めている友人が、私に電話をくれました。双葉郡では東電関係に勤めている人が多く、友人もその一人でした。その友人が、「東電関係の人達も、逃げられる人は東電・原発から10キロ以上は離れたところに逃げているから、できれば遠くに逃げた方がいい」とアドバイスをくれました。ただ、避難している妻の実家の家族にも突然それで避難するとは言えないので、家族会議を開いて、「こういう状況で原発も危ないというから、一晩様子を見て何かあったら東京の親戚のところへ逃げよう」という話をしました。

14日の夜は一晩寝ないでテレビを見ていましたが、朝８時頃にニュースを見たら、建屋の水素爆発の様子が出てきました。そのときは水素爆発とかは分かりませんでしたが、映像を見て「これはまずい」と直感しました。東京の親戚のところへ皆で逃げるため、そこでまず私達、松本家が

ひとまず東京の立川の親類宅へ逃げました。その道中も、いつもだったら2時間くらいで行く200キロの道のりに、12時間かかりました。高速も使えず、ガソリンスタンドも1,000円だか2,000円だかの制限がある中、ギリギリの状態でなんとかたどり着きました。

── その後しばらくは、ご家族で東京での避難生活を続けたのですか？

松本　立川の叔母の元に家族で避難して、そこから私だけ埼玉県まで通ったり泊まったりする生活が始まりました。埼玉県のさいたまスーパーアリーナに、双葉町が集団で避難していたためです。そこでは、双葉町の教育委員会の手伝いをしていました。ちょうど3年生は高校入試が終わったばかりで、その発表が震災後だったのです。子ども達の進学先をどうしようかと色々な打ち合わせをして、この先どうなるのか分からない中、とにかく県の教育委員会からの情報を待ちました。

そしてようやく受けた県からの情報は、「子ども達の受けた高校のほとんどは原発の被災地区になってしまって、再開の見通しが立たない」というものでした。さらに、「県としては、受験した子達全員を合格とみなす」ということでしたので、それを保護者に連絡し、とりあえず避難先の行けそうな高校に相談してくださいと伝えました。この時は、保護者も大変だったと思います。

全員が合格しているということから、高校入学の要件は満たしているため、転入という形か何かで大体は面談のみで入れてもらうことになり、全員がどこかの高校には入りました。

── そして3月末には、双葉町の避難所が埼玉県加須市の騎西高校に移りましたね。

松本　3月30日、31日の2日間かけてだったと思いますが、1400人の双葉町民が、さいたまスーパーアリーナから騎西高校に移りました。そして双葉中学生籍の子達は、騎西中学校に編入することになりました。震災直後の4月に編入した子は、1年生から3年生まであわせて70人。双葉中から騎西中に入った教員は教頭先生と私だけでしたが、生徒達70人は、元々あった騎西中学校の学級に3、4人ずつ入っていきました。

生徒が抱える「学校の中での問題」と「避難所の中での問題」

── 騎西中学校では、どんな仕事が担当でしたか？　今までと違う仕事も増えたと思いますが、先生が一番気を配っていたことは、どんなことでしょうか。

松本　1年目は、学校に来られなくなってしまった子のフォローなどをしていました。避難所に声かけにいったり。それから、精神的に不安定な子もいたので、授業に入って様子を見たり。2年目は、1年生の担任を受け持ちました。そのクラスには、たしか双葉の生徒が2人、浪江の生徒が1人いました。

気を配っていたことと言えば、とりあえず移ってきた70人のことは特に注意深く見ていました。場合によっては保護者とも面談して、学校生活に馴染めるように。

また、双葉中から一緒に来た教頭先生は3年生、私は1、2年生を担当、と割り振りを決めて、私は英語の教員なので、1、2年生の英語の授業には全クラス行くようにしました。1、2年生で12クラス、あとは特別支援学級などもあったので、13、14クラスをぐるぐる回っていましたね。最初は双葉の子を注意して見ていましたが、だんだんと子ども達も慣れていったと思います。

他にも、生徒指導の先生や管理職が集まる「生徒指導委員会」という集まりが週に1回あったので、そこに参加させていただいて何か問題がないか話を聞き、必要であれば保護者と担任に繋いで問題解決をしようと努めていました。

── 実際に、何か生徒達にトラブルが生じたこともありましたか？

松本　学校の中での問題と、避難所の中での問題があると思います。学校の中での問題で特に覚えている中では、下駄箱に「原子力」とか何かメモ書きされたものを靴箱に入れられた、という問題がありました。

その問題の時にも、できるだけ「担任の先生とその子達の信頼関係を作っていただくように」と思っていました。実際、本当に騎西中の先生方はよくしてくださり、目をかけてくださりました。私の立場としては、担任の先生から聞いた上で、その子と話をしたということです。

生徒指導委員会の中でどうするかという話は、私としてはお願いするしかないですし、実際にそこに割って入って「これやったのは誰だ」などということはなかなかできないことでしたが、できるだけ学年・学級で問題解決をしていただくようにお願いをしていました。

── 学校の中での問題のほかに、避難所の中での問題もありましたか？

松本　ありました。避難所といっても元々は学校のスペースなので、普通の教室に何家族もいるような状態でした。教室にパーティションなどの仕切りもなく、プライバシーが全くない。「おじさんのいびきで眠れないから、学校に来て保健室で寝る」とか、女子の着替えの問題があったり。そうした生活のストレスが、子ども達の学校でのストレスにも繋がっていると感じました。避難所の大人の目の届かないところで、中学生だけではなく卒業生が出てきて、トラブルがあったり。煙草が見つかったこともありました。そういった部分も、町の問題として取り組んでいました。

── 町の問題として取り組んだのは、松本先生が立場上、入らなければならなかったからでしょうか？

松本　埼玉で中学校に勤務し始めたのは5月になってからでしたので、4月いっぱい、5月の途中までは避難所にいて、教育委員会所属の立場で子ども達の情報を仕入れたり、避難所の中をぐるぐる回って様子を見たりということをしていました。その中では、やはりいろいろな問題が出てきて。私が騎西中学校に勤務し始めてからも問題がなくならないので、勤務終了後、夕方とか夜に「出動」というんでしょうかね。避難民、町民方から「あそこで誰々が煙草吸っていたよ」と言われて、見回りしたり。そういったこともありました。

── そういう時、単純に「コラ、何やってるんだ！」とも言えない状況もあると思うのですが、松本先生はどのように子ども達と向き合ったのですか？

松本　よかったのは、震災当時は双葉中に赴任して2年目だったので、卒業生のこともある程度知っていたということです。知っている子が悩みを抱えたり問題を抱えたりして……のことだったので、問題行動があったときだけではなく、普段から会って喋ったりしていました。それで防げたわけではないですけれども、そういった子ども達との関係がありましたし、地域の人達の中にも知っている人が何人もいたので、その意味では私も役に立てたのかなと思います。

── 震災前も教員をされてきて、松本先生なりの考え方があったと思うのですが、避難所での対応や避難先の学校での指導を通じて、先生の考え方が変わった点はありますか？

松本　大きく見方が変わったのは、「町の学校なんだ」ということです。それまでは町役場や教育委員会とはなんとなくしか関係がありませんでしたが、避難所となっていた元高校の職員室が役場になり、一緒に仕事をするようになってから、とても身近に感じられるようになりました。

双葉町が役場機能をいわき市に移転し、私も仮説の双葉中学校で勤務するようになってからも、教育委員会や町役場とはすごく密接に繋がって、そちらと連携した事業は、前よりも企画するようになりました。子ども達は町の中で育っているというか、「町の人材なんだな」ということを、以前より強く思うようになりましたね。

深く考えさせられた、「ふるさとって、何だろう」ということ

── この時期に接した生徒の中で、特に印象に残っている子はいますか？

松本　騎西中2年目で1年生の担任だった時、浪江から来た男子が私のクラスにいました。津波で家が流され、原発もあって戻れない状態で、普段はほとんど喋らない静かな子でした。

ある道徳の時間に「ふるさとって何だろうね」という授業を一時間行いました。それは「双葉の子達のことを、埼玉の子にわかって欲しい」という思いがあったからです。それでふるさとの定義を全員で考えていたとき、その男子が「住んでいる所が、ふるさとになるんじゃないですか」というようなことを書いて、考えさせられたことがありました。「生まれ育ったところがふるさと」だと、それまで思っていましたが、「ふるさとに住めなくなったら、ふるさとってどうなんだろうな」、「ふるさとってどういうことなんだろう」と考えるようになりました。楢葉町も2015年10月に避難指示が解除に

なって、2017年4月から町内での学校生活を再開しましたが、ふるさとに住めるというのは当たり前のことではないということを、その時からはっきり意識するようになりましたね。

――先生はこの時期、「併任」という立場で教員をされていたと伺いました。「併任」とはどのような立場ですか？

松本　「併任」は、この震災の対応のためにできた制度です。私は福島県教育委員会と埼玉県教育委員会という二つの県の教育委員会に雇用され、「福島だけれど、埼玉の先生」として勤めることになりました。最初は戸惑いましたが、先生方にもよくしてもらい、なんとか全うできました。

――担任となると、埼玉県出身の子ども達の担任にもなったということですが、その子達への接し方と、双葉・浪江から来ている子達への接し方とでは、何か違いはありましたか？

松本　ほとんど同じですが、双葉・浪江の子達とは地元の話もしていました。担任をもったのは、震災当時に5年生だった子達ですので、その時の先生の名前を出したり、どこに住んでいたのというところから始まったり。「私はとりあえず双葉中学校の先生だよ」と、信頼関係を築けるようにしていましたが、他の埼玉の子ども達からしてみれば、私もただの1人の騎西中学校の先生なので、それ以外のところは私も同じように接していました。

――先ほど、道徳の授業で「ふるさと」を考えたお話がありましたが、震災をテーマに先生がクラスの中で話したり、一緒に考えたりする授業は行いましたか？

松本　多分、話はしたと思います。その頃、私は英語教員としての発表活動も行っていて、震災直後の2年間で50箇所、土日を使って北海道から沖縄までいろいろな所で発表をしてきましたが、その中では必ずこの「ふるさと」の話題を取り上げていました。その材料を使って、学校でもおそらく3月前にやったんじゃないかなと思います。

――その全国各地での発表活動は、どのような経緯や思いで始められたのですか？

松本　もともと英語教員の学習会の団体がありまして、震災前から発表者として活動をしていました。そこでは英語教育・指導について話をするだけでしたが、震災によって家族が東京に住むようになったことをきっかけに、事務局の人から「東京にいれば、土曜の朝に羽田空港を出て、いろいろ回って、日曜の夜に帰ってこられるよね」と話がありました。避難している身ではありましたが、福島にいるよりも地理的にいろいろなところに行けるようになったので、余計に派遣していただいたといいますか。

　その活動の中、姫路で、ある教頭先生から「あなたは震災を経験しているのだから、震災のことをしっかり伝える責任があるんだよ」と言われました。

それからは、意識していろんな人にこういう話をするようになりました。今まで鹿児島の中学生に話をする機会もありましたし、中学生を含めてこういう話は伝えなくてはという気持ちでいます。

――そういったお話を各所でされる時、大事にされているメッセージはどんなことですか？

松本　子ども達が対象の場合だと、「誰かと別れる時には、その別れを大切にしなくちゃ」ということです。朝、お母さんと喧嘩したままで学校に来ちゃったとか。友達と喧嘩したまま学校から帰ったという時のことですね。あの震災の時も、もう会えない状況になってしまった人もいるんだよねという話を、子ども達相手にはいろんなところでしています。

　あとは「今、ここ」ということを、どこでも伝えていますね。私も単身赴任とか他の県で働くなんて、今までは「やれ」と言われても「やだ」と言っていた方なのですけども（笑）。流れ流れてここまできたので、「今いる場所で何ができるかを考えよう」と、子ども達にも先生方にも、自分の経験として伝えています。

震災で学んだことは、「教育に、地域は関係ない」ということ

――この震災でのいろいろな経験を通して、松本先生が得たものは何でしょうか？

松本　「教育に、地域は関係ないな」と思いましたね。教育に懸ける思いがあれば、教員としては多分どこでもやっていけるんじゃないかと思いました。

　最初に勤めた学校で少し大変な思いはしましたが（笑）、その時の経験や思いがあるからこそ、騎西中学校でいろいろな子達と問題にぶつかっても、なんとかやってこられたんだと思います。

　英語の授業にしても、指導の仕方がちゃんとしていれば、別に埼玉に行っても授業が変わるわけではないので。授業で子ども達と信頼関係を作れば、子ども達はどんどん接してくれるようになるというか。それがわかったので、教育に都道府県の壁はないと思いました。

――今回、いろいろな先生方にインタビューしたお話を冊子にまとめ、「これからの先生達」に見ていただきたいと考えています。だんだん震災の記憶がない世代が教員になってきているという部分もありますが、松本先生が若い先生方に伝えたいことは何でしょうか？

松本　若い先生に対しては、子ども達の後ろにあるもの――例えば家族や、育っている地域というものを考えて、子ども達に接して欲しいなと思いますね。単純に「その土地に建物を建てたら、それが学校」という訳ではなくて、やはりその地域の人達の願いや思いというものは確実にあります。

　私達が「学校はこういうものだ」と考えて、それを生徒に当てはめるのではなく、地域の課題を発見して貢献できるような子どもが育つ取り組みを考えないといけないと思います。学校を卒業した時に、地域や社会で必要とされる人間になってほしいという思いは、どんな先生も持っていると思いますので、外に出掛けていって、地域の人から話してもらうようなことを、どんどんやって欲しいですね。

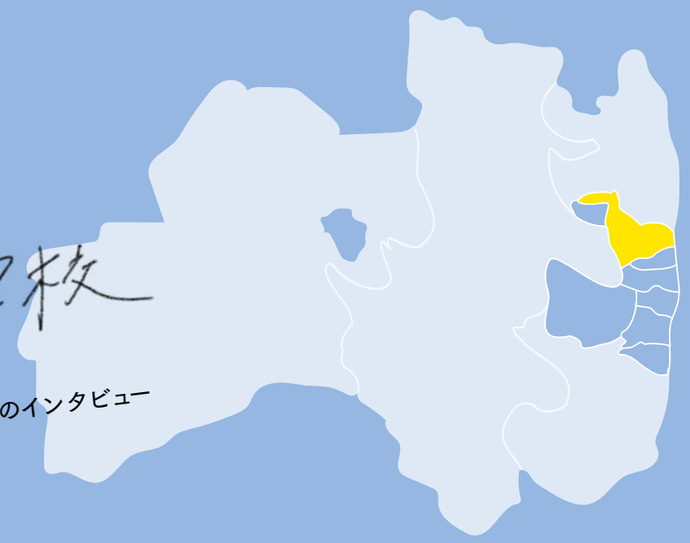
　地域連携とよく言われていますが、私の若い頃にはそういった部分に目は向けていませんでした。今は、地域にも目を向けていろんな事業を進めていくと、今まで見えなかったものが見えてくるかなとは思います。

2021年8月20日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

浪江町

Namie-machi

浪江町は浜通り地方、双葉郡の最北端に位置し、南相馬市、飯舘村、川俣町、二本松市、田村市、葛尾村、双葉町、大熊町に隣接している。2011年３月時には 21434 人が暮らし、町内に浪江小学校、津島小学校、幾世橋小学校、請戸小学校、大堀小学校、苅野小学校、浪江東中学校、津島中学校、浪江中学校が立地していた。震災と原発事故以降は、2011年８月に避難先の二本松市にて浪江小学校と浪江中学校が再開し、2016 年４月に津島小学校が再開。2018 年４月には、町内で新たになみえ創成小学校・中学校が開校した。2022 年２月時の住民登録者数は 16163 人、町内居住者数は 1811 人。



起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビュー

浪江町

門馬 貞 先生

もんま・ただし

南相馬市原町区出身、小学校教頭。2011年３月の震災発生時は浪江町立浪江小学校に勤務。2021年度インタビュー時は、大熊町立大野小学校・熊町小学校勤務。趣味はＰＣ、読書、スキー。

門馬貞先生は震災当時、浪江町立浪江小学校１年生の担任でした。原発からの避難後には、自分で当面の勤務先を探すよう町から指示されるなど、先生達は困難な状況で過ごしました。その後、兼務先だった喜多方市の学校勤務を経て、大熊町の熊野小学校で 10 年勤めた先生は、「自分は震災に育ててもらった」と振り返りながら、今はその経験を糧に子ども達と未来を考える学習を重ねています。今、熊野小で取り組んでいる「未来デザイン」をテーマにした総合学習についても、お話を伺いました。

原発からの避難、一度目は失敗　家族とともに知り合いを頼った

── まずは 2011 年３月 11 日に、何をしていたか教えてください。

門馬　双葉郡浪江町立浪江小学校で、１年２組の担任をしていました。１年生は１クラス 25 人で、３クラスありました。子どもの数は、学校全体で 600人くらいだったと思います。地震が起きた時間にはほとんどの児童達は下校させていましたが、うちのクラスには児童クラブで残っている子どもが一人いました。その日はその子を児童クラブにはやらずに、教室で漢字の勉強等を１対１で見ていました。

突然、とてつもない大きな揺れが来たので、すぐその子を机の下に潜らせました。私は机を外側から押さえて。そうして、ものすごく横にシェイクされるような揺れがあり、揺れがある程度収まってハッと気がついたら、私達は机ごと、教室の中を３、４メートルくらい移動させられていました。

その後も余震がひっきりなしに続いていたので、何回か教室の中で様子を見ながら、隣の教室にいた１年３組の先生と、「どこに避難したらいいだろうか」、「体育館に行く？　校庭に出る？」という相談をしました。１年

生の教室と２年生教室だけ別棟で、ここもいつ崩れるか分からない程の揺れだったので、とりあえずすぐ近くの体育館に避難しました。そうしたら校庭の方に避難する高学年の子達も見えたので、私達も子どもを連れて校庭に逃げました。

── 浪江小は、海岸からの距離はどれくらいでしたか？　津波の心配はなかったのでしょうか。

門馬　海岸からの距離は正確には測っていませんが、車で海まで行こうとしたら 10 分、15 分はかかるかなというくらいです。普段だったら津波など心配しなくてもいい距離でした。

地震があったその時には津波のことなど全く頭になかったのですが、子ども達が校庭に避難した後、あまりにも寒かったので、今度は３階の多目的室に移動したのです。そうしたら、その頃からだんだん町から学校に避難してくる人が出てきて、「津波がそこまで来ているぞ」という話をされて驚きました。「浪江東小学校の校庭まで、津波が来たって言ってたぞ」という話も聞いたのですが、浪江東からうち の学校までは１キロくらいです。「じゃあ本当に来るかもしれない」ということで、一番安全そうな３階に避難して、外を見ていました。あとはテレビをつけていましたね。放送は地震後から一切使えませんでしたが、電気はついていました。

最終的に、津波は浪江小までは結局届きませんでした。後から聞いた話によると、浪江の中では、浪江東小を少々かすめたくらいの津波が一番近かったようです。

── その後、学校では、どのくらいの時間を過ごしたのでしょうか？　ご自宅には帰れましたか？

門馬　学校には、夜の７時頃までいました。その後は「家族の安否確認のために、一回帰っていいよ」と言われたので、原町の自宅に戻りました。道路がものすごくグチャグチャになっていたので、いつも通っていた道が通れなくて、段差もできたりして。だいぶ遠回りして、いつもの倍以上の時間をかけて帰りました。幸い家は無事でした。

それで、本当はその夜、「家族の安否を確認したら、夜のうちにまた学校に戻ってきてほしい」と言われていたのです。そのため学校に戻ろうと夜９時頃に家を出発したのですが、原町から浪江に行く時にいつも通っている小高の道が、あるところを境に全部真っ暗になっていました。街灯も全部消えていて、進もうとしたものの違和感を感じて。「これ以上進むのはまずいな」と判断して、引き返して家に戻りました。後から考えれば、その通ろうとした所に実は津波が来ていて、それで全部電気関係が消えて真っ暗だったのでしょう。ただ、道路そのものはあまり損傷を受けていませんでした。なんとか通って一部迂回しながら、翌朝は７時頃に浪江小に着きました。

浪江小に着いたら「原発の10キロ圏内だから避難を」という話になっていて、今度は車のない先生方を乗せて、津島という山の方に向かうことになりました。普通なら 20 ～ 30 分の距離でしたが、その時の渋滞は酷かったですね。４～６時間くらいかかりました。１センチくらいずつしか動かない大渋滞で、浪江の街中から津島のだいぶ登りきった所までずっと続いていました。

結局、津島の小学校と中学校はもういっぱいで、たしか津島の高校に車を停められるところがあったので、そこで乗せている先生方を下ろしました。夕方になっていたと思います。ようやく一段落がついたので、「あ、もしかしたら家に帰れるかな」と思って、私は原町の自宅にいったん帰ることにしました。避難する側の車線はすごく混んでいましたが、逆は空いていたのです―っという感じで帰れました。

── その日は、そのまま原町のご自宅で過ごしたのですか？

門馬　はい。「しばらくは浪江小に立ち入りができないから、連絡するまで学校に来ることは考えなくていい」と連絡があったので、そのまま家で過ごしました。とは言っても、原発が爆発した時でしたから、家族で避難を試みました。

まず一回目は失敗避難だったのですが、白石に向かって。義理の弟が白石の奥様と結婚されていたので、とりあえずそのご実家を頼って、車２台で２家族で行きました。ところが、白石は原町よりもずっとダメージが酷くて、中通りの方がすごいことになっていました。電気も水も来ていなくて、皆が体育館に避難していました。トイレも酷い状態でしたので、「これは原町に戻った方がマシだな」と。一晩だけ駐車場かどこかに停めて、白石で過ごしましたが、翌朝には帰ってきました。

── ガソリンは、大丈夫でしたか？

門馬　大丈夫でした。今から考えると無駄に消費したなと思うのですが、あの時は皆が必死だったので、「原発が爆発したから、ここにはいられない」と逃げたものの、結局は原町に戻ることになってしまいました。それで今度は、妻の親戚のいる鏡石に行きました。鏡石もやはり酷かったのですが、親戚の家に一泊させてもらいました。ただ、そこにも何泊もできるような状態ではありませんでしたので、次は妻の知り合いを頼って、会津坂下町に避難しました。その時は、私達家族４人と私の母が一緒に車に乗って。そして妻のお父さんとお母さんが、弟の車で一緒に。３家族が一緒に避難して、しばらくは会津坂下のビジネスホテルに滞在してました。それで、その時からご縁があって、今までずっと会津坂下に住んでいます。

── 避難をしている間には、何か学校の業務はしていましたか？

門馬　いろいろ連絡も繋がらなくなっていたので、とりあえず最初の一週間くらいは、連絡があるまでこちらからも連絡をしないようにしていました。そもそも連絡をしようにも、学校に人がいないので繋がりませんでしたしね。

そして、ようやく学校から連絡が来て、「避難している子ども達の消息を、できるだけ調べてくれ」と言われました。皆が避難していて、自分も避難している状態で、消息を調べるなんて普通はできないですよね。他の先生達もなかなか連絡が取れずに苦戦していました。連絡が取れたと思ったら、遠い子は四国に行っていたし、他県にも大勢行っていました。

先生達も被災者という立場
被災地の学校が再開するまでの紆余曲折

── その後、学校が再開するまでに、どのような道のりがありましたか？

門馬　まず「４月１日、二本松東和町の木幡第二小学校に、教員は集まりなさい」と連絡がありました。浪江町の職員が全員集まったところで、たしか教育長から言われたのが、「とりあえずあなた達が仕事する場所は立ち入り禁止で入れなくなった。だから、仕事する場所は、当面の間、自分達で見つけなさい」ということでした。

その時は大変でした。木幡二小が交通の便のいいところにあったらよかったのですが、実際には山の中にある廃校になった学校で、当時は携帯も入らないような場所でした。電話する時は車で下まで降りていって、東和町の街中まで行って電話していましたね。それで、探しなさいとは言われたものの、先生方も被災している状態でしたからね。浪江町に住んでいる方や、双葉や大熊、富岡に住んでいる方は、皆さんがもう自分の家に入れない状態でした。家がなくなってしまった先生方からしたら、自分も被災者なので、家族の進学のことや住居のこと、そういった色々な手配や手続きでいっぱいいっぱいでしたよね。

私はたまたま会津坂下町に避難していたので、そういう場所から少し離れていました。会津はもう次の週から授業が再開しましたから、ダメージが比較的少なかったのです。そして自分で仕事先を見つけなくてはいけないという話を家に持ち帰ったら、私達が避難する時に声をかけてくださった会津坂下町の妻の友人が、自分が教員をしている学校の校長から坂下町の教育長に話を繋いでくださって、「そういうことで避難しているのだったら、しばらく坂下町の小学校に勤務していいよ」と言ってくださいました。

それで私は、４月は当時の坂下小学校に週１回、今は閉校してしまった坂下町立若宮小学校という少し小さな学校に週２回、残りの２回は木幡二小に通いました。木幡二小に２回というのは決まっていて、浪江町の全職員が情報交換等のために週に２回は木幡二小に詰めるようになっていました。

── 移動がかなり忙しいですね。泊まったりはしなかったのですか？

門馬　毎日通いました。高速を使って、毎日が大移動です。何が大変って、木幡二小に来る２回が一番大変でしたけれど。その頃にはアパートが見つかったので、４月からは小さくてボロいながらもアパートで過ごせるようになりました。

ただ、4月の勤務は酷かったですね。出勤簿を自分で作って、校長先生の所に行って、「今日は勤務したので、ハンコをください」と言って。毎回、今日はどこどこ……とハンコを押してもらって。それを毎回木幡に行った時に浪江小の事務の先生に見せて、「こんな感じで働きました」と報

告をしました。

── 木幡二小では、どのような仕事をしていましたか？

門馬　支援物資が全国からどんどん届くようになってからは、その支援物資の運搬や封開け作業のお手伝いをしたり。あとは、先生方の安否確認や所在地をまとめたり、子ども達の所在確認ということで、兄弟関係も沢山いますので、その辺の情報交換をしていましたね。

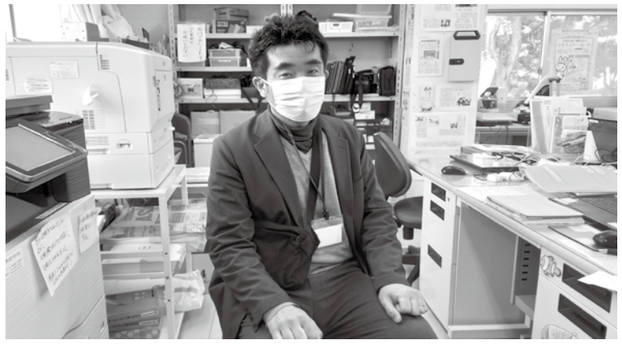
　そんなことを４月いっぱいやっていましたが、ある時、私が木幡二小にいなかった日に、「浪江小学校の職員の中で、５月からのこの兼務校を割り振ってください」と言われた、ものすごい日があったそうです。その中にはたまたま２つくらい会津の学校があって、私ともう１人会津に避難している先生に、「この人達は会津に行っているんだから、会津に」と割り振ってくれました。そうして喜多方市の松山小学校に兼務させてもらうことになりましたが、実は初任が喜多方だったので、私にとって喜多方は勝手知る場所でした。少し、良かったなと思いました。

　それから、私の場合、当初は兼務という形だったはずが、５月から正式にその松山小に勤めることになりました。その当時、４年生の人数がいっぱいで、手のかかるお子さんがいたりもして大変だったためです。だからその学年は本当は１クラスなのだけれど２学級扱いにして、ベテランの先生と一緒に半分ずつ見ましょうということになりました。A 組、B 組という風に分けて指導して、たまに入れ替えてという感じで。

── その頃には、喜多方では何事もなかったように授業を行って、一方で数十キロ移動すれば、避難物資をまとめる仕事をしていたということですね。日ごとに仕事がガラリと変わりましたが、そのギャップはどうやって整理していたのでしょうか？

門馬　整理はできていなかったと思うのですが、やはり５月からは、教壇に立つことで気が紛れたというか。普段の私達の職務をすることで、震災に関わることから一旦離れられたという感じでしたね。ただ、その 11 ヶ月間は、妻が南相馬の石神第一小学校というところに勤務していて、石神第一小は避難しなかったので、妻は私や子どもとは離ればなれの生活でした。あの当時、原町には放射線量が 0.5 くらいの場所がいくつかあったので、幼稚園生だった双子の子どもは私と一緒に暮らしました。

　結局、喜多方の松山小には 2011 年の５月から翌年３月まで 11 ヶ月間勤務しましたが、長く感じましたね、その間に色々なことがあったので。松山小の勤務にまるっきり専念するわけにもいかないし、子ども２人を母親と会わせたかったので、車に乗せて週末に原町まで行って日曜日の夜に戻ってくるということをしていました。妻の方が会津に来ることもありましたが、本当に狭くてボロいところだったので、それよりは原町に行った方がまだのびのびと生活できるかなと。また、津波で自分に近い親戚が亡くなったりもしたのでその捜索や葬儀もあったりと、色々大変だったとは思いますね。



総合学習で取り上げた、放射線教育の難しさ

── 2011 年９月に浪江町の学校も二本松で再開しましたが、先生はそこには戻らずそのまま松山小で 2012 年３月まで勤務されて、その後、会津若松市で再開した大熊町立熊野小学校に、４月から赴任されたのですね。熊野小は最初、どのような印象でしたか？

門馬　大熊野小に内示が出てから、「どんな学校なんだろう」と思って見に来たことがあります。見つからないうちにさっと帰りましたけれどね。私が見に来た時には、廃校になっていた旧河東第三小学校の校舎を借り受けて４月から熊野小が再開して以来、約１１ヶ月経っていましたので、ある程度、今のような形になっていました。初めの頃は、校庭とか花壇もものすごい状態だったと聞いてます。

　私はそこから 10 年間、ずっと熊野小で教務をしていましたが、教務を持ちながら担任というのも２回やりました。教務の仕事について言えば、調整が大変でした。当初は今よりも人数が多かったので、何をやるにも場所が足りない。今でこそ家庭科室、図工室があるけれど、そういうのは一切ないので、全部教室でやるしかない。家庭科は設備がないので、携帯用のガスとコンロを使ったりとか。

　それから、最初の頃はやはり自分が情緒不安定でしたね。普段はなんてことないのですが、儀式的行事がダメでした。最初の５年くらいはずっと、校歌を歌うような時期になってくると、歌えないんですよ。なんだかグッと詰まってしまって。なんでかなとある時考えてみたら、自分が浪江小学校で１、２、３年とずっと担任をしてきて、一人ひとり可愛がってきた子ども達が、ちょうど卒業する年だったのです。それを見届けてあげられなかったというのが、とても悔しくて。浪江小はそのあと半年後、夏に二本松かどこかで「卒業証書を送る会」をやりまして、その時は参加させてもらいました。でも、その時にも校歌が歌えなかったですね。皆もそうでした。

── 2012 年当初に熊野小にいた子達に対しては、どのような震災学習、地域学習をしましたか？

門馬　最初の５年くらいは、私と同じく、子ども達もものすごく不安定でした。特に高学年は震災の話を持ち出すことが半ばタブーのような状態で、震災の話より、こちらでの生活やこれから先の話をした方がいいという雰囲気でした。中にはパニックというか、気持ちがグーンと沈んでしまう子もいたので、本当に気を遣いましたね。そこだけは先生方もピリピリしていたし、そういう話になると「ちょっと」と止める時もありました。

　一方、その時の町の意向で、私が来た年から、「放射線教育を、総合学習で取り上げよう」ということになりました。小学校の子どもに放射線教育は難しい、訳が分からないということで、先生方から渋い顔をされましたが、先生方も一緒に勉強しましょうと。本来、総合学習では、色々な体験をすることや学校の外に出かけることが必要なのです。でも、出かけるわけにはいかない。できることと言ったら、仮説を立てたり提言をすることくらいしかないのですが、町の指導を受けながら、放射線教育を何年かやりました。

　それからしばらくして、双葉郡で「ふるさと創造学」が始まりました。それで、「うちの学校では放射線教育をやっているから、放射線教育で学んだことをふるさと創造学で発表するんだ」ということになり、「放射線教育とふるさと創造学」という名前で何年か行いましたけれど、それで放射線教育は徐々にフェードアウトしました。難しいので、なかなか扱い切れないところもありましたね。ベクレルとかシーベルトは大変なので、その辺は「なんで、ここにいるのか」というきっかけ作りにして、あとは去年まで、大熊町の郷土のことを色々取り上げるようにしていました。

── 今年からは、内容が変わったのですか？

門馬　はい。新しい学校を建設していくという目標があり、未来を向いていきましょうということで、今は小中学校が一緒になって、「未来デザイン」という総合学習に取り組んでいます。子ども達が「幸せを求めて、何ができるのか」を考えていく学習です。例えば食、空、絵、音楽などについて。個々人ではなく全体で取り組み、色々なものが並行して行われていく形です。10 月には「未来デザインウィーク」を設定して、一週間色々なワークショップを入れ、家の方にもどんどん来てもらって。「毎日、未来デザインの勉強を楽しみましょう」という一週間を開催しました。

　こういう形で開催することになったのは、もともと 「文化祭どうするよ」と

いう話が上がっていたこともあります。子ども達も中学生が３人しかいなかったので、３人だけでやるには文化祭は苦しいです。それで、学習発表会と合体させようかという話もしてたのですが、「そもそも、そういう学習発表会のために劇の練習をするのも、違うよね」と。私達が目指す教育はもっと違う形だよねというところから、「そういったウィークにしようか」という話になりました。「何もやらないのも寂しい感じがするから、じゃあ長くして、一週間やろう」と。そしてそのウィークだけではなく、週に１回とか、月に２、３回くらい、色々なワークショップが入って、色々な幸せ追求が続いているというところですね。

── 先生も生徒も、準備がとても大変そうですね。

門馬　大変ですけれど、その一つひとつのテーマが、「めっちゃワクワク」するんですよ。この間、「空」を扱った時には、子ども達が飛行場に行って、飛行機を皆で作る体験をして、機体の下に自分達が描いた絵を貼って。午後になったら、その飛行機でパイロットに飛んでもらう、というような活動をしました。

　また、「食」を扱った時には、子ども達とお弁当を考えて、喜多方の子ども達とも協力して、そのお弁当を売るとか。今月も24日に福島県庁まで売りに出掛けます。知事と教育長にも食べていただく予定です。

未来のことに目が行くようになったことが、自分にとっての「復興」

── 先生ご自身にとって、「復興」とは何でしょうか？

門馬　人に、「復興」ってあるのでしょうか。気持ちの持ちようですかね。自分の中で、今まで過去や震災のことしか見られなかったところから、「未来のことに目が行くようになった」という瞬間が、復興なのだと思います。この学校で、ずっと長く大熊町に携わっている中で、家がなくなった町の子ども達を教えている中で、「自分がそんな後ろ向きな気持ちでいちゃいけないな」ということを感じてきました。色々な事情があって、どうしても後ろ向きな気持ちになってしまって、なかなか前を向けない先生達の代わりに、「少しでも自分が早めに切り替えて前に進もう」と。それで言ったら、自分はもう復興していると思いますけれど、いつ復興したかと聞かれると難しいですね。

── 子ども達や、これからの若い先生達に対して、先生の体験してきたことをどのように伝えていきたいですか？

門馬　最終的に、自分が経験してきた中で伝えたいのは、「気持ちの切り替え方」ですかね。どんなにどん底となったとしても、ずっとどん底でいることはないし、いつかはハッピーになるということを伝えたいです。私自身、本当に震災に育ててもらったなという気持ちがあります。自分が震災に遭った時点で浪江小学校の１年生の担任だった頃と今とを比べると、大熊町で色々なことを教えていただいて、自分も成長させてもらいました。震災そのものも、いい糧にはなってると思いますね。何でもプラスに考えていきたいです。

2021年12月16日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也、筑波匡介）

浪江町
荒 寿子 先生
あら・としこ

南相馬市小高区出身、中学校教諭。教科は音楽。2011年３月の震災発生時は浪江町立浪江中学校に勤務。2021年度インタビュー時は、飯舘村立いいたて希望の里学園勤務。趣味はミュージカル観賞。

荒寿子先生は震災時、浪江中学校２年生の学年主任でした。原発避難により、浪江町の学校は元の校舎での再開が叶わず、４月から二本松に学校を集約して業務を再開。その時、先生は「何かをしなくては」という思いに駆られて、「学年だより」を作り始めます。それは全国各地に散らばった生徒達のもとへ届けられ、温かい思いを繋ぎながら、およそ１年に渡って作成・発信されました。「離れていても、130人全員が自分の生徒」という信念で、生徒達を気にかけ続けた先生。先生が本当の意味で、「教え子たちは卒業した、巣立ったんだ」と思えたのは、何年も後のことでした。

避難の夜、連なる車のヘッドライトに不安が募った

── まずは2011年３月11日に、どこで何をしていたか教えてください。

荒　その日は卒業式でした。当時、浪江中学校２年生の学年主任と吹奏楽部の顧問をしていましたが、吹奏楽部の子ども達に「明日は大会の課題曲の練習をするから」という話をして帰したところで、地震が発生しました。職員室でひと休みをした後、その課題曲の楽譜を印刷していた時です。机の下に潜りましたが、多くの物が落ちてきました。いったん収まったと思って中庭に行きましたが、余震が続くうちに「ここにいては危険だ」と思い、校庭に出ました。

　そこではたまたま近くにあった校長先生の車のテレビが見え、「津波が」という情報が流れてきたのが印象に残っています。そのうち、会議室に集合がかかりましたが、そこで、「ペアになって生徒の家庭を訪問し、安否確認をしてきてください」という指示があったので、学校に残って校内を確認する先生方と、外に出て生徒の安否を確認する先生方に分かれました。

　私ともう１人の先生は、大堀地区の方に行って、生徒に会って、「あ

なたや家族は大丈夫？」「お家も大丈夫？」と声かけをして回りました。「この先は行けません」という地点まで行って戻ってきましたが、崩れている家を見たり、入れなかった所もあったりして、驚きましたね。

そして戻ってきた時には、体育館が避難所になっていました。そこには野球部の子ども達が手伝いに来ていて、いろんな物を運んでいて、すごいなと思いました。なにせ、体育館が卒業式のまんま。楽器もそこにあるし、椅子もあったり。それを子ども達が片づけている姿は、本当に印象的でした。どこかで声をかけてきたのか、先生が声をかけたのか、何があったのかよく分かりませんが、私達が体育館に着いた時には既にストーブや保健室の毛布が運ばれていました。

── 浪江中学校は、海からどのくらい離れていたのでしょうか？

荒　海からずいぶん離れているので、津波は全くありませんでした。その日も私達はまた会議室に集まりましたが、家庭のある先生方もいるということで、「帰っていい」という話になりました。私は小高だったので、自分の車は校庭に置いて、小高の先生と一緒に帰りました。やはり怖いし、どうなってるか分からないし。

── 原発が爆発した話はいつ頃、聞きましたか？

荒　12日の朝6時だったか、「浪江も避難しなさい」となりました。私も個人的に家族と避難しました。小高の区役所の避難所でおむすびをいっぱい作っていた頃に、何回目かの爆発の話を聞きました。文科省にいる従兄弟からも「爆発したから、避難しなさい」という話は聞いていて、一応私達がそこから離れたのが13日の夜だったかと思います。

── 避難はどういうルートで、どこに向かいましたか？

荒　「とりあえず避難を」と従兄弟から言われたこともあり、すぐに帰れると思ったのです。あさはかでしたよ。貴重品は持っていましたが、本当に2、3日で帰れると思っていたのでとりあえずの物を持って、車2台で、川俣を抜けて福島の方に行きました。その時のことで今でも忘れられないのが、車。夜だったので、ライトがすごく連なって。車のライトを見ているうちに、「これ、どうなっちゃうのかな」という怖さが募りました。

そうして福島市の妹のところに避難をさせてもらっているうち、「3月31日に、浪江の小中高の先生方はここに集まってください」という話があったので、私のアパートが決まる4月の頭までそちらにいました。

── 3月末に集まるまでには、学校や生徒達と連絡は取っていましたか？

荒　取りました。安否確認をしなさいという学校からの指示が学年主任にあったので、私から担任に連絡を入れて、全4クラスで130人くらいの確認をしました。担任の先生はクラスの生徒一人ひとりを確認して、私に結果を報告するというやりとりです。「全員、確認しました！」と連絡が来た時は、やはりもうほっとするしかないですよね。4人いた担任の先生のうち、女の先生が一人いたのですが、電話が来た時にはもう泣きながら。全員確認できたことを管理職の方に報告した時には、安心しました。そこからがまた大変ですけれどね。

学校だよりに込めた思い「離れていても、130人全員が自分の生徒」

── ではそこからの話ですが、4月に浪江町の学校が、二本松で集約したのですよね。

荒　4月1日、二本松の東和中学校に招集され、今後の勤務方針についての話があり、廃校になった学校（木幡第二小学校）で仕事をすることになりました。4月からの仕事は安否確認と、卒業した3年生の進学先へ送る書類の準備です。その他にも「何かせねばいけない」と思って、学年だよりを出したいと校長先生にお願いして了解を得て、私が第1号を発行したのも4月でした。

5月には勤務先が発令され、他の二人の先生と一緒に、東和中学校で兼務することになりました。私は音楽の教員だったので音楽の授業にも兼務で入り、授業をさせていただいたり。あとは、授業が空いている時に避難所めぐりをしていましたね。

── 学年だよりというのは、3月11日当時に受け持っていた2年生向け、つまり4月からの3年生向けのものですよね。どのような内容でしたか？

荒　まず第1号としては、その時の担任の先生と、卒業式で送辞を読んだ次期生徒会長に原稿を書いてもらいました。住所確認は担任の先生にしてもらっていたので、北は青森、南は沖縄。全員に郵送しました。届かなくて戻ってきてしまったこともなかったですね。

各地の子ども達に届いた頃、今度は生徒会長にメールで色々なメッセージが入りました。それで生徒会長が、「こんなメッセージが入っています」と私に教えてくれて。それをどうしても共有したかったので、5月には第2号を出しました。

その後は、もうすぐ2学期が始まるという8月と、進路が決まる時期の9月に。8月25日に針道で浪江中が開校したので、そのお知らせも兼ねながら出しました。最後は2012年の3月に、卒業に合わせて記念文集という形で送って、締めくくりましたね。

── 先生は、どのような思いで学年だよりに取り組んでいたのですか？

荒　「思いを共有したいな」という気持ちと、「何かできないかな」という気持ちです。彼らには2年間の思い出はあっても、ここでの最後の学年の思い出は何もないですよね。それぞれの学校で文集を作ったり、卒業アルバムを購入したりというのはあっても。3年目に色々な所に行った子ども達は、そこで楽しい思い出を作れたとは思いますが、やはり「ここでの2年間の思い出を、何かの力にしてもらえればな」と思っていました。

文章の他にも、学校に残っているデータの中から写真を集めたり、2年生の時に文化祭でやった劇や合唱をDVDにして。それらをセットにして送りました。

── 学年だよりや文集、写真やDVDのセットについて、受け取った生徒達から何か反応はありましたか？

荒　特にそういうものはなかったです。でもなんでしょう。それを期待してやっているわけではないので。彼らが大きくなってふと読みたくなった時、読み返してみようかなと思った時に、「自分はあの時そうだったんだ」と振り返ることができる「思い出みたいなもの」であってほしかった。特にありがとうございましたとか感謝というのは、要りませんでした。何かになればなと思っていました。

── 先ほど、5月の学年だよりには、生徒からのコメントを掲載したとありましたが、どのような内容でしたか？

荒　掲載したのは、5月と8月かなと思います。コメントが沢山集まったのは、生徒会長の子が何かしてくれたからだと思いますが、それを最近読んだら、「みんなで頑張ろうよ」というコメントが沢山ありまして。この子たちは、14歳・15歳の時に皆で励まし合っていたんですよね。絶対に浪江に戻ろうよとか、会おうよというコメントがありました。辛いとか寂しいとかという言葉がなかったとは言えませんが、「みんな、頑張ろうよ！」というコメントが沢山あって、すごいなと思いました。

── その生徒会長さんを含めて、今でも連絡を取るような教え子はいますか？

荒　その生徒会長の子は、今は南相馬市の市役所に勤めています。たまたま仕事の用事があって連絡を取りましたが、その時には元気ですと話していました。彼女は文集に「人の役に立つ仕事につきたい」、「医療関係か福祉・保育関係のことをやりたい」と書いていたので、目標を達成したのかなと思います。

彼女は、浪江中が針道に仮設校舎を設置した時に、浪江に戻ってきた子です。開校した学校に戻ってきた子は数少ないですけれど、その子達も色々考えてのことだったんじゃないかなと思います。そこでは私は浪江中学校の職員として、戻ってきた子ども達との1年間でしたが、でも私の中ではやはり130人全員が生徒でした。浪江中で卒業できなくても、浪江の子。その子ども達に繋げてくれたのが、彼女だったと思います。

あの頃は、子どももそうですけれど、大人もすごく心を痛めていた時期でした。あの春は、桜を見ても綺麗とは感じませんでしたからね。やっと彼らが私の中から卒業したんだと思ったのが、彼らの成人式。普通だったら卒業させて、中学から巣立つので区切りになります。でも、区切れなかったですね。だからやっと成人式で、「あぁ、卒業させた」と思いました。

仮設校舎での初年度、虚しさの中でも「子ども達がいたから」

── 2011年の９月に浪江中が針道の仮設校舎で再開した時は、どのような気持ちでしたか？

荒　浪江中学校という名前の学校があるという安心感はありました。それに、そこに通うために転校してきた子達は、4月から8月までの間どこか中学校にいて、転校してきたわけですよね。だから、「私達もここで踏ん張らなきゃだめだな」というのはありました。

　でも私の中では、その子ども達だけではなくて、「他の学校にいる子達も、やっぱり自分の生徒だ」という気持ちをずっと引きずっていましたね。その中で、浪江中学校に転校してきて、一緒に時間を過ごせる子達への思いは、ひとしおだったと感じます。

── 仮設校舎になってから、先生の中で子ども達への接し方や指導のやり方、考え方に変化はありましたか？

荒　どうでしょうね。その時は、時間に追われていましたからね。子ども達がどうしているのかなということが、いつも頭の片隅にあっての日々でした。学校が辛いという話も聞こえてきましたし、その子達はまだ仮設住宅に住んでいたんですよね。体育館での生活は大体終えていたかなというくらいで。だからある子は、受験勉強をするのに机がないと言っていました。どうやって勉強しているのと聞いたら、部屋も狭いから台所で。本来なら自分の家にいて、そこに自分の部屋があって。そこでできたことが、できないんですよね。それを見て話を聞いてるから、浪江中で仕事をしつつも、虚しさしか感じられない一年でした。

　そして、私達は子どもあっての仕事なので、「それがなかったら自分はどうなってたか」というのはあるかもしれません。教員の仕事というのは生徒との関わりがあり、教える・一緒に学ぶということが重要です。でも、もしそれがなかったら、あの時私はどうなってたかなと思います。あの一年間は、「子ども達がいたからこそ頑張れた」というのはあるかもしれません。

── 荒先生は、仮設の浪江中には何年間、勤務されていましたか？やはり年度を経るごとに、子ども達の様子は変わっていったのでしょうか。

荒　針道の仮設校舎には、2015年まで４年間勤務しました。私がいた頃については、「そんなに簡単に、子ども達って変わらない」と思います。私が感じる限りでは、その年々を子ども達は精一杯生きていた。学校生活おいて、色々なことに挑戦していたような感じはしますね。

── 震災や避難があったことで、例えば不登校になってしまったり、精神的に落ち込んでしまう子はいましたか？

荒　いましたね。転校で行ったり来たりした子や、荒れてしまった子がいました。「もし元の学校だったら。色々な部活で、先輩と後輩の関係の中で学んでいったら、こうではなかったかな」という子はいます。地震があったことに責任転換するわけではないですが、「普通の生活で普通の学校だったら、同じ学校生活を送っていたら、この子はもっと楽しく学校生活を送れたかな」とかは思います。ただ、その子たちも成人しているのでね。成人式に行った時は、皆元気にしていました。子どもって強いなとは思いますね。

── もともと浪江中では、１年生から３年生まで担任の先生は持ち上がりだったのでしょうか？

荒　持ち上がりでした。だから2011年度の３月の卒業式の前に、浪江中学校の卒業証書が欲しいという声が教育委員会に随分届いたそうなのです。親御さんたちというより、子ども達から。でも、それはできないことでした。管理職の人達も悩みますよね。

　そうしたら卒業式の日、何人かが「一緒に卒業式を迎えたい」と、それぞれの学校の制服を着て保護者席に列席したのです。「証書はもらえないけれども、浪江中学校の校歌が歌いたい」と。その光景が新聞に載った切り抜きを今でも持っていますが、何とも言えない感動を覚えました。そういう子達がいるだけでも、この学年を持ててよかったなと思います。皆が色々なところに行ったけれど、持ててよかったなというのは私の中にあります。

── 先程、震災が子ども達に与えた負の影響のようなものを聞かせていただきましたが、逆に「震災があったからこその、子ども達の成長」は３年間の中で見られましたか。

荒　中学のその３年間では、感じられませんでした。やはり中学生なので、そんなに簡単に全部を受け入れて、納得して生活するなんてありえません。ただ、彼らが卒業して高校に行き、成人式に来た時に、穏やかな表情でいる姿を見たら、私の方がボロボロと涙してしまうくらいでした。子ども達から「先生、先生、大丈夫だよ、よしよし」みたいな感じでやられて（笑）。二文字で「成長」と表現するのも変ですが、皆に会えた時、「子ども達はなんて大人になったんだろう」と思いました。中学校の時の色々な苦労とか、その後の苦労があって、今ここにいるのかなというのは感じましたね。

「自分たちが浪江のためにできること」を考えて実践、そして伝える学習

── 2012年度からは、中学校１年生として仮設に入学した子達を、荒先生も主任として担当されていますよね。仮設校舎での最初の入学生と向き合うにあたって、そこには気持ちの切り替えというものがありましたか？

荒　そういう気持ちでは接していました。ここからがスタートだということになるから、当たり前ですよね。先生方のメンバーも変わりますし。その中でふるさと学習というのがあったので、ふるさとのことを学び、（少々）中身の濃い「３年間のふるさと学習」をさせていただきました。

── ふるさと学習は、具体的にどのような内容でしたか？

荒　簡単にいうと、１年生の時は「地域を知る」ということで、針道と浪江を取り上げて、「今いるところ」と「いるべきところ」を調べたはずです。２年生の時は職場体験をしたので、その時は浪江で仕事をされていた人が二本松で開業しているような所を探したり、職場体験をさせたりしました。

　３年生の時は、「自分たちが浪江のためにできることは何か」というテーマで行いましたね。浪江で仕事をしていた人で今二本松にいる人のお話を聞いたり、仮設に行ってそこの人の話を聞いたり、あとは色々なお祭りに一緒に参加させてもらったり。それだけではなくて、「じゃあ自分たちができることは何か」と、一つ子ども達が考えたのが、「簡単に座ったままできる体操」でした。仮設にいると運動しないですよね。だから簡単に座ったままできる体操を、おじいちゃん･おばあちゃんでもできるようなものにして。美空ひばりさんの『川の流れのように』に合わせて。それも図式化して貼って、仮設に訪問してやって見せて、皆でやりましょうということもやったりして。仮設にいる人達や二本松で仕事をしている人に自分達も寄り添って、自分

達にできることはというテーマで進めましたが、すごく充実したものでした。

――震災前にも、総合学習はありましたよね。総合学習とは、全く違うものですか？

荒　違いますね。前の時は、大きなテーマがあったとしても、１人１研究でした。でも今回、浪江中学校で３年間やった取り組みは、個々のテーマであっても、全員が目的は同じ。自分達が浪江のためにできることは何か。寄り添うこと。デイサービスや仮設に行って、そこにいる方々と触れあったり。

あとは、「なみえ焼きそば」のB1グランプリが郡山であった時に、ぜひともこちらも参加させてくださいということを商工会議所にお願いして。皆でイベントに参加、お手伝いさせてもらったなんて経験もあります。その経験を踏まえて、感じたことを自分たちでまとめ、発表させてもらったりもしましたね。

――そういった経験は今、どのように役立っていますか？

荒　2015年４月に浪江中学校から飯館村立飯舘中学校（現在のいいたて希望の里学園）に赴任しました。私が飯館に来たときは、飯館中のふるさと学習は各学年で行っていて、中学１年生は伝統芸の田植踊り、２年生は紙芝居、３年生は味噌作りをやっていたのです。

それが少し変わって、縦割りになりました。飯館２年目の時に私が担当したのがふるさと学習のメディア班でした。メディア班の子ども達は劇、ドラマを作りました。飯館に戻るか・戻らないかという、ちょっとシリアスなテーマで。３年目、つまり縦割りになった２年目は、「自分たちで何かできないか」ということで、メディア班で映像を作りました。４つくらいのグループに分れて、飯館のコマーシャル、それから飯館のことをミュージカル風に表現したもの。飯館のことを知ってもらうため・伝えるためのものを作りました。

――最後に、荒先生の教員生活の中で、震災とはどういうものでしたか？

荒　教師として「やるべきこと」や「生徒との関わり」について、より一層考えを深めていくきっかけになりました。震災後、私にとっては日々の生活を、生徒達と歩みを共にしていく中で「できることは何か？」「何をどのように導き、今を乗り越えていくか」。また、「生きていくために大切なことは」を、教職に就く立場から考えるようになりました。

その時々に関わった多くの人との出会いは、私自身の教職という仕事の幅を広げ、それまで以上に生徒に寄り添い、一緒に考えていくというスタンスになりました。だからこそ、言葉の重みを感じ、「この時だから伝えるべきこと」を大切にしています。

長い教員生活において、私にとって「生徒」とは、私自身を人として成長に繋げてくれる存在だったと思います。

2021年12月14日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

葛尾村

Katsurao-mura

葛尾村は浜通り地方の内陸部に位置し、田村市、二本松市、浪江町に隣接している。2011年３月時には1567人が暮らし、村内に葛尾小学校と葛尾中学校が立地していた。震災と原発事故以降は、会津坂下町や柳津町、三春町などへの避難を経て、2013年４月に避難先の三春町において小中学校が再開。2018年４月には、村内での教育活動を再開した。2022年２月時の住民登録者数は1332人、町内居住者数は448人。

起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビュー

葛尾村

日下雄一郎 先生

くさか・ゆういちろう

新地町出身、小学校教頭。2011年3月の震災発生時は南相馬市立福浦小学校に勤務。2011年8月から葛尾町立葛尾小学校に勤務。2021年度インタビュー時は、双葉町立双葉北小学校勤務。趣味はマラソン。

日下雄一郎先生は震災当時、南相馬市立福浦小学校の教頭でした。3月11日はご家族の卒業式のために休暇を取っていましたが、地震発生後には家族を自宅に残して、急いで小学校に戻ります。津波の被害を受け、泥だらけになった住民が小学校に避難してきた翌日、原発が爆発。避難を余儀なくされ、福浦を離れることになりました。仮設校舎での学校再開までには多くの先生達が、県からの兼務辞令に困惑したようです。管理職という立場で迎えた震災と、その後の仮設校舎での学校再開。日下先生が歩んだ10年間の思いを辿りました。

津波被害を受けた福浦 夜に避難してきた地域の方達の姿は、上半身まで泥だらけだった

――まずは2011年3月11日に所属していた学校と、当日何をしていたかについて教えてください。

日下　当時は、南相馬市の福浦小学校で教頭をしていました。3月11日はちょうど長女の中学校の卒業式だったので、年休を取って、双葉郡広野町の広野中学校の卒業式に列席していました。私達の自宅は富岡町にありましたが、私の勤務先の都合と、長女の進学のタイミングの兼ね合いで、長女だけは家内の実家のある広野町の中学校に進学させていました。

　地震が起きたのは、卒業式が終わって、広野駅の駅前で家内とお菓子を買っていた時です。その頃は結構大きな車に乗っていたのですが、駐車場に停めていたその車が20センチぐらい宙に浮いてるのを見て、びっくりしました。また同時に、何もできないなと思いました。そして、次女が通っている富岡町の富岡第二小学校に向かいましたが、その道中、県道35号線という山側の道を戻っていった時、長女が海の方を見て、「海が黄色くなってる」と言っていたことを憶えています。今思えば、それが津波だったのかなと思います。

　小学校に次女を迎えに行った後は、自宅に家内と娘達を降ろして、「家族3人で富岡にいなさい」と話しました。その時には、津波には全く気づかなくて。とりあえず、大きな地震があったので、私は勤務先の福浦小に戻ることだけを考えていました。それで、さらに35線を走りに走って、双葉を抜け、小高にある福浦小まで何とかたどり着きました。学校に着いたら、もう校庭に地域の人々が集まって、地震等による被害について話し合っていました。

――福浦小が、地域の避難所となっていたのですね。

日下　当時、福浦小の児童は100名程度でしたが、私が福浦小に着いた時には子ども達もまだ学校にいましたし、保護者もほぼ全員いました。思い思いに、焚き火などをしていたような記憶があります。

　私はとりあえず職員室に戻って、現場確認を始めました。校舎は耐震工事直後で新しかったですが、停電で電気もなかったので、理科主任がロウソクを出してきて、灯しているような状態でしたね。トイレの水も出ませんので、トイレの水のために、プールからバケツリレーして、皆で運んだりもしました。それから、各教室は全て開放していましたので、それぞれのご家族で、2階・3階まで上がっていただいて。机はどけて、そこに雑魚寝するような形で、皆が休んでるような状態でした。

――福浦小の立地は、かなり海に近かったですよね。

日下　はい。「浦」とついているくらいですから、かつては水面より低かったような土地にありました。私は渋滞にはまりながらも、無我夢中でなんとか富岡町から福浦小まで戻ってくることができましたが、夜の9時、10時頃に集まってきた地域の方達の姿を見ると、上半身まで泥だらけになっていました。どこかに突っ込んだのかなというくらい。そういう方達を見て、「よく自分は無事にたどり着けたな」と思いましたが、実は私自身には全く津波の記憶はないのです。

　一夜明け、次の日に見たら、福浦小の周りが水浸しになっていたので、その時に「津波が来たのか」という実感が湧き上がりました。学校自体に津波の被害はなく、子どもを学校から帰すこともしませんでしたので、誰も亡くなったりはしませんでした。

――避難所となった福浦小では、どのような業務をしましたか？

日下　11日の夜は、炊き出しに行って来たのかな。おにぎりなどを貰ったのかなと思うのですが、あまり記憶がありません。12日の午前中には福浦小にも炊き出しが来て、おにぎりや味噌汁を配りました。配り終わってから、「原発が危ない。ここにいては駄目だ」という判断になって、原発からより遠い位置にある小高中学校に皆は避難を始めました。

　そして、残った私達が校庭のドラム缶などを片付けていた時です。直下型の地震みたいなものが、どーんと来ました。その時は「なんだろう」と思っていましたが、後で小高中に合流してからニュースで知らされたのは、原発の建屋の爆発だったらしいということでした。建屋が爆発を起こして、それが本当に地震、直下型でどーんと浮き上がるような形になっていたと。それで今度は、「小高にもいられないな」ということで、南相馬の石神第一小学校に避難をしました。そしてさらにそこから、原町第一小学校に移って、校長と寝泊まりをしました。

――富岡町のご家族とは、別々に避難したということですね。

日下　家族とはもう、そこから3日間くらいは離れ離れでしたね。家族はまず川内に逃げて、川内も安全なところじゃないとなって船引に逃げて、その後、東白川の方へ知人を頼って行ったようです。そして最終的には平田村の知人のところに戻ってきて会えました。実家の母や父も一緒でした。

――先生はご家族と合流するまではずっと、校長先生と行動を共にして避難していたのですね。

日下　そうですね。2、3日間は、原町一小で、校長先生と一緒に寝泊まりをしていました。原町一小は体育館が耐震工事でリニューアルしたばかりで、まだ全く使っていない状態だったのですが、いきなり避難所になってしまいました。

　避難している間は、色々なところに電話を掛けて子ども達の安否の確認をしていましたが、やはりなかな

か繋がらなかったですね。３月いっぱいは、そういった連絡のやりとりをしていました。

また、３月に実施するはずだった卒業式は、式としての形は取れませんでした。福浦小では、各家庭に卒業証書を送るというような形を取らせてもらいました。

県の辞令に混迷「居場所はない」と感じた

── では、４月からは、どのような業務をしていましたか？

日下　４月からは、残った子ども達と小学校を再開しました。本当に数えるくらいしか人数はいませんでしたが、同じように被害を受けた高平小・大甕小などの子ども達と南相馬の八沢小学校に集まって、一緒に学校生活を始めました。それこそ、家庭科室や階段の下を職員室にしながら、５つか６つくらいの学校が集まって。南相馬市にバスを手配していただいて、かき集めて来るような形でやっていましたね。

そして５月か６月頃には、私に辞令が出ました。元々は、内示で「4月から葛尾」と出てたのですが、このような事態ですから、すんなりはいきませんでした。それで私は、福浦地区から外れて、いわきに行きました。いわきの文化センターに詰めて、「いわきの学校で兼務をしている双葉郡の先生達が、今どんな状況か」を、管理職として見回ることとなりました。小学校にも中学校にも行って、今困ってることはないかとか聞いたり。相双から避難した子ども達を世話するのはもちろんその兼務の先生なのですが、８月までの約３ヶ月間は、「先生方にご苦労がないかどうか」というようなことを聞いて回ったりしましたね。

その時はまだ、家族が一緒にいることがままならない方もいましたから、「ご家族と一緒になれるといいね」と、声を掛けたりしていました。それから、いわき市内に来ている双葉郡の子ども達を見回るために、各学校を訪問していました。

── 実際に回ってみて、どうでしたか？

日下　正解というのがなくて、本当に混迷していた事態でした。未曾有のことだったので、教育委員会もどうやったらいいのか分からなくて、皆が手探りだったのではないかと思います。

混迷していたと言えば、この時の辞令に関してもそうでした。県から辞令を言い渡されたので、いわき市の教育委員会に行き、「私は、これこれこういう理由で、相双管内から送られてきた者です」と挨拶をしたら、「聞いていないです」と言われまして。それで行き場所がなくて、つらい思いをしました。「あなたの居場所はないですよ」と言われているような感じがしましたね。ただの行き違いだったのでしょうけれども、正式なやり取りがあったのかどうかは、本当に混迷していたので分かりません。本当にぽっと行って、そう言われた時には、何が起きているのかさっぱり分からなかったです。

── その頃、先生はどこからいわきまで通勤していたのでしょうか？

日下　平田村で家族と合流した後、しばらく会津に避難していましたが、新年度を迎えるにあたり、いわきにアパートを借りました。長女がいわきの高校に入ることが決まっていたので、家族でいわき市に住むことにしました。

８月には私は葛尾小学校に赴任することになったので、そこから家族はいわきのアパートに。私は船引のアパートに単身赴任という形でした。

三春町での学校再開へ“子どもを大切にすること”の意義を実感

── 葛尾小学校は、どこでどのように再開したのでしょうか？

日下　葛尾村は原発事故の影響で全村避難をしていて、避難先は転々としていたのですが、最終的には三春に避難していました。学校は村が要請して、区域外就学という形で、三春の学校に子ども達を入れてもらっていました。一方、葛尾小自体は、名前を存続させるために、288号沿いのコンビニエンスストア跡地に事務所を置きました。そこには小学校の先生だけではなく、中学校、幼稚園の先生方も含めて、主に管理職７、８名がそこに詰めて、事務整理をしていましたね。管理職でない先生方については、その頃にはすでに兼務辞令が出されて、各地の学校に散らばっていました。

── 子ども達は、避難所からスクールバスで通学したのですか？

日下　はい。三春ダムの周辺に５つぐらいある集落をスクールバスが回っていたので、子ども達は、三春町立の岩江小学校や岩江中学校に通うことができました。私もそのバスに乗って、何をやるわけでもないですが、１年８ヶ月間、送迎にあたってました。

最初にスクールバスに添乗した時は、「誰この人」という感じでしたね（笑）。子ども達は私のことを、本当に送り迎えだけのバスガイドみたいな形で考えていたのかなと思います。毎日顔を合わせていると、気心が知れ、乱暴な言葉遣いをしたりわがままな行動をとるようになったりして、その子の性格がだんだんわかるようになり、それはそれで良かったと思います。

コンビニエンスストアの跡地にあった事務所は、教育委員会が三春ダムの周辺に移った時、一緒に移動しました。そして、「今度は、村で学校を立ち上げるんだ」ということで、学校再開に向けての準備を始めました。

── そうして2013年４月に、三春町にある要田中学校で、仮設の小学校・中学校が開校しました。先生はそこで何年間勤務しましたか？

日下　葛尾小には３年間勤務しましたが、仮設校舎で実際に教育活動ができたのは、１年間だけでした。要田中は三春の学校の中でもデザインがすごく素敵な学校でしたが、子ども達はそんなに多くは戻っては来ませんでした。

それで、クラスを複式学級のような形にして、一つの学級をパーテーションで二つに分けて授業を行いました。教育活動を行うために、建物をどういう風に活用するかというところから話し合いました。

── 震災が起きてから、子ども達と向き合うという、いわゆる学校の先生としての業務ができなかった期間がありました。先生にとって、それはどのような経験でしたか？

日下　単身赴任でいわきから行きましたが、「何しに来てんだろうな」という気持ちがありましたね。当時はダム湖畔の中にあった葛尾幼稚園の副園長でもあって、園児がいるダム周辺の線量計を定点観測するのが私の日課でした。小一時間を掛けて、10箇所くらいを線量計で測る作業です。粛々とこなすしかないな、という気持ちでした。

── そういった経験は、教員としての今の日下先生の考え方に、どのような影響を与えてますか？

日下　村内の学校を選んで戻ってきた子ども達のことを、「本当に一人ひとり、大切にしていかなきゃいけないな」ということを感じるようになりました。大切にするというのは、何でも優しくするということではなくて、その子のために本当に親身になって思いやるというか。そういうことが求められるんだろうな、と思いました。こういう事態になったのであれば、「目の前にいる子どもをじっくり見て、個別にあたっていかなきゃ駄目なんだろうな」という思いにはなりましたね。

── 先生は今、いわき市の双葉町立双葉北小学校で教頭をされていますね。葛尾小を開校させた経験で、何かご自分の役に立っている部分はありますか？

日下　そんなに大それたことではないですが、環境的に似ているということでは、スクールバスがあります。今も双葉の子ども達は皆、いわき市内からスクールバスで一斉に便乗して学校に来ています。５台のスクールバスに乗って学校に来るところは、当時の葛尾と同じです。子ども達が一斉に来て、さよならする時にも一斉にざっといなくなってしまう。「今日は学校でどのようなことを楽しんでもらおうか」「子ども達にどのようなことを体験させようか」ということを先生方と話し合いながら、仕事しています。

言い渡す側と受け入れる側、双方が抱えた「兼務」辞令の難しさ

── コンビニの職員室もそうだったと思いますが、葛尾の勤務の中で、特に印象的だったことは何でしょうか？

日下　当時、避難したからということではありませんが、避難後間もなく中学校の教頭先生が、がんでお亡くなりになったことがありました。また、中学校の校長先生が、「具合が悪いんだ」と言って病院に行かれたんですけれども、病院の待合室で倒れて、結局、脳溢血で亡くなられたということもありました。やはり、とてもご苦労されたのだと思います。

私は８月という途中の段階から葛尾小に入りましたが、その数か月前の春、校長先生が先生方に兼務辞令を言い渡した時は、喧々囂々だったという話を聞きました。その時には、相当なご苦労をされたのだと思います。

――私達も、他の先生方から兼務辞令の難しさについてお話を聞くことがよくあります。今、日下先生がおっしゃっていたような、兼務辞令を言い渡す側の、ある意味で県教育委員会との間に挟まれた中間にいる管理職の先生方の心労は、やはり大きかったのですね。

日下　大きかったと思います。通常の人事だったら本人の希望も考慮されますが、今回は校長先生が本当に何もないような状態で、「どこどこに行きなさい」と、先生方に言わなくてはいけなかったわけですから。詰め寄られて大変だったなんていう話は、後からよく聞かされましたね。今振り返ってみても、兼務で良かったという話は、あまり聞いたことがなかったです。結局、兼務を受ける学校にとってはお荷物みたいな存在だったと思います。

――兼務して良かったと思えたケースがあるとしたら、どのような立場にいられた先生達でしょうか？

日下　うちの家内は、良かったと思える例外なケースだと思います。双葉郡の学校から、いわき市内の学校に兼務させてもらって、理科の専科を持たせてもらったと言っていました。通常、理科は準備が必要だから、大変な科目です。そこに、兼務の家内が入ることになったそうです。じっくり教材研究ができますし、「あの時に私、理科に開眼したんだ」みたいなことを言っていました。専科専属でやっていますから、「子ども達も、理科が好きになった」と言ってもらったこともあったようです。

――少し羨ましいなと思いましたか？

日下　そうですね。でもやはり、職員室での居場所はなかったとも言っていました。

――最後の質問になりますが、これから先、震災の経験がない先生達も増えてきます。日下先生ご自身の経験を、これからの世代の先生達に伝えていきたいと思いますか？

日下　もちろんです。双葉地区の教頭会でも、この 10 年間の状態や取り組みの様子を研究集録に収めました。「双葉郡の小中学校は震災・事故後の 10 年間、こんな風な経過を辿ってきたんだよ」と伝えるものです。

　管理職もどんどん新しくなっていきます。双葉の先生だけではなくて、県内からの先生達も管理職として入ってきています。ですから、双葉郡のことをそういう先生方に知ってもらう必要性を感じます。

――特に伝えていきたいのは、どういったことでしょうか？

日下　今こうやってオンラインなどで教育もどんどん変わりつつありますが、目の前の子どもから目をそらさずに、じっくりその子どもや保護者と向き合うことが、学校の体制として必要だと思います。それをなくしてしまったら、学校の存在価値は失われてしまうとさえ思います。コロナ禍で現在やむなくオンライン授業に取り組まざるを得ない事態になっていますが、子どもとじっくり向き合い、そこから思いやりの精神や人の痛みが分かる子どもを育てていかなければならないと思います。

　教員としてのあるべき姿というのは、今ハッキリは言えませんが、若い先生方にはそれを絶えず模索していってほしいと思います。特にこういう変革期にあたり、「別に学校に集まる必要はないんじゃないか」という風潮もある中、改めて学校の存在価値を考えていく姿勢を持ってほしいと思います。

2022 年1 月 27日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

葛尾村
佐藤 武 先生
さとう・たけし

本宮市（旧安達郡白沢村）出身、中学校校長。教科は美術。2011年3月の震災発生時は相馬市教育委員会に勤務。2012年4月から葛尾町立葛尾中学校に勤務。2021年度インタビュー時は、新地町立尚栄中学校勤務。趣味は映画鑑賞と散歩。

震災当時、佐藤武先生は相馬市教育委員会の指導主事でした。地震直後から市内の学校の状況を見て回り、安否確認を続ける一方、避難所の支援物資担当としても奔走。その後は全村避難となった葛尾村の葛尾中学校の教頭として、避難先の一つである三春町に、葛尾中学校三春校を開校させました。さらに5年後に校長として戻った時には、同校を閉校、葛尾村へ帰還させる役割を担うめぐり合わせもありました。先生が少人数教育の中で、子ども達に身に着けてほしいと願った力とは、どのようなものなのか。震災を経てより強く思うようになったという「教育の持つ力」について、お話を聞きました。

いつ崩れてもおかしくない庁舎で、連日の激務

――まずは3月11日、震災が起きた時にどこで何をしていたかを教えてください。

佐藤　当時は、相馬市教育委員会の学校教育課で、課長補佐兼指導主事という立場にいました。3月11日の震災当日は中学校の卒業式で、僕は途中人事で教育委員会に入ったものですから、その時に教諭でいた向陽中学校の卒業式に教育委員の方の随行で出向き、参列しました。その後に市役所へ戻って、午後2時46分を迎えました。

教育委員会は、相馬市の庁舎の最上階の6階にありました。大変古い庁舎で免震や制震ではなかったために、本当にものすごい揺れで。僕の所からちょうど教育長室が見えて、ご年配の教育長が転んでしまっているのが目に入り、「大丈夫ですか」と叫んだのですが、ロッカーや文書棚が全部倒れてきました。机の下に入ってからも揺れは長かったですが、その揺れが収まった段階で市長から、「これからの対応を考えるため、課長補佐以上は市長室に来るように」という連絡がありました。その時には、6階の庁舎の物は本当に散乱状態でしたね。色々な大事な物を踏んでしまいながら、3階の市長部局まで下りて行きました。集まってからは、市長の「津波がどこまで来るかな」という言葉が印象に残っています。そして、それぞれの担当部署を点検し、市民の誘導をするようにという指示がありました。

――教育委員会の方々は、どのような点検をしていったのでしょうか？

佐藤　我々は学校を回ろうということなり、僕は当時の学校教育課長と一緒に行動しました。当時、山側が山崩れしたという情報があったので、まず一番近くの中村第一小学校を見に行きました。ちょうど中村一小は、「耐震がもう駄目で危ない」ということで校舎を建て替えて2週間くらいの新築でしたので、全く問題ありませんでした。

ところが、街中にある中学校に行ったら、物が倒れたり破損していたりしてかなり厳しい状況でした。大体3時15分頃だったので、子ども達は帰宅させていましたが、「大津波警報が出ているので、もしかしたらここに避難される方が大勢来るかもしれない。準備をお願いします」と校長にお話ししました。

その後、一回役場に戻って屋上に上がってみたら、普段は見えない海というか、海岸線が見えたのです。これはおかしいということでもう一回下りて、また学校回りをしたのですが、海の方面へ学校回りに行った方々が戻って来ませんでした。多分その頃だと思うんですが、大津波が1波ではなく、何波も来たはずなので、その対応をしていたのだと思います。幸いにして教育委員会関係では、外に出た方は全員戻ってきましたけれども、多分、他の部署でお二人が戻って来なかったと思います。

――その津波で、海沿いの学校はどのくらい被災したのでしょうか？

佐藤　海沿いの学校には、実際に津波で流された学校はありませんでした。ちゃぷちゃぷという感じで校庭まで海水が来た所はありましたが、校舎内まで水が浸水してきた学校はないと思います。ただ、一番海側の磯部中学校など海の方の中学校では、亡くなった方がおられます。ちょうど中学校が卒業式で、磯部中でも式が終わった後に子どもは返していたのですが、地震が起きた後には、学校が高台にあるので住民が避難してきていました。しかし、家に戻った方々も何人かおられて。それから、誘導に当たっていた消防団の方が亡くなられたり。全部で多分、相馬市は400何十人の方が亡くなられたと思います。その中には当然、子どもも何人かはいました。

そして地震の影響で、完全に連絡系統は寸断していました。携帯も通じないし、直通の電話も海の方には通じません。ただもう、後から考えたら当たり前ですが、電線も何もぐちゃぐちゃですから。当然、向こうは停電もしているし、電話も通じる状況ではなかったですね。

また、どこの自治体でも非常変災があった場合は、その部署によって動く役割が決まっています。教育委員会は支援物資担当ということで大枠で括られていて、避難所設営などは福祉部門が担当、というように決まっていました。

それで教育委員会は避難所で必要となる物資を確保しなくてはということで、いったん市役所に戻り、私とあと何人かで、スーパーのヨークベニマルや当時のジャスコに向かいました。主にはベニマルですね。ベニマルに町のスクールバスで行って、パンなど、避難を想定した物資を確保する業務に当たりました。この尋常ではない事態に、店の人も途中からは「もう全部持って行っていいです」と。とにかく食べられそうなものを全部スクールバスに積んで戻った頃、住民の避難が始まっていました。先程お話しした新築の中村一小は、「あそこは新築したばっかりだから」と避難してきた方が多かったので、そこに配って、それ以外の所にも配り歩きました。

だんだん暗くなってきた時に、「海の方からまだ人が来ていない、中村二中に避難している方が何人かいる」という情報が入って、そのスクールバスに乗って中村第二中学校に向かったのですが、途中からもう津波が来ていたので、バスではたどり着くことはできませんでした。津波で流れてきた車も、垂直に立っていますし。やはりその時点ではもう「尋常じゃないな」というのはあって、臭いも、油の臭いというか嗅いだことのないようなヘドロの臭いがまん延していました。そこからは本当にズボズボ泥の中に入って向かい、避難していた方々をスクールバスに乗せて、近くの避難所に送り届けた後、我々は市役所に泊まりました。

――夜中も日が明けてからも、余震は続いていました。役場の庁舎も大変古いというお話でしたが、そこを拠点に業務を続けたのですね。

佐藤　余震が山程あったので、もう市役所自体がいつ崩れてもおかしくない状態でしたが、やはりそこで情報を待ったり、対応するしかないので、教育長も含めてそこで全員が過ごしました。食べ物も多分、なかったと思います。

　次の日からは教育委員会は安否確認と、支援物資が担当でしたので、そちらの手配をしました。支援物資担当については普通は教育委員会の総務課あたりでやるのですが、総務課の主だった人達の自宅が津波の被害に遭っていて、教育委員会の中でもご家族が流されたりした方が何人かいました。僕の家は少し海から離れていたので、「じゃあ私の方で、ある時期までやります」と、支援物資のまとめをやっていました。

　多分、2日目の夜だったと思うのですが、最初に届いたのは自衛隊と、協定している流山市からの大量の水でした。それも夜中、1時とか2時頃に届いたのですが、本当に嬉しかったですよね。ただ、水って重いのです。その頃はまだ避難のバタバタで、機械を使うということもシステム化されていないので、夜中に残っている人を庁内放送で呼んで、どんどん手作業で重い水をトラックから下ろして、積み上げて。やがて、フォークリフトで運ぶパレットを準備して、そこの上に上げていく作業になりました。あとはそのパレットごと、色々運ぶという物流の専門家の支援が入って収まりました。ただそのプロが来るまでは、かなり市役所自体も大変だったと思います。皆がやったことないことをやっているので。そして日中は別の業務をやっていますからね。僕らの場合、一番は学校再開と、安否確認。最初の部分は安否確認ですよね。電話が通じないので各学校に問い合わせはするのですが、各学校でも電話通じないので大変でした。安否確認と、その支援物資の担当作業を3月のある時期までやっていました。そして普通は4月6日が学校の始業式、入学式ですが、6日は絶対できない。4月18日に入学式や始業式をやるという方針を決めました。

　また、地震発生の2日後あたりから、どんどん原発が爆発していきました。そうしたら、南相馬市の小高区や南相馬市の一部から、区域外就学の申請がどかっと来ました。のべ1000人ぐらい。そちらの対応も、日中はしていましたね。結局、相馬市が一番大変だったのは、「被災地でありながら、南相馬等の区域外就学も受け入れる状況」になってきたことでした。

── 市役所や教育委員会の方々は、庁舎から帰れない程に多忙な日々が続いていたのでしょうか？

佐藤　最初のうちは、私だけではなく若い方や、ある程度の人達は家には帰れなかったですね。年配の方や女性の方はそうではなかったと思いますが。一方、教育委員会の中でも、「家がない人」は沢山いましたからね。帰りたくても、浜の方の人達は家がない。行くところがないとなると、避難所に行くか、あるいは親戚の家に行くかということになるので、ずっと市役所に泊まっていました。

　多忙さに関して言えば、僕ももう疲れてきてしまってどうしようもなくて、4月1日に午前中3時間だけ休みをもらいました。それが多分、地震が起きて以来、最初の休みです。それは僕だけではなくて、市役所の人たち皆がそのような状態だったと思います。

── 全国から色々な支援が届いたと思いますが、それらを受け入れる支援物資担当として過ごす中で、何か感じたこと、考えたことはありますか？

佐藤　全国から本当に色々な物資の支援があり、大変ありがたかったのですが、やはりその「物」でも「人」の支援でも、「中途半端な支援」では被災地を駄目にしてしまいますね。「中途半端な支援」には色々な意味があると思うのですが、例えば、仕分けされていない支援物資。この場合、被災地ではそもそも仕分ける人がいないのだから、はっきり言うと、ゴミにしかならないのです。「大切に使ってください」などという手紙が入っていて、色々な文房具が混ざったものというのは、それはそれで嬉しいですけれど、とても使いにくいのです。支援で入ってくる人も、色々なイベントで入ってくる人も、被災地の人達を思って入ってくるのでしょうけれども、やはりオーナーシップというか、支援されるその人の立場で考えてくれないと、重荷にしかならないと感じました。

学校再開の準備期間は一年「少人数の学校にしかできないこと」を目指した

── それでは、震災からおよそ1年後、2012年4月1日からのお話を伺います。教頭として、双葉郡の葛尾中学校に赴任したそうですが、当時はどのような状況でしたか？

佐藤　葛尾村に赴任が決まった時には、葛尾村は全村避難をしていたため、村自体に入れませんでした。葛尾村の学校は全部休校していて、全国各地の避難先の学校で、子ども達は区域外就学。我々としては、翌年の2013年4月1日の学校再開に向けてその準備を進めるということで、一年間がその準備期間ということになりました。その準備期間に当たったのは、三春町の役場に小学校と中学校が一緒になっていたのでそれぞれの校長と、小学校の教頭、さらに私が中学校の教頭として赴任。それ以外の先生方は全部、兼務という形で色々な学校に散っていましたね。だからその4人の管理職と小学校の事務職員1名の5名で学校再開の準備をしようということで始まりました。まずは「場所をどこにしようか」ということでしたが、葛尾村としてはちょうどその時、役場が今の三春町にまとまってあったのです。その役場のまとまりの中に入っていって、村長や役場のそれなりの立場の方々もいたので、そこで学校再開を目指しました。

　その時には、まだ学校をどこにするかということも決まっていませんでした。最初のもくろみとしては、そこから一番近い旧桜中学校の校舎を考えていましたが、そこが何かの事情で無理だということになりました。7月、8月頃になって、当時、要田中学校という学校がもうすぐ閉校になるという話を聞き、その校舎はどうかと話が進みました。三春町と葛尾村で交渉して、快くOKをいただきました。

── 子どもがいる世帯に学校再開の通知を出したのは、いつ頃でしたか？

佐藤　まずは大体夏休み頃から、どんな学校にしたいかといった学校の基本方針づくりが始まったので、おそらく夏休みが終わった辺りから、全世帯にアンケートを取り始めたと思います。

　実は7月2日に校長先生が突然心筋梗塞で亡くなってしまって、代わりの校長先生が来るまで一応、僕が校長の職務代理者となっていました。ちょうどその時期というのは、どんな学校にするかといったことを模索していた時期でした。その時期を過ぎると、今度は「こんな学校にしたいから予算を要求します」と、村が国と交渉するのですが、9月1日に新しい校長先生が来るまでやりましたね。

── 実際に、どのような学校にしていきたいという話し合いがあったのでしょうか？

佐藤　これまでの葛尾中の良さを引き継ぎたいと思いながらも、「やはり同じ学校を作ったのでは、多分厳しいだろう」という考えもありました。子ども達はもう色々な学校に行っていますから、そういう子達が「来て良かったな」と言えるような学校にしたいと。「少人数の学校にしかできないことをする学校にしよう」ということで、例えば修学旅行は2年に一回は海外研修にしようとか。

　あとは緊急事態の時でも、どこの県や国に行っても、実力が発揮できる子というのは、「物を持っている子ではなく、学力が付いている子だ」ということで、そういった力を付けさせたいと考えていました。その方法の一つとして、例えば学校が終わった後には学校内に「村営塾」を開こうとか。そういうことを協議していき、村の方でも大体こちらから要望したことはOKしてくれました。

　それから、今は当たり前になっていますけれども、ICTを学校の基本にしようと。これもこちらで要望したら、あの当時はiPadもあまり知っている人もいなかったのですが、ある程度入れてもらえたり。ICT支援員もいないと、それが運営できないだろうということで、そういう要望も全て通りました。当時からすれば、かなり先進的なことにOKをもらっていましたね。

── 開校当初、生徒は何人集まりましたか？

佐藤　5名です。途中で1人転校してきて6名になり、その次の年から8人、11人、12人と増えました。子ども達は少なかったですが、村の方々などからは、「村の人口が少なくなったのは原発のせいもあったけれど、やがて迎える事態だった。早まっただけだ」と声も結構あったのです。結局は葛尾や双葉郡のような少人数の学校、少人数の教育というものが、やがて日本国内では多くの学校で直面する現実となります。それこそ何年か早く経験しているだけだということです。だから、葛尾の時も先生方にも言っていたし、ここでも言っているのですが、少人数というのは日本では避けられない状況で、ここが「先行事例」になりうるだろうと思いました。

── 葛尾村では比較的多くの方が、三春町に避難したのでしょうか？

佐藤　三春町に行った人は多かったと思います。葛尾村の仮設住宅は、元の住宅の地区ごとに固められていたのです。そのため、ある程度コミュニティーが作られながら避難できたので、やはりそれを組織した葛尾村の方がとても賢かったと思います。同じく相馬市も、元の地区ごとで避難所や仮設住宅、その後の復興住宅に移っていきます。阪神淡路大震災等の色々な事例を勉強された方が、そういう風に組織していったのだと思います。

── そういったコミュニティーがある程度出来上がっていた中で、仮設の学校が開校されることは、地域の方々にとっても喜ばしいことでしたね。

佐藤　とても喜んでいただきました。ただ、「子どもは別な学校にすっけども、よかったよね」という立場の方もいました。あの時の保護者の考えとしては、もう転校させたくないというものも多かったと思います。それで、「うちの子どもは葛尾に行かせないけども、葛尾の学校は応援すっから」と、何人かから言われました。結局は学校が開校するまでに子ども達は福島に行き、それから会津に行き、会津でも転々としていましたから。少なくとも 3、4 校はもう転校していますからね。さらにまた三春町の小学校や中学校から、葛尾にできる学校に転校させることを「なかなか厳しい」と考えるのは、仕方のないことでした。

本来あるべきところで、幼小中の一貫教育「葛尾の子」として育てたい

── 先生は少し時間を置いて、再び葛尾中に、今度は校長先生として赴任しますね。教頭の時、開校の現場での指揮を執りながら始まった学校に、また校長として戻ってきた形でした。校長として、学校を三春から葛尾に帰還させたお話を聞かせてください。

佐藤　めぐり合わせで新しい学校・三春校を作って、今度はその学校に「校長になって行け」と言われた時、同時に「あなたの仕事は、開校した学校を閉じて、村に帰還することだよね」と言われました。それが、あなたのミッションだと。本当は、僕が行く 1 年前に学校は村に戻るはずだったのですが、何かの事情で 1 年遅れてしまって、再びそのめぐり合わせになりました。

　閉校する時には、開校する時の子ども達や保護者、三春町の方々のことが、やはり思い出されました。開校する時に、三春町の町長さんや議員さんから、「葛尾村の方々は大変だったよね。三春町は何でも協力すっから」とお話をもらった時には、やはりありがたいなと思いました。それで今度は、閉校する時にも村の方々と議論して、誰を来賓に呼ぼうかなんて話になった時に、「やっぱり三春町の方々は呼ばないと、多分、報いられないよね」と。そうして、三春町の方々も、当然町長もお呼びして、閉校式をし、引っ越しをしました。

── やはり先生からすると、少し寂しい気持ちでしたか？

佐藤　でも本来あるべき所に戻るので、寂しいというよりも、「本来の場所で、本来の地に立とう」という気持ちの方が大きかったと思います。本来と言っても、中学校は中学校に戻るのではなく、小学校と一緒にやろうという形ですが。この点についてもかなり議論したのです。中学校は中学校で、お金をかけて結構直していただきましたからね。体育館も新しくしたし、そちらに戻るという選択肢もありました。ただ、中学校としては小学生が来ないと中学生の人数が増えないわけです。だから、小中を同じ場所で一貫してやるということも、葛尾の強みだろうなということで進めました。それは絶対に、守ろうということで。

　さらに、その敷地に幼稚園も置いて、幼小中が同じ敷地内で常に交流しながら過ごすことで、必ずその幼稚園の子は小学校通って中学校に入ってくるという流れを作りました。「9 年間、あるいは 10 何年間を通して葛尾の子として育てたいな」という部分は譲れなかったですね。

── 本来の地に戻ることは、三春に残ると決めた葛尾の方々にとっては、少々寂しさを感じさせるものだったかもしれませんね。

佐藤　結果的に、その最後の年に三春の校舎で学んでいた中学 2 年生と 3 年生は、全員が葛尾村に戻りました。ただ、校長としての最後の 1 年間、先生方には「子ども達には、一緒に戻ろうとは言わないようにしよう。あくまでもそれは子ども達と保護者が決めることであって、我々は決めたことに対して精一杯応援するし、それが正しい判断だよね」ということを何度も話しました。皆で戻ろうということは一切言わなかったですね。

　最終的に戻ることを決めても、住居は三春町にあった子もいました。だからそういった子は三春町と葛尾をスクールバスで往復しながらの通学でした。そういうハンディを負いながらも葛尾に戻ると決断した子ども達と保護者に対しては、かなり重い責任があるなと思いましたよね。

── 震災を経て、教育や学校に携わる考え方に、何か変化はありましたか？

佐藤　今までも「教育の力って、ある程度大切だな」って思っていましたし、大きいなと思ってはいたのですけれども、やはりあのような困難な状況の中で、「変えられるの、教育しかないな」という思いが、より強くなりましたよね。震災の時、相馬市でほんの一時期、支援物資担当をしていたというところもあるのですが、物とかの支援はやがてなくなりますよね。けれども、教育の力というものは、そういう物を超えて、その人本人に身に付かせるものだから、「それ自体がすごい力になるな」という風には、改めて思いました。

　子ども達にも今も言うのですが、「何かあって逃げるときにはお金も欲しいだろうし、物も欲しいだろうけれども、最悪そんなものがなくたって、命さえあればあとは自分の知識とか知恵さえあれば、再建は必ずできる」という確信は持ちましたね。やはり教育の力は大きいなと思います。

2021年12月14日
（聞き手／久保田彩乃、千葉偉才也）

刊行に寄せて

ある被災地で活動していた折、地元の郷土史家から言われたことがあります。「災害復興に関わっている人達の記録を残すべきではないか？」。今しかできないぞとその先生は言い、10年経てばあの時に現場で判断した人達は引退し、20年経てば、あの場所に立っていた人達のほとんどが引退し物語が失われてしまうと。今回の記録では震災の直後では話しにくかったことも、10年経つことで話せることもあるでしょう。どちらにせよ今しか残せない記録となったはずです。

福島での東日本大震災の災害対応は、まだ収束したとは言えません。現在進行形で復旧させつつ、地域の復興とは何かを考え続けなければいけないし、災害の経験を次の世代に繋いでいくのか、学校の先生への期待も大きくなります。

東日本大震災は複合災害であり、その状況は多種多様で一言では表せません。だからこそ、様々な姿、形で記録を残し、ポリフォニック(多声的）な視点を持つことが必要です。この記録は、東日本大震災のすべてを伝えるものではもちろんありませんが、それでも大切なピースの一つとなったはずです。

これからは東日本大震災を経験していない若い先生達が教壇に立ちます。この記録は諸先輩が、何に悩み、苦労し、乗り越えたのか、復興への学びや気づきを読み取れたらと考えています。

福島県立博物館
主任学芸員　筑波匡介

おわりに

先生達へのインタビューに終わりが見えてきた頃、アメリカの作家レベッカ・ソルニットが述べた「災害ユートピア」を思い出すことが多くなりました。ソルニットの指摘した、「災害後、被災者達によって一時的な現象として理想郷的コミュニティが創出されること」とは少し異なりますが、「災害後の学校もまた、ユートピアだったのではないか」という考えが浮かびます。

なぜなら、震災と原発事故からの10年を振り返る今回の企画を通じ、これまで光が当たりにくかった先生達の体験や想いに触れることで、当時の悲劇的な側面に触れる場面も多々あるだろうと想定していたにも関わらず、その予想が覆されたからです。もちろん、インタビューの中にはそうした悲劇的な側面や内容は一定程度ありましたが、総じて「子ども達のために学校を再開させる」ことや「新しい学校や教育を創れることの楽しさ」といった、未来志向の想いに出会うことが圧倒的に多かったのです。

そして、これは一種の「教育ユートピア」なのではないかと、考えるようになりました。悲劇的な中にも、学校を再開させていく過程での高揚感が存在したり、振り返るとその時期が「一番楽しかったかもしれない」という率直な想いなどにも、今回のインタビューで出会うことができました。本冊子が、単なる記録集としてではなく、「起きあがる学校」と題したのは、そうした先生達の想いや姿勢に影響されたからです。

しかし、本冊子が刊行となるいま、震災と原発事故から11年が経ちましたが、被災地域の教育現場でさえ、震災以前の学校組織・文化への回帰が進み、「あの時」に見られた教育ユートピアの要素は薄れつつあると感じています。教育に関わる者として、その力の働き方には一種の残念であるという感情が私の中にもあることは否めません。

ただ、「あの時」を体験、経験した先生達だけではなく、多様な先生達が今も学校現場で子ども達に向き合っています。「あの時」に先生達が、「どのように考え、行動してきたか」に関心を寄せる若い先生達が、過去に触れる際に手に取って参考にしていただける資料の一つに本冊子がなればと心から願っています。

最後に、本企画を進めるにあたり多くの方々や団体にご協力をいただきました。特に、企画に関心を持って助成をしていただいた日本財団、対象を検討する中で助言や対象者との調整を手伝っていただいた双葉郡教育復興ビジョン推進協議会の清野幸恵さん、配布に際し協力をいただいた福島県教育委員会義務教育課、企画草案段階から相談に乗っていただきインタビューでの協力もいただいた一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマの久保田彩乃さんには改めて感謝を申し上げます。

また、この企画を最終的に実施したいと思うきっかけになったのは、2020年度で閉所した大熊中学校仮設校舎での先生達との出会いであったことも記し、謝辞に代えさせていただきます。

一般財団法人 リテラシー・ラボ
代表理事　千葉 偉才也

起きあがる学校

3.11から10年
— 福島県双葉郡の先生へのインタビュー

2022年5月31日 発行

発行人　千葉偉才也

編集人　千葉偉才也

発行所　一般社団法人 リテラシー・ラボ

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂 1-12-27
コンフォートテラス1005号
TEL：050-5275-8345
Web：http://literacy-lab.org
Mail：info@literacy-lab.org

企画　一般社団法人リテラシー・ラボ

助成　日本財団

取材　千葉偉才也／久保田彩乃／筑波匡介

ライター　天野宏美／中森舞

制作協力　松本美鈴（早稲田大学商学部３年）／中田瑞希（早稲田大学社会科学部３年）

装丁・デザイン　marutt Inc.

企画協力　福島県立博物館
一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ

本冊子は、2021年度に実施したインタビューをもとに構成したものです。
取材後に状況等が変更となっている場合があります。

© 一般社団法人リテラシー・ラボ 2022

Fukushima Teacher's INTERVIEW Rise up School

起きあがる学校

3.11から10年
ー福島県双葉郡の先生へのインタビューー

発行日：2022年5月31日／発行：一般社団法人 リテラシー・ラボ

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION